
クランベールに行ってきます

山岡屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

克蘭ベールに行ってきます

【Nコード】

N38030

【作者名】

山岡屋

【あらすじ】

夏期休暇の初日、昼間から惰眠を貪っていたOLは、目覚めると知らぬ白衣のメガネくん顔に顔を覗き込まれていた。

そこは発展した科学力を有し、謎の古代遺跡が点在する異世界の克蘭ベール王国。

俺様科学者のメガネくんには有無も言わず、行方不明の王子の身代わりを押しつけられ、彼女の受難の日々は始まった。

古代遺跡と王子失踪の謎を巡るちょっぴりミステリ風味の異世界トリップ恋愛ファンタジー。――の皮を被った、なんちゃって

S F かも。

※性描写は一切ありませんが、会話の内容に下ネタが含まれることがあります。

※作者本人による自サイトからの転載です。

First Kiss (1)

時折、カラカラと妙な音を立てて首を縦に振りながら、年代物の扇風機が生ぬるい空気をかき回している。

開け放たれた窓にかかるレースのカーテンは微動だにしない。風のない真夏の昼下がりには地獄のような暑さだった。

「……あつつう……」

フローリングの床に敷いたお昼寝マットの上に、立川結衣は細長い四肢を無造作に投げ出して変死体のごとく転がっていた。

腰まで届く長い髪が汗で身体の間を流れるところに張り付いている。

冷えすぎるのでエアコンは嫌いなのだが、さすがにこの暑さに耐えきれず、側に転がっていたリモコンを拾うとスイッチを入れた。

窓を閉めるため窓辺に寄ってカーテンを開くと、雲ひとつない抜けるような青空の下、生い茂る街路樹の深い緑の中からセミの大合唱が暑さを倍増していた。

結衣は大きなため息と共に窓を閉め、カーテンを引いた。

こんな日に目的もなく外を出歩いても、日焼けして熱中症になるだけだ。

結衣は地元中小企業に勤める入社三年目の一般職会社員、平たく言えば普通のOLである。

今回、有給休暇の消化も兼ねて十日も夏期休暇を取ったものの、盆に三日間帰省する以外は特に予定もなく、初日から家でゴロゴロしていた。

冷蔵庫の麦茶をコップ一杯分一気に飲み干して部屋に戻ると、狭い部屋は先ほどより明らかに涼しくなっていた。

結衣は程よく冷えたお昼寝マットの上に再び横になると目を閉じた。

どうせ何もする事はない。今日は思う存分寝てやろう。そう思っ

た途端、うとうとと眠りに落ちていった。

First Kiss (2)

ふと、人の気配を感じて結衣は目を覚ました。しかし、怖くて目を開けられずにいた。ボソボソと男の声がしたのだ。

辺りはまだ明るい。昼間から泥棒？ それとも痴漢？

玄関の鍵が開いていたのだろうか？ 昼間にベランダや窓からは侵入しないだろう。

相手の目的がよくわからないので、様子を探ろうと少し目を開けて驚いた。

至近距離でメガネをかけた見知らぬ男が顔を覗き込んでいたのだ。慌てて目を閉じる。

蜂蜜色の髪に濃い緑の瞳だった。なんか外国人っぽい。

「殿下ではないようだが……。それにしてもよく似ている。……つて、おい！ さっき目を開けただろう」

そう言って男は結衣の額をペチッと叩いた。

「……いった……」

額を押さえて横向きに転げた結衣は、横柄な不法侵入者に怒りがこみ上げてきて飛び起きざまに怒鳴りつけた。

「あなた誰?! ひとの部屋で何やってんのよ、変態！」

男はひるむことなくメガネの奥から冷ややかな目で結衣を見つめると、もう一度額を叩いた。

「ねぼけるな。どこがおまえの部屋だって？ よく見ろ」

言われて結衣はまず自分の周りを見た。身体の下からお昼寝マットが消えている。床はフローリングからタイル張りに変わっている。ゆっくりと首を巡らせると、ドーム状の天井に覆われた巨大なガラスの筒の中にいた。しゃがんだ男の背後に筒の出口が穿たれ、その向こうにキーボードとディスプレイを備えたコンピュータのようなものが見えていた。

結衣は辺りをキョロキョロと見回しながら男に問いかけた。

「ここ、どこ？ どうして私、こんな所にいるの？ それにやっぱり、あなた誰？」

男は結衣をまっすぐ見つめて質問に答えた。

「オレは克蘭ベール王国科学技術局局長、ロイドⅡヒューパック。ここは王宮内にあるオレの研究所だ。おまえがここに居るのは一種の手違いだろう」

「手違いって何？」

結衣が眉を寄せて訝しげに見つめると、ロイドは再び説明した。

昼食後、王子の姿が見えなくなった。王子の世話係、クラーク氏は極秘裏に王宮内を隈無く搜索したが、どこにも見当たらない。そのため、王に報告し、王の勅命を受けたロイドが自作マシンで王子の搜索を行う事になった。

「それが、この装置だ。この装置は指定された範囲から指定された検索パターンにより、人物に限定してパターンマッチングを行い、一致したものを一致精度の高い順に画面表示する。オプションでここに転送する事も可能だ」

「難しい事はよくわからないけど、ようするに人捜しマシンなのね。それで、私が王子様と似てたからここに転送されたと」

「そういう事だ」

一応大体の事情はつかめた。人を転送するなど、ここはかなり高い技術力を持った国のようだ。

だが、結衣にはその肝心なところがわかっていなかった。

「で、克蘭ベール王国ってどこの国？」

ロイドは少しの間、黙って結衣を見つめた後、呆れたように言った。

「世界一の大国を知らないとは、おまえどこの辺境からやって来たんだ」

日本は確かに国土面積も小さく、溢れんばかりの借金もかかえているが、一応先進国だ。普段愛国心などとは無縁の結衣も辺境呼ばわりされては、さすがにムツとする。

「日本よ。それに世界一の大国ってアメリカじゃないの？」

ロイドは不思議そうに首を傾げた。

「ニッポンにアメリカ？ どっちも聞いた事ないな」

「私だってクランベールなんて聞いた事ないわよ。どこにあるの？
地図見せて」

「やれやれ」

わざとらしく大きなため息をついてロイドは立ち上がった。それを見上げて結衣は思わず目を見張る。

（この人、大きい……！）

背の高い結衣が大きいと思える男はあまりいないので、たまに見かけると驚いてしまうのだ。

ロイドはガラスの筒を出てすぐ側にある机の引き出しを探ると、地図を持って引き返してきた。

再び結衣の前に片ひざを付いてしゃがむと、広げた地図を結衣の目の前に突きつけた。

「真ん中の一番大きい大陸がまるごとクランベールだ。で？ ニッポンはどこだ？」

見た事もない文字と見た事もない形状の大陸が並ぶ地図を凝視したまま、結衣はロイドに問いかけた。

「これ、世界地図？」

「ああ。世界地図も見た事ないのか？」

呆れたように嘆息するロイドに、結衣は叫ぶように反論する。

「だって！ 私の知ってる世界地図と違うんだもの！」

「はあ？」

キョトンとするロイドに結衣は手の平を広げて差し出した。

「書くものちょうだい」

ロイドが白衣の胸ポケットからメモ帳とペンを取り出して渡すと、結衣は床の上でそこに簡単な世界地図を書いた。それをロイドの前で指し示しながら説明する。

「ここがアメリカで、ここが日本。私の知っている世界はこうなの

！」

ロイドはしばらく結衣の書いた世界地図を黙って見つめていた。少しして、額に手を当て天井を仰ぐとひとつ大きなため息をついた。そして俯くと頭をガシガシとかきむしった。

「面倒な事になったみたいだぞ」

「どういう事？」

今ひとつ状況の飲み込めていない結衣は首を傾げてロイドを覗き込む。

ロイドは横目で結衣を見ると口を開いた。

「おまえがここにいるのは手違いだと言っただろう。オレはオプシヨンの転送設定なんかしていなかったんだ。装置の検索モジュールに潜在バグでもあったのかと思ったが、事はそんな単純なものではなさそうだ。装置に誤動作を起こさせる何らかの要因があったとは思えない。でなければ、ここに異世界の人間が転送されるはずはないからな」

学者の言う事は無駄に小難しくていけない。結衣はロイドの言葉を頭の中にかみ砕いて自分なりに理解した。ようするにここは結衣の知らない世界。

「異世界……？」

「そうだ。おまえは異世界から来たんだ」

ぶっきらぼうにそう言うのと、ロイドは立ち上がり、

「クラークさん、まずい事になった」

そう言いながら、ガラスの筒から出て行った。

結衣がそれをガラス越しに目で追うと、ロイドは部屋の隅に控えていた初老の紳士に何か話しかけている。紳士は最初驚いたような顔をした後、ロイドの話を聞きながら時折何度か結衣の方を見て頷くと、足早に部屋を出て行った。

結衣はその様子を呆然と見つめながら、停止しかけた頭でポツンとひとつ考えた。

異世界って、外国とどっちが遠いんだろう。

First Kiss (3)

クラーク氏を見送った後、ロイドは再び結衣の側に戻ってきてしやがんだ。

自分の理解の範疇を超えている事態に、半ば放心状態で結衣はロイドに尋ねた。

「私、日本に帰れるの？」

「現時点では、何とも言えない」

「やけに冷静なのね。この国ではよくある事なの？」

「過去に何度かあったらしい。それにオレの研究課題のひとつでもあるしな。おまえにはしばらくの間協力してもらう」

ロイドは先ほどクラーク氏に話した事を結衣にも告げた。

結衣を転送してしまった原因が判明するまで、この装置は使えない。また誤動作を起こしては困るからだ。

王子の搜索は、引き続き転送できない機能縮小版の検索マシンで行う事になる。だが、機能が縮小されている分、正規版に比べておそろしく時間がかかる。そのため、人による搜索隊も結成された。

王子の不在を公にするわけにはいかない。搜索隊も信頼できる少数精鋭となる。こちらも時間がかかる事は必至だ。

「そこでだ。殿下が見つかるまでの間、うり二つのおまえに身代わりを演じてもらいたい」

有無を言わさぬ命令口調にムツとして、結衣は間髪入れずに拒否する。

「無理よ！ 王子様って男でしょ？ 私は女なのよ」

「確かにそのようだな……」

ロイドは結衣の胸の辺りを見つめた。そして、

「体型的には大して問題ないと思うが……」

と言うと、指先で結衣の胸をツツと撫でた。

ショートパンツと、ノーブラにキャミソール一枚のお昼寝スタイルの結衣は、生の胸を撫でられたような衝撃に背中の中真ん中に悪寒が走った。

「触らないでよ、エロ学者！」

咄嗟に胸をかばってロイドを叩こうとしたが、ヒョイとよけられ空振りに終わった。

悔しいのでロイドを睨んでわめく。

「どうせ胸小さいし、背高いし、男と変わらないわよ！昔から、何食べてそんなに大きくなったの？とか、毎日牛乳飲んでるの？

とか、聞き飽きてるわよ！牛乳なんて大嫌いよ！」

ロイドは呆気にとられて結衣を見つめ嘆息した。

「話が飛躍しすぎてるぞ」

そして、そう言った後、クスリと笑う。

「そうか、背が高い事を気にしているのか。殿下と同じなら、オレにはちょうどいいけどな。あんまり小さいとキスするのも一苦労だ」

呑気に笑うロイドに、結衣は一気に脱力して肩を落とした。

「あなたの女の好みなんて、どうだっていいわよ」

「まあ、体型はともかく、その声は何とかしないとな」

「だから、無理だって言ってるでしょ？」

「オレにかかれば無理ではない」

ロイドはニヤリと笑い、ポケットからピルケースを取り出した。フタを開け、中から直径二〜三ミリの銀色の粒を指先でつまむと、結衣に差し出した。

「こいつを飲め」

結衣は顔を近づけて、ロイドの指先を見つめる。

「何？これ」

「声帯の振動を制御するものだ」

結衣は腕を組み、眉間にしわを寄せると、苛々したように言った。「学者語でしゃべらないで。わかるように説明して」

ロイドは面倒くさそうにひと息つく。

「これを飲めば、女の声が男の声に変わるんだ。わかったらさっさと飲め」

そう言って、銀の粒を結衣の鼻先に突きつけた。

結衣はその手をはたと、ロイドを睨んだ。

「イヤよ！ あなたの作ったものなんて信用できない！」

「誰に向かって言っている」

怒りにも似た不快感を露わにして、ロイドが結衣を睨め付ける。

その静かな迫力に気圧されて、幾分畏縮しながらも結衣は反論する。

「だって、この機械だって壊れてたじゃない」

両手を広げて指し示すと、ロイドは額に手を当て目を伏せた。

「壊れてたわけじゃない。誤動作は想定外の外的要因によるものだ。オレが欠陥品を作ったのでも、今日初めて動かしたのでもない。これまででは正常に作動して、それなりの実績もある。でなければ、大切な殿下の御身の搜索にこの装置を使用する事を陛下がお許しになるわけないだろう」

そして、再び銀の粒を結衣に差し出す。

「こいつも、一年かけてオレが自分の身体で臨床試験を行っている。人体への実害も常用による弊害もない事は立証済みだ。安心して飲んでいい」

結衣が少し安心しかけた時、ロイドが余計な一言を付け加えた。

「もつとも、オレが試したのは男用だから女用のサンプルは欲しかったところだ」

途端に結衣はロイドを睨むと益々頑なになった。

「私を実験台にしようとしてたわね？！ 絶対、飲まない！」

「男用も女用も高低の設定が違うだけで、基本仕様は一緒だ」

ロイドがいくら取り繕っても、結衣はもう聞く耳持たない。

「絶対、イヤ！」

結衣が言い放つと、ロイドはうんざりしたように顔をしかめて小さく舌打ちした。そして、いきなり結衣を押し倒した。

小さな悲鳴を上げて床に背中をつけた結衣が、抗うように伸ばした両の手首をロイドがすかさずつかまえる。大きな身体でのしかかれ、身体全体で押さえ込まれ身動きができなくなった。

ロイドはつかまえた結衣の両手首を左手ひとつで掴むと、頭の上で床に押さえつけた。

「イヤッ！ 放して！」

今にも陵辱されそうなこのシチュエーションに恐怖して叫ぶと、結衣は目の前に迫ったロイドの顔を涙目で睨んだ。

ロイドは空いた右手で銀の粒をつまみ、結衣の目の前に差し出すと冷ややかに命令した。

「口を開けろ」

結衣は銀の粒をチラリと見た後、目と口を同時に固く閉じて横を向いた。

再びロイドの舌打ちが聞こえ、乱暴にあごを掴まれると無理矢理正面を向かされた。目を開くと不機嫌そうなロイドが見下ろしている。

「なんとしても、飲んでもらう」

無然としてそう言った後、ロイドは意地悪な笑みを浮かべた。

「両手がふさがってるからな。口移しだ」

ロイドは舌を出すと、舌先に乗せた銀の粒を結衣に見せつけた。思わず逃れようと抵抗するが、相変わらず身動きができない。近付いてくるロイドの顔を正視できず、結衣は目を閉じて叫んだ。

「イヤ————ッ！」

叫んで開いた口の中に何かが飛び込んできた。どうやら結衣の口の中にロイドが銀の粒を吐き出したらしい。

予想外の事態に結衣は、咄嗟に目を開き息を吸い込んだ。その拍子に飛び込んできたものが、喉の奥へゆっくりと滑り落ちていく。吐き出そうと頭を少し持ち上げたところを、ロイドが手の平で口を塞いで頭を床に押しつけた。

少しの間そのまま、ウーウーうなる結衣をロイドは黙って見下

ろした。そして、

「そろそろいいか」

と言うと、結衣の拘束を解いて身体を起こし床の上に座った。

結衣も起き上がると、首を押さえて咳き込んだ。

「ったく、手間を取らせるな」

面倒くさそうに言うロイドを、結衣は涙目で睨む。

「なんて事するのよ！　ひとの口の中に！」

「おまえが口移しはイヤだと言うからだ」

「あなたの唾液まみれのものを放り込まれたら口移しと変わらないじゃないの！　っていうか、吐き出したもの飲まされるくらいなら口移しの方がマシよ！」

拳を握りひざ立ちで怒鳴る結衣を見て、ロイドはニヤニヤ笑う。

「なんだ、オレとキスしたかったのか。それは悪い事をしたな」

「どういう思考回路してるのよ！」

「超優秀な思考回路だ。丁重に扱えよ」

そう言ってロイドは自分の額を指先でコツコツ叩いた。その横っ面を思い切り張り倒そうとして、またしても空振りに終わった。

結衣は諦めて床に座り込むと首を押さえた。

「もお。なんか喉に引っかかってるしい」

「それは好都合だ。その感覚を覚えておけ。飲み下さずに喉に引っかけるんだ。明日から毎朝飲む事になるしな。まあ、飲み下しても胃酸には耐性があるし勝手に声帯まで移動するんだが、その分起動までに時間がかかる」

「毎日……？」

また訳のわからない説明をするロイドに文句を言おうとして出した声が自分のものではなかった。

「えー？　声がヘン。何？　これ」

結衣の声を聞いてロイドが目を見張った。

「驚いたな。声まで殿下にそっくりだ。骨格が似てるからかな」

「王子様ってこんな声なの？」

「ああ。立ってみろ」

そう言ってロイドは立ち上がった。言われるままに結衣が立ち上がると、ロイドは頭の天辺から足の先まで、結衣の姿をしげしげと眺めた。

「声も顔も背格好も、ほぼ見分けが付かない。おまえの方がかなり細いが、服を着たらわからないだろう。おまえ、もう少し太れ」

相変わらずの命令口調に結衣は不愉快そうに眉を寄せ、腕を組むとロイドを睨んだ。

「どうして私が王子様の体型に合わせなきゃならないのよ」

「抱き心地が悪すぎる。小骨が刺さってしょうがない」

ロイドの言葉がまったく王子とは関係のない事を意図していたのを知り、先ほどのしかかられた事を思い出して、結衣は真っ赤になっ
て怒鳴った。

「あなたに抱かれるつもりないから！　ひとの事をイワシの煮付けのように言わないで！」

ロイドは額に手を当て嘆息した。

「その声で女言葉はよせ。殿下がご乱心あそばされたかと思われるだろう」

「この薬、効果はどのくらい続くの？　毎日飲んでたら効かなくなるんじゃない？」

「それは薬じゃない。人の話は真剣に聞け。薬が都合よく移動したりするわけではないだろう。声帯に取り付いて声帯の振動を制御するナノマシンだ」

不愉快そうに無言で睨む結衣を見て、ロイドは言い直した。

「声帯に取り付ける、ものすごく小さい変声機だ。作動時間は約十五時間」

機能についてはわかったが、何の役に立つのかよくわからない。今回はたまたま役立っているようだが。それが気になったので尋ねてみた。

「どうして、こんなもの作ったの？」

「男が女の声になったらおもしろいと思わないか？」

頭の中を木枯らしが吹き抜け、カラスが一声啼いたような気がした。

どうやら元々自己満足のおもちゃのようだ。そのおもちゃにロイドは一年かけて臨床試験を行ったと言っていた。改めて学者の思考回路はよくわからないと結衣は思った。

少しの間、絶句してロイドを見つめた後、結衣は大きくため息をついた。

「言っとくけど私、王子様の身代わりをするとは言っていないわよ」
結衣がそう言うと、ロイドは下からすくうようにあごを掴んで、その顔を覗き込んだ。

「おまえに選択の権利などない。拒否するなら監禁するぞ。この顔で国内を自由にうろつかれては困るからな」

「別にそれでもいいわよ。ご飯は食べさせてくれるんでしょ？」

結衣はロイドを見据えて不敵に笑った。そうそう脅しに屈してなどやらない。

だが、ロイドも負けず劣らず不敵の笑みを見せる。

「タダ飯食えると思うなよ。生体実験のサンプルくらいは覚悟しとけ。だが、夜にはかわいがってやろう」

そう言うと、結衣の髪をひとつかみ持ち上げて肩の上にパラパラと落とした。

「この、エロ学者！」

結衣は、あごを掴んだロイドの手を振りほどいて逃れた。ロイドは腕を組むと勝利の笑みを浮かべる。

「殿下の身代わりを演じるなら、王宮内でのおまえの自由は保証しよう。何が得策か、バカじゃなければわかるだろう？」

結衣はふてくされたような表情で上目遣いにロイドを見上げた。

「わかったわよ」

承諾したと同時にロイドが結衣の額を軽く叩いた。

「だったら、言葉に気をつける。女言葉は使うな。おまえは今から

セリオスⅡ克蘭ベール殿下だ。おまえの正体を知っているのは、オレと陛下とクラークさん、それから殿下搜索隊の五名だけだ。他の者にはばれないように気をつけろ」

額を押さえながら結衣はロイドに尋ねた。

「じゃあ、教えて。王子様ってどんな人？ 性格は？ 言葉遣いは？ 立ち居振る舞いは？ どんな仕事をしているの？」

「それについてはクラークさんに一任してある。後でしっかり教わっておけ。最低限テーブルマナーくらいは完璧に覚えろ。殿下の仕事は公式行事への参列と王族や貴族との会合会食以外、普段はこれといってないからな。公式行事は当分予定なしだか、会合会食はいつあるかわからない。あらかじめ予定されている公のものはつい先日終わったばかりだが」

確かに自分のテーブルマナーは怪しいかもしれない。しかも、この国独自のマナーがあるかもしれないし。そう思うと、本来なら味わう事のない豪華な宮廷料理を口にする機会が与えられたのだとしても、かえって気が重かった。

それにしても毎日会食という事はないだろう。普段の王子は何をして過ごしているのだろうか。同じようにしていなければならぬはずだ。尋ねるとロイドは軽く答えた。

「王宮の敷地内に居さえすれば、何をしていてもいい。二、三日は王宮内の探検でもしたらどうだ？」

結衣は少しの間目を見開いて絶句した後、気を取り直して再び尋ねた。

「王様の仕事の手伝いとかしないの？ それに探検してて、うっかり会議中の部屋とか開けちゃったらどうするの？」

「気にするな。そういう事をなさった事もあるらしい」

「……バカ王子？」

結衣が呆れたようにポツリとつぶやくと、ロイドは意味ありげにクスリと笑う。

「世を忍ぶ仮の姿だそうだ。探検に飽きたらここにいてもいい。殿

下はよくここにお見えになった」

それを聞いて結衣は内心ホッとした。ロイド自身は気に入らないが、王子のフリをしてばれないように緊張しているよりは、事情を知っているロイドのそばにいる方がまだマシだ。

「わかった、そうする。髪は？ 切らなきゃダメ？」

「いや、後ろで束ねておけばいい」

こちらもホッとした。特に思いがあって伸ばしているわけではないが、こんな事で切れと言われるのも不愉快だ。

寝る前に外して手首に通しておいたヘアゴムで髪をまとめていると、先ほど出て行った初老の紳士クラーク氏が帰ってきた。

「ビューパック様、殿下のお召し物をお持ちしました」

「ありがとうございます。陛下の方は？」

ロイドが服を受け取りながら尋ねると、クラーク氏は少し頭を下げた。

「いつでも、よろしいそうです」

頭を上げたクラーク氏は、髪を束ねた結衣を見て少し目を見開いた。それを見たロイドがイタズラっぽく笑うと結衣に耳打ちした。

「クラークって呼んでみる」

結衣は少しロイドを見た後、言われた通りクラーク氏に呼びかけた。

「クラーク」

「こ、これは……！」

途端にクラーク氏は思いきり動揺してのけぞった。

ロイドは声を上げて笑うとクラーク氏に言う。

「これなら問題ないでしょう？ 当分時間が稼げそうです。彼女も快諾してくれました」

誰が快諾したって？ 無言で睨むとロイドは受け取った服を結衣に突きつけた。

「向こうの部屋でそれに着替えてこい。これから陛下に拝謁賜る。くれぐれも粗相のないようにな」

口を開こうとした結衣に、クラーク氏がニコニコと笑いながら話しかけてきた。

「あなた様のご協力下さって助かりました。正直、女性には無理ではないかと思っていたのですが、さすがはヒューパック様。感服いたしました」

人の良さそうなクラーク氏の笑顔に毒気を抜かれ、脅迫されて渋々承諾したとは言えなくなった。クラーク氏は笑顔のまま自己紹介する。

「私はセリオス殿下のお世話をさせていただいております、エンディークラークと申します。これより、あなた様を殿下とお呼びさせていただきます。ですが、差し支えなければ、お名前をお伺いしてもよろしいですか？」

クラーク氏に尋ねられ、ロイドが今気について結衣に問いかけた。

「そういえば、名前を聞いてなかったな。何という？」

結衣は慥然として、英語風に名乗った。

「結衣よ。ユイータチカワ」

「ユイか。一応覚えておこう。呼ぶ事はあまりないと思うがな。」

セリオス殿下”」

そう言うとロイドは笑って結衣を見つめた。

First Kiss (4)

「生体実験って、よくやるの？」

「ん？」

謁見の間に向かい、ロイドの後に続いて廊下を進みながら結衣は尋ねた。

天井が高く、広くて長い廊下には、二人の他に誰も歩いていない。「さつき、生体実験のサンプルにするって言ってたじゃない」

「ああ。オレはほとんどしない。薬学、大腦生理学、生体力学、遺伝子工学、とまあ一通りかじってはいるが、オレの専門は機械工学だ。生き物の身体を使う必要はほとんどない。どうせ使うなら自分の身体を使う。他人の身体は扱いづらい上に、結果や反応がわかりにくいからな」

それを聞いて結衣はホッとひと息ついた。と同時に、はったりで脅されていたのだと知り、ムツとしてロイドを睨んだ。

ロイドは結衣の様子をおもしろそうにクスクス笑う。

「おまえ生体実験を勘違いしてるだろう。泣き叫ぶ実験体をベッドに縛り付けて、生きたまま切り刻んだりするのを想像していないか？ それは実験じゃなくて解剖だ。生体実験ってのは、生き物の身体を使って行う実験の事だ。基本的に動物実験の事を言う。結果がどう転ぶかわからない実験に人の身体を使う事はまずない。そういう実験をオレは許可していない」

そういえば、ロイドはなんとかの局長だと名乗っていた。実はエライ人だったんだ、と今頃気がついた。

「どうして、他人の身体だとわかりにくいの？」

「人体実験をする段階になったら、人体に悪影響がない事はほとんど立証されている。だから被験者が目に見えて体調を崩す事はないんだ。しかし、目に見えない小さい影響はあるかもしれない。こっ

ちの知りたいのはそこなんだが、勝手に関係ないと判断して教えてくれなかったり、説明が下手で上手く伝わらなかったり、間に人を介すと、とにかくわかりにくい。たとえば、同じ部位に同じダメージを受けても人によって感じ方は違うからな。できればありのままを伝えてもらいたいんだが」

「じゃあ、そういう機械を作れば？ 相手の感覚がそのままわかるっていう」

結衣が何気なく言った適当な言葉にロイドが食いついた。

「そうか。五感伝達装置か。おもしろそうだな」

そう言った後、ロイドは歩きながら腕を組んで考え込んだ。何やら意識はどこかヘトリップしてしまっているようだ。まじめな顔をしながら、時々口元に笑みを浮かべるのが薄気味悪い。

結衣は目を細くして、横目で見上げながらため息をついた。

「どうせ、またエロい事考えてるんでしょ」

「あ？」

突然こちらの世界に帰ってきたロイドが立ち止まり、結衣の言葉にニヤリと笑った。

「そういう使い道もあるか。益々おもしろい」

結衣はさらに大きなため息について肩を落とした。

「そんなものより王子様を見つける事が先決でしょ。さっさとここが壊れてんのか見つけてよ」

「こら、言葉」

そう言ってロイドは結衣の額をペチッと叩いた。

再び廊下を歩き始めたロイドが、少しして立ち止まった。結衣も立ち止まり、ロイドの見据える前方に視線を移した。

廊下の突き当たりにある謁見の間の扉が開き、身なりのいい中年紳士が出てくるところだった。ロイドは前方を見つめたまま小声でつぶやいた。

「いきなり面倒な方に鉢合わせしたな」

「誰？」

結衣も小声で問いかけた。ロイドは前を向いたまま答える。

「殿下の叔父上だ。おまえは一言も口をきくな。目があったら愛想笑いして会釈だけしてろ」

中年紳士は扉を背にして、まっすぐこちらに向かってきた。ロイドが廊下の端によけ、会釈して道を譲り、結衣もそれにならう。

栗皮色の髪を肩の長さで上品に刈り込み、口ひげを蓄えた中年紳士は、ロイドの前で立ち止まり声をかけてきた。

「久しいな、ヒューパック」

「お久しぶりです。ラフィット殿下」

ロイドは少し微笑んで、恭しく頭を下げた。

「相変わらず、調理機械とかをちまちま作っているのか？ 私の元に来れば、国に貢献できる研究開発を思う存分させてやるぞ」

「もったいないお言葉痛み入ります。ですが、庶民の私にはちまちました機械の方が性に合っております。国家に貢献する研究開発などおこがましゅうございます」

ロイドがそう言って再び頭を下げると、ラフィット殿下は口の端を少し持ち上げて鼻を鳴らした。

「相変わらず食えない男だ」

今までの横柄な態度からは想像もできないロイドの豹変ぶりに、結衣が呆気にとられているとラフィット殿下はこちらに視線を移した。

真正面から視線がぶつかり、結衣はロイドに言われた通り愛想笑いを湛えて会釈した。

ラフィット殿下は結衣を見据えて嘲笑を浮かべると、小馬鹿にしたようにあごを突き出した。

「セリオス、叔父の私にまともな挨拶もできんのか。毎日フラフラと遊び呆けておると聞いたが、帝王学どころか礼儀作法も疎かになっっているようだな」

（やっぱり、バカ王子？）

ラフィット殿下の辛辣なイヤミに結衣の愛想笑いは徐々に苦笑へ

と変わる。

クラーク氏に王子の事を聞くのは王に挨拶した後の予定だった。王子の事を何も知らないの、どう反応していいかわからない。

しゃべるなど言われたがどうすればいいのか、問いかけるようにロイドを見つめると彼が代わりに口を開いた。

「僭越ながら、セリオス殿下は先日風邪をこじらせて、喉を痛めておいでです。侍医から声を出さぬよう言われておりますので、平にご容赦願います」

ロイドがそう言うと、ラフィット殿下は鼻で笑い、

「そういう事情なら仕方ない。——という事にしておくか」と言って、二人の前を立ち去った。

ラフィット殿下の姿が廊下の角を曲がって見えなくなると、結衣はそちらに向かって舌を出した。

「やな奴。他人事ながらムカついた。なんであんなにイヤミなの？」

「あの方は殿下がいなければ次期国王になられるお方だ。だから頼りない殿下を快く思っておられない」

「それってヤバくない？ 暗殺とか考えてんじゃないの？ 王子様に忠告した？」

結衣が顔をしかめると、ロイドは険しい表情で結衣を見据えた。

「めったな事を口にするな。あの方の事は殿下ご自身が判断なさる事だ。オレがとやかく言う事じゃない」

確かに証拠もないのに適当な事を言うべきではない。相手はこの国のやんごとなき身分の方なのだ。後になって「間違いでしたすみません」ではすまない。

「……ごめん」

結衣が首をすくめると、ロイドは再び謁見の間に向かって歩き始めた。少ししてロイドは正面を向いたまま静かに告げた。

「だが、おまえは殿下ではないから忠告してやろう。たとえ甘い言葉をかけられても、あの方に気を許すな」

横柄なロイドが自分の身を案じてくれた事が意外で、結衣は呆け

たようにロイドの背中を見つめた。

反応がないのを不審に思ったのか、ロイドが振り向いて言葉を補足した。

「殿下の代わりに決断されては困るという事だ」

結衣はムツとしてロイドを睨む。

どうせそんなところだろう。この男にとって自分は王子の身代わりでしかない。王子が見つかるまではいてもらわないと困るから身を案じただけなのだ。

そう思うと少しでも、いい奴かもと見直した事が腹立たしくなってきた。

だが、王子の身代わりである以上、王子の意に反する事をするわけにはいかない。この点に関してはロイドの言う通りだ。

元々ロイドはいい奴なんかじゃない。そう思っていれば、何を言われようが、何をされようが腹も立たないはずだ。そう自分に言い聞かせ、気持ちを切り替えると結衣はロイドに問いかけた。

「あなたは？ 甘い言葉に乗らないの？ 国家に貢献する研究開発って魅力じゃないの？」

ロイドは興味なさそうに軽くため息をつく、前を向いて歩き始めた。

「どうせ武器か兵器の開発だろう。そんなものおもしろくもない」
「どうやらロイドの研究開発の原動力は「おもしろいかどうか」らしい。」

結衣は小走りに後を追うと、ロイドの横に並んでさらに尋ねた。

「じゃあ、おもしろい兵器を作れば？」

「おもしろい兵器って、どんな兵器だ？ どっちにしろオレはごめんだ。我が子を戦場に送りたがる親がどこにいる」

吐き捨てるように言って顔を背けたロイドを見つめて、結衣は小さく笑った。

ロイドにとっては自作マシンが”我が子”なのだ。いい奴なんかじゃないけど、悪い奴でもなさそうだ。

「呑気に笑ってるが大丈夫なのか？ おまえ、いくら言っても言葉気をつけないし。陛下にちゃんとご挨拶申し上げろよ。その声をお聞きいただきたいから、風邪ひいてることにはできないぞ」

ロイドの言葉に結衣はいきなり不安になった。

自国の天皇陛下ですら、言葉を交わす事はおろか、姿さえテレビで見た事しかない。外国の国王にどんな言葉で挨拶すればいいのか見当も付かない。

結衣が今まで言葉を交わした一番エライ人は、せいぜい取引先の社長が関の山だ。

「ど、どうしよう。王様に話すような敬語なんてわからないわよ。あなた何て言ってたっけ。おこがましい？ そんな言葉、生まれて今まで使った事ないし……」

頭をかかえて、うろたえる結衣を横目で見下ろして、ロイドは呆れたように嘆息した。

「ったく。変に敬語を使おうとするな。おまえのような庶民は丁寧語で充分だ。タメ口きかなきゃそれでいい」

それを聞いて結衣は少しホッとした。国王ではなく取引先の社長だと思えばいい。

「奥の扉が閉じるまで黙ってろ」

そう言ってロイドは歩くスピードを上げた。

First Kiss (5)

謁見の間の扉の前には誰もいない。だが、よく見ると扉の上部左右に監視カメラが取り付けられてあった。

二人が扉の前にたどり着くと、まるで自動ドアのように扉が内側に開いた。扉の内側に入ると、内側から人が開閉している事がわかった。監視カメラで誰が来たか確認しているのだろう。

そこは十メートル四方の空間になっていた。今入ってきた手前の扉に二人、その正面にある奥の扉に二人、監視が立っている。左手の壁には監視カメラの映像と思われるモニタが四つ埋め込まれていた。

ロイドが用向きを伝えると、監視が奥の扉を開いてくれた。二人が謁見の間に入ると扉は静かに閉ざされた。

扉の奥には広大な白亜の空間が広がっていた。コンサートホールのように高い天井には煌びやかなガラスの装飾に彩られた巨大な照明が設置され、大理石の白い床と壁が部屋を明るく感じさせた。

入口の扉からまっすぐに赤い絨毯が敷かれ、正面にしつらえられた階段の上の玉座まで続いていた。

玉座には王が座っている。広い部屋の中には、王とロイドと結衣しかない。

事情が事情だけに人払いがされているのだろうが、突き詰めればロイドは王と一対一での謁見を許されている事になる。どういうわけで、この横柄なエロ学者がそこまで信頼されているのか、結衣には不思議でしうがなかった。

ロイドは玉座の階段の下まで絨毯の上を進むと、跪いて頭を下げた。慌てて結衣も跪く。

「陛下、セリオス殿下の影を連れて参りました」

ロイドが恭しく告げると、王は声を上げて笑った。

「ロイド、顔を上げろ。おまえにそこまでへりくだられると、こそばゆい」

ロイドは立ち上がると王を見つめて少し笑った。結衣も続いて立ち上がる。

王は穏やかに微笑むと結衣に視線を移した。結衣は恐る恐る王の顔を見つめる。

さすがに兄弟だけあって、先ほど出会ったラフィット殿下とよく似ている。ラフィット殿下からひげを剃って髪を心持ち長くしたような感じだ。だが、その瞳は遙かに威厳に満ちていた。

自分とはあまり似ていない。ということは、王子は母親似なのだろう。

ロイドが横からひじでつついた。

そうだ、挨拶しなければならぬ。

（”はじめまして”じゃ軽すぎる。えーと……）

「お初にお目にかかります、国王陛下。ユイⅡタチカワと申します」
結衣はそう言って頭を下げた。名前を告げるのが精一杯だ。それ以上余計な事を言うと、絶対ボロが出る。

「なるほど。セリオスによく似ている。クラークから女性だと聞いていたが、この声はおまえの仕業か？　ロイド」

王は目を細めてロイドを見つめた。ロイドが肯定すると、王は結衣に話しかけた。

「ユイとやら、此度は愚息が迷惑をかけてすまぬ。あれが見つかるまでの間、影を頼まれてくれるか」

国王直々に言葉を賜り、何か答えなければならないが、焦れば焦るほど言葉が見つからない。

（えーと、えーと……。そう！　相手は社長！　取引先の社長！）

結衣はにっこり微笑むと、身体の前で両手を重ね背筋を伸ばすと四十五度の角度でゆっくりとお辞儀をした。

「かしこまりました。必ずご期待に添えるよう努力いたします」

身体を起こすと、王が満足げに頷いた。

大仕事を終えた気になって、結衣がホッとしていると再び王が口を開いた。

「ユイ、ひとつ私の頼みを聞いてくれるか？」

「はい」

何だかわからないが、とりあえず返事をする。すると王はにっこり微笑んで思っても寄らない事を要求した。

「セリオスになったつもりで、私におねだりをしてみよ」

「はい？」

結衣は笑顔を引きつらせたまま固まった。

いきなり演技力テストだろうか？　しかし、王子の事を何も知らないのに王子になったつもりでと言われても、どうすればいいのかわからない。

王子から見れば王は父親。父親におねだりって何を？

”パパア、マンション買ってえ”——って、何か違う。

第一王宮に住んでいる者がそんなものを買って欲しいわけがない。王子が王にねだるものって何？　庶民の王道を行く結衣には見当も付かない。

脳みそをフル回転させながら固まっている結衣に、ロイドが耳打ちした。

「え？」

「いいから、言ってみろ」

本当にそんなものでいいのだろうか？　おもしろそうに笑うロイドをチラリと見た後、結衣は半信半疑のまま、言われた事を復唱した。

「父上！　ボクにロイドを下さい！」

結衣の言葉を聞いて、王はガクンと首を折って項垂れた。やっぱりまずかったのではないか？　結衣が不安になっていると、王は突然顔を上げた。

目を閉じ、拳を握りしめ、感無量といった表情で天井を上向いた後、思い切り溜めて言葉を吐き出した。

「つついいっ！ 息子のおねだり！」

「え？」

呆氣にとられて結衣は再び固まった。横でロイドがクスクス笑う。何の事かわからず困惑してロイドと王を交互に見つめている結衣に、王はため息混じりに愚痴をこぼす。

「セリオスは昔からちつとも私に甘えてくれないのだ。後にも先にも、あの子が私に欲しいとおねだりしたのはロイドだけだ」

「はぁ……」

結衣は訝しげにロイドを見つめた。この男のどこがそんなに気に入ったのだろう。

王は名案を思い付いたように嬉々として結衣に提案した。

「どうだ、ユイ。私の養子にならぬか？」

あまりにも唐突な申し出に、結衣は苦笑を湛えてやんわりと拒否する。

「それはちよつと……。私にも両親がおりますので」

王は腕を組んで考え込んだ。

「それはそうだな。セリオスにはすでに婚約者が決まっているから、あの子の妃というわけにもいくまいし」

たとえ婚約者がいなくても、自分と同じ顔の夫など御免被りたい。すると王はまた何か閃いたらしく、ポンと手を打った。

「そうだ。ロイドと結婚してはどうだ？ そうすれば王宮内に住む事になるし、時々セリオスの代わりに私に甘えてくれればよい」

思わずロイドの方を向くと、彼もこちらに視線を向けていた。偶然顔を見合わせる事になってしまったが、すぐにロイドは関心がなさそうに視線を外した。

結衣は益々苦笑する。ものすごくイヤだ。どう断ればいいのかわからず、しどろもどろになる。

「……えっと、彼とはさっき会ったばかりですし……結婚とかは……その……」

「ロイドはいい奴だぞ」

「……え……」

思わず顔が引きつる。

（王様、あなたは騙されています。この男は二重人格です。こいつが私にした数々の仕打ちを知れば、その考えは吹っ飛ぶはずですよ）
よっぽど暴露してやろうかと思ったが、ロイドを信賴している王に信じてもらえそうにはないので、黙っておく事にした。

結衣は大きいため息をついて肩を落とすと曖昧に言い逃れる事にした。

「……もう少し、考えさせて下さい……」

「よいとも。一生の事だしな。いい返事を期待しておるぞ」

王は嬉しそうに笑うと、結衣を解放してくれた。

「陛下、我々はそろそろ失礼いたします」

ロイドがそう告げると、王は息子を溺愛する父親の顔から、国王の顔へと戻った。

「ああ、頼んだぞ」

「御意、承りました」

ロイドが一礼し、それにならって結衣も頭を下げると、二人は謁見の間を後にした。

元来た廊下を引き返しながら、ロイドが結衣に話しかけた。

「おまえ、陛下に気に入られたようだな」

「愛する息子と似てるからでしょ。言っとくけど、あなたと結婚なんてしないからね」

結衣がきっぱりそう言うのと、ロイドは意地悪な笑みを浮かべる。

「王命に背くのか？ いい度胸だな」

「私は日本に帰るのよ！ 王様に甘えるのは王子様の役目でしょ？ さっさと見つけてよ！」

「わかったから廊下でわめくな。誰かに聞かれたらどうする」

ロイドに言われ、焦って周りを見回したが、相変わらず二人の他には誰もいなかった。

ホッと胸をなで下ろすと、ロイドが背中をポンと叩いた。

「さっさと戻ろう。クラークさんが待ってる」

「うん」

少しペースを上げて、二人はクラーク氏の待つ王子の部屋へ向かった。

First Kiss (6)

王との謁見から戻ると、ロイドは結衣をクラーク氏に任せて研究室に戻っていった。その後結衣は、王子の部屋でクラーク氏にレクチャーを受けた。

王子の性格や趣味嗜好、言葉遣いに普段の行動、テーブルマナーから果ては世継ぎとしての心得、いわゆる帝王学まで学ばされた。ラフィット殿下によれば、本人は疎かになっているらしい帝王学を、何故身代わりの自分が学ばなければならないのか疑問に思いつつも、クラーク氏の講義は夕食を挟んで夜遅くまで行われた。

人の良さそうな笑顔に騙された気がした。クラーク氏はなかなか厳しい。解放された時にはぐったりと疲れ果てていた。

王子が客間に寝泊まりするわけにはいけないので、結衣はそのまま王子の部屋に泊まる事となった。

私物には触らないように言われたが、部屋中私物である。ようは、引き出しの中を探ったり、手帳を開いて覗いたりしなければいいのだろうかと解釈した。

部屋といっても実家の家より広い。浴室だけでも結衣の部屋全体の二倍はあった。

結衣は結んだ髪をほどいてリビングに置かれたソファに背中を預け、深く腰掛けた。体中の力を抜いて目を閉じると長かった一日を思い返す。

ただ昼寝をしていただけなのに、思いも寄らない事になった。ちゃんと日本に帰れるのだろうか。

できれば盆までに帰りたい。何の連絡もせず実家に帰らなかったら搜索願が出かねない。

実家に帰ればどこからともなく見合い話が来たりするし、親戚がやってきて自分には記憶のない子供の頃の話を繰り返されてうつ

とうしい。

だが、その間の食費、光熱費が浮くのは捨てがたい。夏場の電気代はバカにならない。——と、考えて結衣はふと思いつき叫んだ。

「あ——っ！ エアコンと扇風機つけっぱなし——っ！」

扇風機は二時間したら切れるようにタイマー設定しておいたが、エアコンはタイマーを設定していない。

結衣は思わずソファの上に横倒しになって突っ伏した。

「ああ、せめてエアコンだけ切りに帰りたい……」

何日もエアコンをつけっぱなしにしたら、いったいどれだけ電気代がかかるんだろうと途方に暮れていると、部屋の中でロイドの声がした。

「鍵が開いてたぞ。物騒だな」

リビング前のテラスに抜けるガラス戸が開き、側にロイドが立っていた。

結衣は身体を起こし、ロイドを睨んだ。

「だからって勝手に入ってこないでよ。私が裸だったらどうするの？」

「おまえの裸……？」

ロイドは眉をひそめてそう言ったきり黙り込んだ。その表情と沈黙が、何を言いたいのかかえって饒舌に物語り、結衣は立ち上がるとロイドに詰め寄った。

「なんで黙るのよ！ どうせ胸小さいし、背高いし、男の王子様と同じ体型だし、小骨は刺さるし……！」

「わかった、わかった。おまえの裸を想像すると貧血になるほど鼻血吹きそうだ」

「バカにして……！」

投げやりに言うロイドにムカついて、叩こうと振り上げた右の手首を掴まれた。多分、左手を挙げても同じ事になるだろう。叩く事は諦めて追い出す事にする。

「とにかく出てって。これからお風呂に入って寝るんだから。あな

たが見たくもない裸になるわよ」

「ああ。オレは出て行こう。かわりにおまえが出て来い。用がある」
そう言ってロイドは掴んだ結衣の手を引いて、テラスに連れ出した。

外に出ると壁にある照明が自動で点灯し、テラスを淡く照らし出す。ロイドは中央くらいまで来ると結衣の手を離した。

広いテラスは隣の部屋の前まで続いている。ロイドはそちらから来たのだろう。――え？　ってことは……。

「あなた隣に住んでるの？」

「ああ。オレは殿下の”お友達”だからな。いつでも行き来できるようにとの殿下のご配慮だ」

ロイドに言われるまでもなく、施錠の重要性をひしひしと感じた。気を取り直して尋ねる。

「何の用？」

「喉のナノマシンを機能停止させてやろうと思って。朝起動すれば今頃は停止してるはずなんだが、今日は午後からだったからな。寝てる間に声を変える必要はないし、強制終了させてやろう。少し上を向け」

結衣はロイドの方を向くと首を伸ばして上向いた。

ロイドの金髪の向こうに満天の星空が見える。こんな見事な星空、日本では山奥にでも行かなければ見えない。克蘭ベールは高い科学技術力を持ちながら、自然にも恵まれた国のようだ。

初めて外の景色を見た。好きにしていいたと言われたので、明日は外に出てみよう。

ロイドは結衣の首に百円ライターくらいの大きさの細長い板を近づけ、そこに付いたボタンを押した。ピッと小さな音がした。

「もういいぞ。ちよつと喉に違和感を感じるだろうけどな」

そう言うロイドは、リモコンをポケットにしまい、結衣の元を離れると手すりにもたれて腕を組んだ。

少ししてロイドの言った通り、喉の奥がいがらっぽくなって空咳

が出た。

結衣は喉を撫でながらロイドに尋ねた。

「何？　これ……。あ、声が戻ってる」

「ナノマシンが食道に移動してるんだ。終了時間が来るか、停止命令を受け取ったら食道に移動するようになってる。おまえが便秘じゃなかったら、明日体外に排出されるはずだ。その違和感は改良の余地があるけどな」

「だったら、一年かけてテストしてる時に改良すればよかったのに」
結衣も手すりにもたれて星空を見上げながらつぶやいた。

「ほんの数秒の事だし、まさかオレ以外の人間が常用するとは思わなかったしな」

「やっぱ使う当てのない、おもちゃだったんだ」

結衣はロイドを横目で見つめて、大きくため息をついた。気を取り直してロイドに尋ねる。

「そんな事より王子様の方は？　身代金の要求とかないの？」

「ない」

「誘拐じゃないのかな？」

「殿下の身柄そのものが目的なら、身代金の要求はないぞ」
それを聞くと結衣は髪を翻して、ロイドの方を向いた。

「やっぱ、あの叔父さんが怪しいんじゃない？」

「めったな事を口にするなど言っただろう。その可能性はない」
自分の名案をあっさり否定されて、結衣は口をとがらせた。

「なんで？」

「おまえを見ても特に変わった様子がなかったからだ。自分の攫った人間が目の前に現れたら、よっぽどの役者でない限り、少なからず動揺するだろう」

「そっか、平然とイヤミ言ってたもんね。私を王子様だと思い込んでたし。でも、あの人は関係なくても、あの人の支持者は怪しいかもしれないわ」

結衣はクラーク氏から王室を取り巻くお家事情を大まかに聞かさ

れていた。今は王が健在なので表立って騒がれてはいないが、次期国王の座を巡って王族や貴族たちが睨み合っているらしい。

大きく分けると、第一王位継承権を持つ王子を推す一派と第二王位継承権を持つラフィット殿下を推す一派の二つだ。継承権の順位を重視するなら王子が王位に就くのが順当だが、王子が頼りない上に本人にその気があるように見えないので、たとえ王に指名されても辞退するのではないかとラフィット殿下支持者は甘い期待と共に野心を燃やしている。

ラフィット殿下支持者の中には極端な考えを持った者もいるという事で、保身のために王子は気のないフリを演じているらしい。

「まあ、可能性として、ないとは言えないが、今のところ検索の網にかかっていない」

「私も調べてみようかな」

結衣が腕を組んで星空を見上げながら軽くつぶやくと、ロイドが額を叩いた。

「余計な事をするな。おまえは殿下の身代わりに徹している。だいたい誘拐と決まったわけじゃない」

結衣は額を押さえてロイドの方を向く。

「誘拐じゃないなら何？」

「ご自身でどこかにお隠れになったか、何らかの理由で帰れなくなっているかだ」

「それって私みたいにどこか異世界に飛ばされてるって事？」

「それは一番あって欲しくないケースだな。そうじゃなくても、怪我をして動けないとか。どっちにしろあまりよくない。陛下も気丈に振る舞っておいでだか、大層ご心配なさってるはずだ」

「でしようね。あの溺愛ぶりじゃ。あの機械が壊れた原因はわかったの？」

「それも調査中だ」

「なんにも進展していないじゃない……」

結衣は大きいため息をついて、身体を反転させると手すりに縋っ

て項垂れた。

First Kiss (7)

少しの間二人とも黙っていたが、突然ロイドが思い出し笑いを始めた。

「何？」

結衣が訝しげにロイドを見つめると、彼は笑いをこらえながら結衣に言う。

「おまえ、よっぽど背が高い事を気にしているんだな」

結衣はふてくされたように顔を背けた。

「だって昔から、からかわれてうんざりなんだもん」

「オレも言われてうんざりしている事はある」

「え？ そうなの？」

自信満々のロイドにコンプレックスがあるのが意外で、結衣は思わず目を見張った。

「学者のくせに無駄にいい身体をしていると、よく言われる」

しれっとして言い放つロイドに、結衣はうんざりしたようにため息をついた。誰がそんな事を言っているのか、あえて追及したくない。

「なんなら脱いで見せようか？ 向こうのベッドルームで」

首を傾げて、羽織った白衣を広げてみせるロイドに、結衣は目を細くして追い払うように手を振った。

「抱き心地の悪い女にそんなサービスいらないわよ。ひとりでベッドルームに行って」

「おまえ、根に持つ奴だな」

ロイドは拒否された事など気にも留めず、おもしろそうにクスクス笑う。

「じゃあ、根に持たれたら困るし、忘れる前に帳消しにしとくか」
そうつぶやきながらロイドは、メガネを外すと胸ポケットに収め

た。メガネを外したロイドは学者っぽい冷たさが消えて、随分と甘い風貌になる。

蜂蜜色の髪と濃い緑の瞳。ヨーロッパ人のような容姿が、見慣れない結衣には会社の男たちと比べてかなり男前に見えていた。ただし、黙っていればの話だが。

ロイドは結衣の真正面に立つと、淡く微笑んで見下ろした。

思わず見とれてしまう甘い笑顔に、ほんの少し呆然として見上げた後、結衣はハツとして問いかけた。

「メガネなくて見えるの？」

「近付けば問題ない」

言ったと同時にロイドは、結衣の腰に左腕を回し、強引に引き寄せた。

突然の事よろけて、結衣はロイドの胸に両手をついた。服越しに伝わる硬い筋肉の感触に、いい身体をしているって本当なのかも、とちょっと思った。

しかし、どうしてこんな体勢になっているのかはわからない。結衣は逃れようと両手を突っ張りながらロイドを睨み上げた。

「ちょっと！ 何？」

抵抗する結衣をロイドはさらにきつく抱き寄せ、意味不明な事を言う。

「やはり、ちょうどいいな」

密着した身体から伝わるぬくもりと、目の前に迫った甘い笑顔に鼓動が高鳴り、顔が熱くなってきた。自分がドキドキしている事は、きっとロイドに伝わっている。

「……やっ……！」

恥ずかしくて顔を背けようとした結衣の後頭部に、ロイドの右手が添えられ頭を動かせなくなった。

「黙ってろ」

囁くように命令するとロイドは少し目を細めて結衣を見下ろした。非難するようにロイドを睨んで、開きかけた結衣の唇をロイドの

唇が塞いだ。

気持ちには逃れようとするが、心臓が爆発しそうなほど鼓動が暴れて呼吸が乱れ、腕に力が入らない。唇から伝わる熱が結衣の全身を熱くする。

ほんの数秒の出来事が、結衣には永遠とも思えるほど長く感じられた。

きつく抱きしめていたロイドの腕の力が、一瞬緩んだ隙を突いて、結衣は思い切り手を伸ばしてロイドを突き放した。

乱れた息を整える間もなく、右手でロイドに平手を振り下ろした。しかし、すんでのところの手首を掴まれ不発に終わる。今度はさすが左手も振り下ろしたが、やはり失敗した。

「何をする」

結衣の両手首を掴んだまま、ロイドは不思議そうに尋ねる。

悪びれた様子もなく、平然としているロイドが小憎たらしくて、

結衣はヒステリックに怒鳴った。

「こっちのセリフよ！ 帳消しって何？ 意味わかんない！」

「オレの方こそ意味がわからない。オレとキスしたいと言ったのはおまえじゃないか」

そんな事を言った覚えはない。結衣はロイドから視線を外し、クランベールに来てから今までの記憶をめまぐるしいスピードでたどり始めた。結衣が考え込んだのを見て、ロイドが種明かしをした。

「ナノマシンを飲ませた時、吐き出したものを飲むより口移しの方がいいって言っただろう」

血管が千切れたかと思うほど頭がクラクラした。 ” いい ” とは言っていない。 ” マシだ ” と言ったのだ。

” オレとキスしたかったのか ” って、冗談で言っているのだと思っていた。

常人とは違う思考の流れに呆れて、結衣は再び怒鳴った。

「学者のくせに、頭悪いんじゃないの?! どうしてくれるのよ! 初めてのキスなのに!」

「え？」

意外にもロイドが困惑したような表情で、結衣の両手を離れた。殴るなら今がチャンスのような気もするが、思いも寄らないロイドの反応に、結衣は一気に力が抜けて思わずクスリと笑った。

「ウソよ。あなたでもうろたえる事あるのね」

ロイドは少し眉を寄せると、メガネをかけ直した。

「……からかったのか？」

「からかわれてばかりじゃ、シャクなもの」

結衣はクルリとロイドに背を向けた。自分が泣きそうな顔になっているのがわかっていいるから。

突然、後ろからロイドが両肩を掴み、耳元で囁いた。

「オレをからかうとは、いい度胸だ」

肩に乗ったロイドの手の重みに、意思に反して身体が怯える。震えるな！ 感付かれる！

小刻みに震えそうになる身体に必死で言い聞かせていると、ロイドが肩から手を離し、頭をひと撫でした。

「悪かったな」

感付かれた？ 恐る恐る振り返ると、ロイドは手すりにもたれて空を見上げていた。

「それでも責任は感じているんだ。うちの子が迷惑をかけて」

うちの子って、人捜しマシンの事だろうか。どうやら感付かれてないらしい。

ホッとした途端、全身から力が抜けそうになり、結衣は手すりにしがみついた。

ロイドは星空から視線を戻すと、自信に満ちた瞳で結衣を見据えた。

「今はまだ見当も付かないが、必ずおまえをニッポンに帰してやるからな。オレのプライドにかけて」

「うん……」

結衣が抑揚のない声で返事をする、ロイドはポケットから何か

を取り出して結衣に差し出した。差し出された手の平には黄色い小鳥が乗っていた。だが、ピクリとも動かない。ポケットから無造作に取り出したところを見るとロボットなのだろうか。

結衣がぼんやり眺めていると、ロイドは小鳥の腹部を探りスイッチを押した。途端に小鳥は目を開き、何度か首を傾げた後、軽く羽を震わせて結衣の肩に飛び移った。

「おまえにやろう。エサはスキンシップだ」

「スキンシップ？」

「足の裏に熱センサが付いている。熱エネルギーを動力に変換して内臓バッテリーに蓄積し、動く仕組みになっている。動いている時にバッテリーが切れかかると、手や頭に乗りたがる。うっとうしいと思うならマメに手の平に乗せてやってくれ。まあ、腹にある電源を切るという手もあるけどな。おまえ、鳥は平気か？」

「うん。好き」

肩に留まった小鳥をチラリと見て答えると、ロイドが少年のように嬉しそうな笑顔を見せた。

「そうか。昔、殿下に昆虫のロボットを差し上げた事があるんだが、女には虫より小動物がいいかと思って」

”うちの子”が迷惑かけたからお詫びなんだろうか？

”我が子”が気に入られた事に気をよくして、ロイドはさらに小鳥ロボットの特徴を教えてくれた。

「そいつは一度だけ名前を登録する事ができるんだ。背中にあるボタンを押しながら名前を呼べば登録できる。以降、登録した声の主が名前を呼べば返事をするし、人工知能を搭載しているから声の主の命令を聞くようになる。話しかけていれば言葉も覚えるぞ」

「うん」

結衣は相変わらず感情のない返事をする。

興奮したように小鳥ロボットをアピールしていたロイドが黙って結衣を見つめた。

結衣は俯いてロイドから目を逸らした。早く行って欲しい。もう

そろそろ限界だ。

結衣の心を見透かしたように、ロイドは背を向けた。

「じゃあな。おやすみ」

「おやすみ」

ロイドが隣の部屋に姿を消すのを見届けて、結衣はゆっくりと手すりを離し、フラフラと王子の部屋の中に戻った。

お風呂に入ろうと思っていたが、そんな気力がなくなった。さっさと寝てしまおうと寝室に入り、ベッドの側まで歩み寄った時、とうとう気力が途切れて、結衣は崩れるようにその場に座り込んだ。

肩に留まった小鳥が飛び立って、ベッドの上に舞い降りた。

ずっと我慢していた涙が溢れ出した。結衣は座り込んだまま背中を丸め、項垂れて嗚咽する。

「……ひどい、あんなキス……」

背の高さがコンプレックスとなつて、恋愛に消極的な結衣は男性と一対一で付き合った事がない。キスはおろか、抱きしめられたのも初めてだった。

恋愛に夢を見すぎるなど友人にいつも言われていた。白馬に乗った王子様を夢見るほどの少女ではないが、恋愛に少なからず夢を抱いていた事は事実だ。

告白をして互いの気持ちを確かめ合い、何度かデートを重ねた後、初めてのキスは軽く唇を触れあわせるだけ。それから徐々にステツプアップしていききたいと、相手も当てもないのに勝手に計画を立てていた。

ところが、告白もデートもすつ飛ばした上に、いきなり上級者向けの大人のキスを体験するとは夢にも思っていなかった。

初めてだと告げた時、ロイドが困惑と共に申し訳なさそうな顔をした。それがイヤで咄嗟にウソだとウソをついた。とても少女には見えない結衣が、キスさえ未経験だとは思ってもみなかったのだらう。

ロイドにしてみれば、ちょっとからかってみただけなのだ。でな

ければ、あんな顔をするわけがない。

初めてのキスの相手が、自分の事を何とも思っていない。それが悲しかった。

なのに心が揺れている。ロイドの甘い笑顔を思い出すと、あのキスを思い出すと、自然に鼓動が早くなる。

「……絶対違う……あんな奴、好きじゃない……」

きっと心が騙されている。初めてのキスにドキドキしたのを恋だと勘違いしている。

言い聞かせるほどに、胸の鼓動は激しさを増す。

もう、何が原因で涙が出るのかわからなくなってきた。

「……バカ……もう、帰りたい……」

ベッドに縋って顔を伏せると、小鳥が近寄ってきて結衣の手を軽くつついた。顔を上げて見つめると、小鳥も首を傾げて結衣を見つめた。

慰めてくれているような気がして、結衣は小鳥の背中をなでた。

「ロイド……」

なんとなく名前を呼んでみると、胸の奥がキューツとなった。

側で小鳥がピツと一声鳴いた。

First Kiss (8)

「そういう寝方をするのはニッポンの習慣なのか？」

突然部屋の中で聞こえた男の声に、結衣は悲鳴と共に飛び起きると叫んだ。

「誰?!」

「ねぼけるな。それとも一夜にしてオレの事を忘れたのか？」

目の前で腰を屈め、ベッドに片手を付いたロイドが、結衣を覗き込みながら額を叩いた。

結衣は一気に目を覚ました。

ここは異世界克蘭ベール王国。目の前にいるエロ学者に手違いで呼ばれ、王子の身代わりを押しつけられ、強引にファーストキスを奪われ、ショックのあまり泣き寝入りしたのだ。

ぼんやりと昨日の出来事を反芻していると、

「思い出させてやろうか？」

そう言ってロイドは、片手でメガネを外しながら顔を近づけてきた。「覚えてるわよ! ロイド!! ヒューパック!」

結衣が叫んでロイドを突き放すと、ベッドの上で小鳥がピッと鳴いた。

ロイドはメガネをかけ直し小鳥を見た。そして結衣に向き直り、目を細くして問いかけた。

「おい。あいつにオレの名前をつけたのか？」

「え?」

言われて、記憶をたどる。そういえば何となくロイドの名前を呼んだ時、小鳥の背中を触ったような……。

試しに小鳥を呼んでみた。

「……ロイド、おいで」

小鳥はピッと一声鳴くと羽ばたいて、差し出した結衣の手の平に

着地した。

間違いなさそうだ。一回だけと言っていたから訂正はきかない。

苦笑してロイドを見上げると、ムツとした表情で見下ろされていた。

「どういうつもりだ」

”なんとなく”じゃ答えにならないだろう。結衣は苦し紛れに出任せを言う。

「この子私の命令を聞くんでしょ？ あなたに命令してみたかったのよ」

ロイドは冷ややかな笑みを浮かべる。

「ほおお、どんな命令をするつもりだ」

そこまでは考えてなかったが、この機会に仕返しをしてやろう。

結衣は不敵に笑うと、小鳥のロイドに命令した。

「ロイド！ このエロ学者をやっつけて！」

結衣がロイドを指差すと、小鳥はピツと返事をした。しかし、返事をしただけで動かない。

「あれ？」

結衣は不思議そうに小鳥を見つめた。小鳥は何事もなかったかのように首を傾げている。まだ学習が足りなくて高度な命令はわからないのだろうか。

結衣も首を傾げていると、目の前でロイドが腹を抱えて大笑いした。

「そういう命令は無効だ。人工知能搭載のロボットは決して人を傷つけないよう、あらかじめ絶対命令を焼き付けることが法律で義務づけられている。そういう邪な野望は捨てて、せいぜい”オレ”をかわいがってくれ」

勝ち誇ったように腕を組んで見下ろすロイドを、結衣は頬を膨らませて見上げた。

そして、ふと気付いて立ち上がると、ロイドに詰め寄った。

「ちよっと！ どうしてあなたがここにいるのよ！」

「鍵どころか戸が開いていたぞ」

「だからって勝手に入ってこないでって言ったでしょ？　しかも寝室まで入ってくるなんて、どういう神経してるのよ！」

思考回路ならともかく、神経が疑われるのはさすがに看過できないらしく、ロイドが不愉快そうに事情を説明した。

「外から何度も声はかけた。だが、返事がない。まだ寝てるのかと呆れて、寝室の扉の隙間から拡声器で怒鳴ってやろうと思ったら、おまえがベッドの横にへたり込んでるように見えた。具合でも悪いのかと心配して差し上げたんだ。ありがたく思え」

今度こそ本当に身を案じてくれたらしい。なにしろ本人が心配したと言っているのだから間違いない。間違いないけど、やっぱり意外だ。

「……ごめん、まぎらわしくて」

結衣が素直に謝ると、ロイドは満足したらしく、

「まあ、習慣の違いというのは誤解を生みやすいからな」

と、勝手に見当違いの結論に納得しようとしている。

「誤解しないで！　日本人もちゃんとベッドの上で布団かぶって寝るから！」

妙な日本の習慣を頭にインプットされては困る。

「何か用だったの？」

結衣が尋ねると、ロイドはポケットから見覚えのあるピルケースを取り出した。指先につまんだ銀の粒を結衣の鼻先に突きつけ、例のごとく命令する。

「口を開ける。今日の分だ」

結衣は黙って口を開いた。口の中に銀の粒が放り込まれ、ゆっくりと喉の奥に滑り落ちていく。少しして、咳き込みそうになる違和感が喉から消えた頃、ロイドが話しかけてきた。

「セリオス殿下、喉のお加減はいかがですか？」

結衣は少し笑ってロイドを見上げた。

「ああ、もう大丈夫だ」

クラーク氏にしごかれたので、もう風邪をひいている事にしなく

てもいい。

「では後ほど、朝食後にでも私の研究室にお越し下さい。お渡ししたいものがございます」

「わかった」

結衣が承知すると、ロイドは部屋を出て行こうとした。それを結衣は引き止めた。

「あ、ロイド、ボクの朝食を三十分遅らせてくれるようにクラークに伝えて。昨日、風呂に入っていないんだ」

「かしこまりました」

ロイドは振り返り、恭しく頭を下げた後、身体を起こしてフツと笑った。

「なかなか、やるじゃないか」

「まあね。腹括ったの。ちゃんとやるから、そっちもさっさと王子様を見つけてよ」

「御意」

ロイドはそう言うのと、軽く手を挙げ部屋を出て行った。全然”御意”な態度ではない。

ロイドを見送り、ひと息つくと、ふとゆうべの事が頭をよぎる。

結衣は両手で両の頬をパチンと叩いた。今は考えないようにしよう。

肩に留まった小鳥をソファの背もたれに移動させた。

「ロイド、そこで待ってて」

小鳥がピツと返事をした。結衣は目を細めて見つめると、急いで浴室へ向かう。

結衣の王子様生活が始まった。

(第1話 完)

秘密 (1)

日の光の下で見る初めての風景に、結衣は圧倒されて見入った。克蘭ベール王国の首都ラフルールは大陸の南西に位置し、王宮は小高い丘の上に建っている。

結衣のいる王宮のテラスからはラフルールを一望し、西と南に広がる海と、東に連なる山脈を見渡せた。

ロイドの作ったマシンから察するに、克蘭ベールの科学技術の水準は、地球のそれを上回るものと推測される。だが、眼下に広がるラフルールの街並みは中世ヨーロッパの片田舎のようだ。

高い建物は一切なく、ほとんどの道路は狭い。広めの道路にも自動車は走っていない。走っている乗り物は馬車か自転車で人々は徒歩で行き交っていた。

当然のごとく線路もないので列車も走っていない。ラフルールから延びる人の歩いていない石畳の白い道が、街の外の大平原や点状にする森の中へ続いていた。その道以外、街の外には何もない。手付かずの雄大な大自然が広がるだけだった。

遠くに見える海の港に船が何隻か停泊している。船は普通にあるようだ。

一番目を惹いたのは、時々空を飛ぶ大きな乗り物だ。

飛行船に自在に動く羽を付けたようなこの乗り物は、飛行場と思われる場所から時々垂直に離着陸している。

地球のジェット飛行機のように轟音を響かせて早く飛んだりしない。低いうなりを上げて空をゆっくりと進む姿は、のどかな克蘭ベールの風景に溶け込んでいた。

王宮の真上を飛ぶのは禁止されているようで、少し離れた空を通り過ぎる見た事もない乗り物に見とれていると、部屋の中から電話の呼び出し音が聞こえた。

結衣は慌てて部屋に駆け込むと電話の応答ボタンを押した。小さな液晶画面に不機嫌そうなロイドの顔が映し出される。

「何をやってる。後で来いと言っただろう。さっさと来い。いつまで待たせる気だ」

すこぶる機嫌が悪い。

「……ごめん、すぐ行く」

そう言って電話を切ると結衣は大きくため息をついた。”後で来い”とは言われたが、”すぐに来い”とは言われてないような気がする。

結衣はソファの背もたれに留まった黄色い小鳥に向かって手を差し出した。

「ロイド、おいで」

小鳥はピッと一声鳴いて羽ばたくと、差し出した結衣の手に留まった。

やって来た小鳥を肩に乗せて、結衣は足早に部屋を出た。

声をかけて研究室の扉を開くと、ロイドが人捜しマシンの隣にいるのが見て取れた。コンピュータ画面の前の机に向かって座り書類を眺めている。

結衣が側まで歩み寄ると、初めて気配を感じたのか慌てて振り返った。どうも夢中になると周りが見えなくなるらしい。

結衣の姿を認めたロイドは早速毒を吐く。

「やっと来たか。待ちくたびれて、じじいになるかと思ったぞ」
「元々じじいなんじゃないの？」

「黙れ」

小憎たらしいので言い返すと、すかさず額を叩かれた。

考えてみれば、ロイドの年齢っていくつなんだろう。外国人の年は見た目ではわかりにくい。なんとかの局長という社会的地位から

考えると、自分よりは年上だと思うが、ちょっと気になったので尋ねてみた。

「ロイドって何歳なの？」

「三十前後だ」

結衣は思わず眉を寄せて、半眼になる。

「前後”って何？」

「正確な年がわからないんだ。オレは拾われっ子だから」
「え？」

軽い気持ちで、とんでもない事を訊いてしまったらしい。結衣が深刻な表情をしていたのか、ロイドがフツと笑った。

「おまえが気にする事はない。もう二十七年も前の話だ」

二十七年前、まだ幼かったロイドは、ラフルールの南東にある古代遺跡に置き去りにされていたらしい。本人に記憶はないが、当時遺跡の調査に来ていた考古学者がロイドを見つけて連れ帰ったという。

親を捜したが結局見つからず、そのままその考古学者が親代わりとなった。

言葉も話すし、自分で歩く。背格好からして三歳ぐらいだろうという事で、便宜上連れ帰った日を誕生日とし、三歳という事になったという。

「考古学者の子になったんなら、なんで考古学者にならなかったの？」

「考古学そのものにはあまり興味がない。だが、遺跡にある謎の機械装置は、ものすごく興味深い。何度か調査に同行したが、悔しい事にほとんどわからない」

本当に悔しそうに歯噛みするロイドを見て、結衣はクスリと笑った。すかさずロイドが気付いて睨む。

「何がおかしい」

「もしかして、あなたはその機械から生まれたのかもよ。だから機械が大好きなのよ」

結衣がからかうと、再び額を叩かれた。

「ふざけるな」

ムツとして、額を押さえたまま、先ほどテラスから見た空飛ぶ乗り物について訊いてみた。

「ああ、飛空艇か。ニッポンにはないのか？」

「飛行機ならあるけど……」

結衣はロイドから紙とペンを借りて、飛行機の絵を描いた。

ロイドはそれを少し眺めて、

「この羽は動くのか？」

と問いかけた。

「動かない」

「じゃあ、垂直には飛べないな」

「うん。滑走路を走って、助走を付けてから飛ぶの」

「クランベールには普及しない乗り物だな」

「どうして？」

「さっき話した遺跡のせいだ」

クランベール大陸の各地には謎の古代遺跡が点在している。そして、その遺跡の中には何だかわからない機械装置がある。しかも、この機械装置は時々光を発したりして、どうやら機能を停止していない事が知られている。

何だかわからないので停止させる事もできず、何だかわからないのでうかつに壊す事もできない。

そのため遺跡を避けるように街が造られ、遺跡保護のため、新たな道路を造る事はできない。街道は古代に造られた石畳の道を補修して利用し、街と街の移動には垂直離着陸可能な飛空艇が主な交通手段として発達した。

「なんか、その遺跡見てみたいな」

「街の外にしかない。諦めろ」

王宮内では自由にいいと言われたが、王子が勝手に街の外どころか、王宮の外に出る事さえ許されるわけがない。仕方なく結衣

は諦めた。

気を取り直して、本来の目的をロイドに尋ねた。

「私に渡したいものって何？」

ロイドはポケットを探るとタバコの箱くらいの大きさの黒い板を結衣に差し出した。

「持ってる」

結衣は受け取った黒い板を裏返したりして珍しそうに眺めた。厚みは一センチくらいで、真ん中にボタンがひとつあるだけだ。

「何？ これ」

ロイドはポケットから、もうひとつ同じような板を取り出して見せる。

「通信機だ。そのボタンを押せば、オレの持つこいつに通じる。通話も可能だ」

「ああ、ケータイみたいなものね」

結衣が納得して通信機をポケットにしまうと、ロイドが興味深そうに問いかけた。

「ケータイって何だ？」

「携帯電話。持ち歩ける電話よ。クランベールにはないの？」

「ない。どういう仕組みだ？」

「……え……」

携帯電話がどんな機能を持っていて、どうやって使うのかは説明できても、仕組みはわからない。本体の仕組みも通話の仕組みも考えた事などない。

結衣はガックリと肩を落とした。

「……帰ったら、調べとく」

ロイドはひと息嘆息すると、結衣を指差して恫喝する。

「いいか、わかっているだろうが、オレはヒマじゃない。くだらない用事や、イタズラでそのボタンを押してみろ。二度とそんな事をする気にならないような、お仕置きが待っていると思え」

結衣はゲンナリして返事をする。

「はいはい」

言われるまでもなく、わざわざロイドに電話でお話するようなネタもない。どんなお仕置きなのか、想像を絶するセクハラのような気がして、考えてみる気にもならなかった。

「じゃあ、探検に行ってきます」

背を向けて立ち去ろうとする結衣に、ロイドが軽い調子で忠告した。

「洗濯物置き場や、食料庫は覗かない方がいいぞ」

「なんで？」

結衣が振り返って尋ねると、ロイドはニヤリと笑った。

「そういう人気のない狭い場所は、職場恋愛の巣窟になっているからだ。鉢合わせしたらお互い気まずいだろう」

時々、給湯室に内鍵が掛かっているアレだろうか。結衣は一瞬絶句した後、吐き捨てるようにつぶやいた。

「……ったく、仕事しろっての！」

足音も荒く立ち去ろうとする結衣に、再びロイドが声をかけた。

「そういう場所への呼び出しなら応じてやろう」

「絶対、呼ばない！」

振り向きもせずそう叫ぶと、結衣は研究室を後にした。

扉を閉める間際、ロイドのクスクス笑う声が聞こえた。

やっぱり、からかって遊んでるんだ。そう思うと、何だかちよつと切ない気分になった。

秘密 (2)

研究室を出て最初の分岐を結衣は左に曲がった。まっすぐ進めば、昨日行った謁見の間へ向かう。そちらは王宮の”表側”に当たる。

謁見の間の他に、貴賓室、執務室、会議室、パーティホールなどがある。昨日のようにうっかりエライ人に鉢合わせする可能性が高いので、結衣としてはあまり足を踏み入れたくない。

だからあえて”裏側”の方へ行ってみる事にした。

角を曲がって少し行くと、なんだかおいしそうな匂いが漂ってきた。厨房が近くにあるようだ。という事は、覗くと言われた食料庫もあるのかも。

結衣は努めてキョロキョロしないようにしながら、ゆっくりと廊下を進んだ。

前方左手に扉の開け放たれた部屋があり、その奥からおいしそうな匂いと共に、話し声やトントンと小気味のよい音が漏れている。おそらくそこが厨房だ。

ちよつと覗いて見ようと近付いた時、中からエプロンをつけた女の子が飛び出して来た。

ぶつかりそうになって思わず声を上げると、女の子は小さな悲鳴を上げて後ろに一步飛び退いた。

「ごめん！ 驚かせて」

結衣が謝ると女の子は深々と頭を下げた。

「こちらこそ、申し訳ありません！」

女の子のあまりに恐縮した様子を咂然として見つめて、ハタと気がついた。自分は今、王子様だったのだ。

「いいよ、気にしないで。ボクがぼんやりしてたから。顔を上げて」
結衣がそう言うとな女の子は恐る恐る顔を上げた。

「何をやっているの？」

入口でもめていると、中から別の女の子が怪訝な表情で現れた。彼女は結衣の姿を見ると、途端に人なつこい笑顔を浮かべて話しかけてきた。

「あ、セリオス殿下じゃないですか。どうぞ寄って行って下さい。新作のお菓子があるんですよ。ぜひご賞味下さい」

「……あ、でも……」

いったい、どう反応するべきなんだろう。王子が厨房の人と親しいとはクラーク氏から聞いていない。

結衣がためらっていると、女の子は腰に手を当てイタズラっぽい笑顔で小首を傾げると、片目を閉じて見せた。

「もちろん、クラークさんには内緒です」

なるほど、そういう事か。結衣は思わずクスリと笑う。

「じゃ、寄っていいのかな」

「どうぞ、こちらへ」

女の子はにっこり笑うと、結衣を厨房の中へ招き入れた。

部屋に入ると皆がそれぞれ笑顔で結衣に挨拶をする。王子は使用人たちに慕われているようだ。

女の子に案内されて、厨房の隅にやって来ると机の上にカップケーキが並べられ、甘い香りを放っていた。

「どうぞ、お召し上がり下さい」

勧められるままに手に取ったカップケーキはまだほんのりと温かった。

「いただきます」

結衣がケーキを頬張っていると、その様子を見つめながら女の子が満足そうに微笑んだ。

「お気に召しましたら、いくつかお持ち帰りいただいてよろしいですよ」

おいしいお菓子は作るのも食べるのも大好きだ。結衣は思わず声が弾んだ。

「本当？　じゃあ、ロイドの分と二つもらってもいい？」

笑顔で尋ねると女の子は不思議そうに首を傾げた。

「あら、ヒューパック様は甘いものが苦手ではありませんか？」

しまった。ロイドの嗜好までは聞いていなかった。結衣は苦笑して女の子に質問返しする。

「え……そうだったっけ？」

「ええ、何度かお勧めしましたが、断られました」

「そっかあ、ボクの知らない事もあるんだね。ははっ……」

結衣は苦し紛れに乾いた笑いを漏らす。

「じゃあ、クラークにあげようかな」

上手く切り返したつもりになっていたら、女の子が苦笑と共に指摘した。

「それじゃ、よけいな間食した事がばれちゃいますよ。それにクラークさんは今虫歯の治療中のはずでは……」

「……そうだったね。じゃあ、ボクの分だけにしておくよ」

結衣はガックリと肩を落とした。どうしてあの人たちは自分の事を教えておいてくれないのだろう。

クラーク氏はともかく、ロイドについては一番気になる謎がある。どうして王と王子に信頼されているのか。厨房の人は知らないかもしれない。これについてはクラーク氏に訊いてみよう。今の時間クラーク氏は王子の部屋の掃除を監督しているはずだ。

紙袋に入れてもらったお菓子を受け取り、結衣は厨房を後にした。

厨房の裏から使用人たちが使う階段を上がって二階に出ると、すぐ隣にある客室の前で掃除道具を持った女の子が二人もめていた。

「どうしたの？」

結衣が尋ねると、片方の女の子がもう一人を指差しながら困ったように告げた。

「あ、セリオス殿下。聞いて下さいよ。この子が幽霊がいるから客

室に入りたくないって言うんですよ」

結衣は思わず眉をひそめる。

「幽霊？ 見たの？」

女の子はモップの柄を握りしめて結衣に訴える。

「姿は見えてませんが、絶対にいます。だって、今はお客様がいないのに、お風呂場から濡れた足跡が点々と部屋の中を歩き回ってるんですよ」

思わずホラー映画のワンシーンを想像して結衣は顔を引きつらせた。

「へええ。誰か君が部屋に入る前に、入った人がいるんじゃないの？」

結衣が問いかけると、女の子はムキになって更に言う。

「そんな人はいません！ いたとしても濡れた足で部屋の中を歩き回る意味がわかりません」

女の子の剣幕に結衣は苦笑すると、

「確かに。クラークに伝えておくよ」

そう言って彼女たちと別れ、客室の少し先にある王子の部屋に向かった。

部屋の扉を開くと、ちょうど掃除を終えた女の子たちが出て行くところだった。女の子たちを見送った後、結衣はクラーク氏に客室の幽霊の事を告げた。

クラーク氏は、さほど驚いた様子もなく軽いため息をついた。

「よくある事です」

「え？ よく幽霊が出るの？」

「いえ、そういう噂の事です。真夜中に厨房から水音が聞こえたとか、満月の夜に庭園で白い影が踊っていたとか。全部根拠のない噂です」

「なーんだ。すぐそばの部屋だから、こっちにも出たらやだなって思っちゃった」

結衣は安堵と共に苦笑を漏らした。そして、ロイドの謎について

クラーク氏に尋ねた。

クラーク氏は笑顔であっさりと教えてくれた。

「昔、陛下がまだ皇太子殿下だった頃、お知り合いになったそうです」

当時、若き国王は身分を隠して、お忍びで遺跡の見学に行っていた。そこで考古学者と共に遺跡の調査に来ていたロイドと出会ったらしい。

「お二人の間にどんなやり取りがあったのかまでは私は存じませんが、ヒューパック様が陛下に信頼されている理由はわかります」

黙って見つめる結衣をまっすぐ見据えて、クラーク氏はきっぱりと言った。

「ヒューパック様は、金や名誉をちらつかせても決して動きませんから」

それはなんとなくわかる。そんなものに釣られる奴なら、ラフィット殿下の甘い言葉にあっさり乗っているはずだ。

どこの世界でも、人はそんなものに揺らぎやすいのだろう。庶民は金に、エライ人たちは地位や名誉に。どちらにも揺れないというのは確かに信頼に値する。

「まあ、あの方の場合、一度こうと決めたら、てこでも動きませんからねえ。別の言い方をすれば、頑固ってことですかね」

そう言っただけクラーク氏は首をすくめてクスリと笑った。結衣もつられて笑う。

「じゃあ、王子様がロイドを気に入ってるのは何故？」

結衣の質問にクラーク氏は更に破顔する。

「ああ、それはもっと単純な理由です」

国王に気に入られたロイドは、度々王宮にやって来るようになった。

ある時、手土産として幼い王子に機械仕掛けのおもちゃを献上したという。これをいたくお気に召した王子は、その後ロイドが王宮にやって来るたび、まわりつくようになった。

だが、元々ロイドは王子と遊ぶためにやって来ているわけではない。王の依頼による仕事の打ち合わせ等で、必然的に王と話す時間の方が長くなる。

幼い王子にしてみれば、王がロイドを独り占めしているように見えたのだろう。いつもは聞き分けのいい王子が、ある日思いあまっ
て、ロイドを自分にくれと王に願いだした。

ひとり息子を溺愛する王は、我が子の初めてのおねだりに喜んで、ロイドに研究施設ごと王宮内に移転してくれるよう頼んだ。

ロイドは居場所が変わるだけで何の問題もないため、これを快諾し現在に至っている。

「王族や貴族の中には、出自のわからないヒューパック様が王宮内に住まう事を快く思わない者もありますが、ご本人は意に介しておりません。多少強引で頑固な方ですが、ご結婚なさるなら私も歓迎いたしますよ」

「はい？」

クラーク氏がにっこり笑って突飛な事を言うので、結衣は思わず目が点になった。

「陛下のご提案だそうですね。お互い好き合ってるようだから、その内いい返事がもらえるだろうとおっしゃってました」

どこが好き合ってるように見えたのかは謎だが、もしかすると王は結衣がうやむやに言い逃れたのを察知して、外堀を埋める作戦に出たのかもしれない。

胸を触られたし、キスされたし、ここはロイドに責任を取ってもらって、王の望む通り結婚するしか——と諦めかけた時、ふとロイドの勝ち誇ったような笑顔を思い出した。

妄想の中のロイドがふんぞり返って結衣に告げる。

——おまえは、これから一生、オレのおもちゃだ——

（絶対イヤだ！ あんな俺様なダンナ！）

だいたいロイドの有無を言わせぬ強引さは、クラーク氏の言うような”多少”程度の控えめなものではない。あの二重人格ぶりに、クラーク氏も騙されているに違いない。

結衣が大きいため息をつくとき、クラーク氏は不思議そうに首を傾げた。

「いかなさいましたか？」

「なんでもない。個人的な心の葛藤です」

「そうですか」

そう言ってクラーク氏は、懐中時計を取り出して少し眺めた。

「昼食までには、まだ少し時間がございます。東屋にでも行かれま
すか？」

「東屋？」

「ええ。庭園の西の端にあります。殿下はよくそこで本を読んだり
なさってます」

「ふーん。庭園は午後から探検しようと思ってるから、昼まではロ
イドのどこにいる」

結衣がそう言っていると、クラーク氏は懐中時計をしまい、にっこり笑
って軽く頭を下げた。

「かしこまりました。では正午に食堂でお待ちしております」

「わかった」

結衣は軽く手を挙げて、クラーク氏に別れを告げると、元来た道
を引き返してロイドの研究室に向かった。

秘密 (3)

研究室の扉を開くと、先ほどと同じ場所にロイドはいた。

コンピュータの画面を見つめ、キーボードを操作している。相変わらず声をかけても気付いていない。

ふと、イタズラ心が芽生えて、結衣は途中から足音を忍ばせて近付いた。

脅かしてやろうと手を伸ばした時、突然ロイドが椅子を反転させて、その手を掴んだ。掴んだ手を引かれ、結衣はそのままロイドのひざの上に倒れ込む。

肩に留まった小鳥が飛び立って、机の上に舞い降りた。

「何の真似だ」

無然とした表情でそう言うと、ロイドは結衣の尻をピシヤリと叩いた。

小さな悲鳴を上げて、結衣は尻を押さえると慌ててロイドのひざの上から起き上がった。

「変なところ叩かないでよ、エロ学者！ 気付いてたんなら返事くらいしたら？」

「オレはヒマじゃないと言っただろう。殿下の件に関しては極秘だから、助手が使えない。データの分析から全部ひとりでしなければならぬんだ。おまえの悪ふざけに付き合っているヒマはない」

返事さえしていれば、悪ふざけはしなかったはずなんだが……。

と思ったが、何を言っても無駄な気がしてやめておいた。

「お昼ご飯まで、ここにいていい？」

「邪魔するなよ」

そう言うとロイドは、再び画面に向かいキーボードを叩き始めた。結衣は後ろからその画面を覗いて見たが、何の事やらさっぱりわからないので、すぐにその場を離れた。結衣の後を追うように小鳥が飛んできて肩に留まった。

部屋の中には人捜しマシンの他にもいろんな機械が置いてある。それらを眺めていると、ロイドが作業の手を止めることなく注意した。

「触るなよ」

「わかってるわよ」

うかつに触って壊そうものなら、どういうセクハラなお仕置きが待っているか、考えたくもないので端から触るつもりはない。

一通り見て回った後、結衣は窓辺に縫った。肩に留まった小鳥を手の平に乗せて、指先で頭を撫でながら窓の外に視線を移す。庭師が庭園の花壇に水をまいている姿が見えた。

静まりかえった室内には、ロイドが叩くキーボードの音がカタカタと不規則に響いていた。

少しの間、ぼんやり外を眺めていると、ふと、キーボードの音が消えている事に気付いた。

振り返るとすぐ後ろで、ロイドがカップに入った熱い茶をすすりながら、同じものを結衣の前に差し出した。結衣は手の平の小鳥を肩に乗せると、両手でそれを受け取る。

「ありがとう。もう、すんだの？」

「いや、キリが悪くなるから休憩。もうすぐ昼だしな。探検はすんだのか？」

「うん、だいたい。午後は外に出てみるつもり」

「そうか」

そう言ってロイドは再び茶をすすった。

クラーク氏は根拠のない噂だと言ったが、気になったので客室の幽霊についてロイドに訊いてみた。ロイドはそれについて肯定も否定もしない。

「幽霊っていると思う？」

「だから、それについては議論しない事になっている」

「なんで？ 学者だから自分の目で見たものしか信用しないってこと？」

結衣がからかうように指摘すると、ロイドは意味ありげに笑う。

「目で見たものほど信用できないものはないぞ」

「へ？」

何を言っているのか意味がわからず、結衣は間抜けな声を出す。

ロイドは得意げな表情で、我が意を得たりとばかりに説明を始めた。

「たとえば、その小鳥。オレが見ているものと、おまえが見ているものは全く同じじゃない」

指差されて結衣は思わず肩の小鳥を見つめた。

「視力が違うから？」

間抜けな事を問いかけたが、ロイドはかまわず続ける。

「そうじゃない。おまえは目でものを見ていると思っているだろうが、実際に見ているのは脳だ。目は映像を取り込んでいるに過ぎない。目から取り込まれた映像は脳で処理判断される。臓器の中で脳ほど主観や感情に機能が左右されやすいものはない。その脳が映像を処理判断する時、主観や感情を差し挟まないわけがないだろう？だから、おまえが見ているものと全く同じものをオレが見る事はできない」

結衣は益々眉間にしわを寄せる。ようするに幽霊を見たというのは気のせいだと言いたいのだろうか。

「結局、幽霊っているの？ いないの？」

「幽霊を確かに見たと言う者にとっては、確かに見たんだろう。だが、幽霊に限らず、全く同じものをオレに見る事ができない以上、いるともいないとも判断できない」

「はあ……」

なんだか煙に巻かれたような気がする。気を取り直して提案してみた。

「じゃあ、全く同じものが見えるようになる機械を作ったら？ 直接脳に映像を送るとか」

名案のような気がしたのに、ロイドはあっさり却下した。

「そんなものは永遠に作れないだろうな。脳に直接映像を送る事は可能だが、それを判断するのは脳だ。人から主観や感情がなくならない限り無理だな」

あっさり却下されたのが、なんだか悔しいのでちよつとイヤミを言ってみた。

「ふーん。あなたにも作れない機械があるのね。エロエロマシーンならお手の物なんでしょうけど」

するとロイドは涼しい顔で切り返した。

「エロエロマシーンなんか作った事も考えた事もない。オレは道具を使わない主義だ」

結衣は思わずガツクリと肩を落とす。

「いったい何の話よ」

ロイドはニヤリと笑うと結衣の耳元で囁いた。

「知りたければ、今夜オレの部屋に來い」

「絶対、行かない！」

茶を飲み終わったカップをロイドに突きつけると、結衣は出口に向かった。

エロネタなんか振るんじゃなかったと、後悔しながら扉を開けようとした時、後ろでまたロイドのかみ殺したような笑い声が聞こえた。

昼食後、結衣は予定通り庭に出た。

庭園の真ん中には大きな噴水があり、水を勢いよく噴き上げている。水しぶきに日の光が反射して小さな虹が見えていた。

噴水を取り囲むように、広い花壇が作られ色とりどりの花が咲き乱れている。結衣は時々身を屈めては花を眺めながら、花壇の間をゆつくりと歩いた。

ふと、視界の端に人影が映った。そちらへ視線を向けると、噴水

の向こう側に淡いピンク色のドレスを着て、同じ色の日傘を差した少女が立っていた。

少女は結衣の視線に気付くと、花がほころぶように可憐な笑顔を見せて、ドレスの裾を軽く持ち上げ会釈した。

結衣も笑顔で会釈したものの、内心ひどく緊張していた。この少女は昨日クラーク氏に教わった、セリオス王子の婚約者、フィオナⅡラスカーズ嬢だ。

緩くウェーブの掛かったクリーム色の長い髪をそよ風に揺らしながら、フィオナはゆっくりとこちらに近付いて来た。正面まで来るとフィオナは日傘を傾けて、結衣を見上げた。

見上げる瞳は大粒のサファイアのように澄んだ青。白磁のごとき、なめらかな白い肌は頬だけほんのりとバラ色に染まり、フィオナはお姫様という形容がぴったりな美少女だ。

結衣を見上げてにっこり笑うとフィオナは口を開いた。

「またお会いできて光栄ですわ、セリオス殿下。今日は突然お邪魔してしまって申し訳ございません」

「かまわないよ。ボクも会えて嬉しい」

緊張しながらも、結衣は笑顔で答えた。

クラーク氏によれば、婚約者とはいえ、フィオナと王子は一度しか会見した事がないと言う。特別な態度をとる必要はないと言われたが、やはり他の人を相手にするよりは緊張する。

「今日はどうしたの？」

結衣が問いかけると、フィオナは日傘を肩に担いで、愛らしく首を傾げた。

「セリオス殿下にお会いしたくて、お父様の用事に無理を言っていて参りましたの。クラーク様にお庭にいらっしゃるとお伺いして捜しに参りました。だって、お父様の用事が済む前にどうしても教えていただきましたかったんですもの」

結衣はギクリとして思わず笑顔が引きつった。努めて平静を装いつつ問いかける。

「え、何を？」

「いやですわ。今度お会いしたら、秘密を教えてくださいとおっしゃったではないですか」

一瞬にして血の気が引いた。

（バカ王子——っ！ 何、謎めいた事言ってるのよ！）

当然ながら、クラーク氏からそんな話は聞いていない。自分が知っている王子の情報から推理してみるが、さっぱり見当もつかない。結衣はパンツのポケットにそっと手を突っ込むと、ロイドのくれた通信機のボタンを押した。

秘密 (4)

ロイドがやって来るまでには、少し時間があるはずだ。それまでなんとか適当にごまかさなければならぬ。

「あ、ああ、秘密ね。それなんだけど、ここで教えるのは無理なんだ。……その、準備とか必要だし……」

「準備、ですか？」

フィオナがキョトンとして首を傾げる。

我ながら、かなり苦しい言い訳だと思う。いったいどんな準備をすればいいんだか。

苦笑を湛えてフィオナを見つめていると、頭の上からロイドの声がした。

「殿下——っ！」

フィオナが結衣の頭上を見上げて、口を押さえ小さな悲鳴を上げた。

頭の上に影が差し、振り向きざまに見上げると、日の光を背にした巨大な影が目の前に降ってくる場所だった。

結衣が声も出ないほど驚いていると、目の前にフワリと降り立ったロイドは、フィオナに向かって恭しく頭を下げた。

「フィオナ様、お久しぶりです。お邪魔して申し訳ありません」

挨拶をするロイドを見て、ふと、我に返った結衣は、

「フィオナ、ちょっとごめん」

そう言って断ると、ロイドの腕を掴んでフィオナの元から遠ざかった。

声が聞こえない所まで充分に遠ざかると、結衣はロイドの手を離し小声で怒鳴った。

「びっくりするじゃない！ どこから飛んできたの?!」

「二階のテラスだ。ちょうど用があって部屋に戻っていた」

見るとロイドは、背中に銀色のランドセルのようなものを背負っている。

「何？ それ」

「反重力飛行装置の試作品だ。今のところオレの体重じゃ、このくらい浮くのが限度だが」

そう言ってロイドは両ひざを曲げて見せた。確かに身体が沈むことなく宙に浮いている。

「高い所から低い所への滑空や、着地時の衝撃を緩和するくらいの役には立つ。おまえならもう少し浮くかもな」

また、何の役に立つのか微妙なマシンのようだ。”空が飛べたらおもしろい”という発想のような気がする。

結衣はロイドの腕に手をつけて、思い切りため息を漏らした。

「我が子自慢は後でいいから」

結衣の言葉にロイドはムツとした表情で問いかけた。

「何の用だ」

「王子様がフィオナに秘密を教える約束をしていたらしいのよ。知らない？」

「秘密？ 知らないな」

ロイドは少し首を傾げた後、あっさりと答えた。

「お友達なんでしょ？ 何か聞いてないの？」

「知らないものは、知らない」

相変わらず淡々としているロイドに苛々しながら、ふと閃いた。

「もしかして、その秘密が行方不明の原因じゃないの？」

それまで興味なさそうだったロイドが途端に食いついた。

「なるほど。一理あるな。よし、おまえはフィオナ様から秘密についでに情報を聞き出せ」

「ええ?!」

驚く結衣の肩を叩くと、ロイドは大声でフィオナに声をかける。

「フィオナ様、私はこれで失礼します」

そして、背中の装置を作動させると、超低空飛行でその場を立ち

去った。

「ちよっと、ロイド！」

結衣は慌てて捕まえようとしたが、案外早くてあっさり逃げられてしまった。

呆然と見送る結衣の側に、クスクス笑いながらフィオナがやって来た。

「相変わらず楽しい方ですね」

「ごめんね、騒々しくて」

フィオナの可憐な笑顔を見つめて、結衣は思わず苦笑する。

弱った。教えると言った本人が、まだ教えてもらっていない人から、どうやって聞き出せと言うのだろうか。

とりあえず秘密を教える事は先送りにしなければならぬ。そこはロイドに責任をなすりつけてやろう。

「あの……秘密なんだけど、やっぱり準備が整わなくて……。ロイドに手伝ってもらおうと思ったんだけど、彼が忙しいみたいで、当分無理なんだ。またの機会でもいいかな？」

フィオナは少し黙った後、すぐに笑顔で答えた。

「わかりましたわ。突然お邪魔した、わたくしもいけないんですもの。次の機会を楽しみにしておきます」

結衣はホッと胸をなで下ろした。とりあえずの問題は何とか回避できた。後は世間話でもしながら、秘密の一端でも聞き出せれば、ロイドに怒られる事もないだろう。

結衣は微笑んでフィオナを誘う。

「せっかくだから、中でお茶でもどう？　少し話をしようよ」

「ええ、よろこんで」

結衣は軽く手を取り、フィオナを王宮までエスコートした。

王宮の入口にはクラーク氏が待っていた。彼に案内され、二人は貴賓室のひとつに入る。向かい合わせてテーブルに着くと、ほどなく女の子がお茶とお菓子を運んできた。女の子が部屋を出て行くと、クラーク氏も挨拶をして、控えの間に下がった。

結衣が勧めると、フィオナはお茶を一口飲んで、静かに微笑み問いかけてきた。

「お名前をお伺いしてもよろしいですか？」

何の名前だろう。秘密に関係ある事だろうか。結衣が黙って考えていると、フィオナはさらに問いかけた。

「あなたのお名前ですわ。セリオス殿下によく似た方」

一瞬にして全身が硬直した。ばれた？ そう思った途端にロイドの不機嫌そうな顔が頭に浮かんだ。

妄想の中のロイドが鬼のように怒って結衣を怒鳴る。

——この大根役者め！ お仕置きだ！——

そう言ってロイドは、ひざの上に横たわる結衣の尻をバシバシ叩いた。

（そんなのイヤだ！ 第一、元々役者じゃないし！）

何とか上手く取り繕う方法はないものかと思いを巡らせるが、考えれば考えるほど何も思い浮かばない。

フィオナは結衣が硬直しているのを気にした風でもなく、落ち着いた様子で語り始めた。

「わたくし、セリオス殿下とは一度しかお会いした事ありませんが、その時殿下のお人柄に触れて大好きになりましたの。この方が婚約者で本当によかったと思えました。ですから、あなたがセリオス殿下でない事は、すぐにわかりましたわ。それにあなたは女性ですよね」

フィオナの透き通る青い瞳に見据えられ、とてもごまかしきれないと観念した結衣は深く項垂れた。

「……ごめん、フィオナ。あなたを騙すつもりで、王子様のフリをしているわけじゃないの」

「ええ。何か事情がおりなのは、お察しいたしますわ。でも、お名前を教えていただけませんか？」

結衣が顔を上げると、フィオナは静かに微笑んだ。決してイヤミでもなく、自分を騙した結衣を怒っている風でもない。結衣はホッとして名を告げた。

安心したと同時に、不安に駆られる。フィオナはすぐに別人だとわかったと言った。

一度しか会った事のないフィオナに、こうもあっさり見破られてしまうという事は、毎日のように顔を合わせている使用人たちにはバレバレだったのではないだろうか。

何もそんな素振りは見られなかったが、影で噂が広まっているのではないかと気ではない。なので、フィオナに確認してみた。

「私って、一目でわかるほど王子様と違うの？」

フィオナはにっこり笑うと、愛らしく首を傾げた。

「いいえ。お顔も声も話し方もそっくりですわ。他の方にはわからないと思います」

それを聞いて結衣は一応ホッとした。なにしろ話し方に関しては、少しでも違うと厳しくダメ出しされるほどクラーク氏に特訓を受けたのだ。

「セリオス殿下はご病気なのですか？」

少し不安げな表情でフィオナが尋ねた。

「ううん。そうじゃないの。ただ事情があって人前に出られないだけなの。誰にも内緒だから、お願い！ あなたも秘密にしておいて」

結衣が拝むように両手を合わせて懇願すると、フィオナはにっこり微笑んだ。

「わかりましたわ。誰にも内緒にしておきます。クラーク様とヒューパック様はご存じなんですよね？」

「うん。見た目が似てるっただけで、ロイドに身代わりを押しつけられたの。ヒドイと思わない？」

結衣が思わず愚痴ると、フィオナは楽しそうにクスクス笑う。

「でも、ユイはヒューパック様が好きなんですよ？」

「ええ?!」

どこがそんな風に見えたのか、断固否定もできないので、正体を見破られた時よりも結衣は動揺した。

「け、決してそんな事は……だって、あんな奴……」

しどろもどろに否定しようとするが、益々心に動揺が広がり、なんだか顔が熱くなってきた。それをすかさずフィオナが指摘する。

「お顔が真っ赤ですわ」

にこにこ微笑むフィオナを見て、結衣はガックリと項垂れた。侮れない。この少女は鋭すぎる。またしても敗北を喫した結衣は再び懇願する。

「お願い！ それも内緒にしておいて。特にロイドには」

「そんな無粋な事はいたしません。ヒューパック様はいい方だとセリオス殿下から伺っております。影ながら応援させていただきますわ」

結衣は思わず苦笑を漏らす。やはりみんなロイドの二重人格ぶりに騙されている。そう考えた途端、ふと思った。

（もしかして、本当のロイドを知っているのって私だけ？）

少しドキリとして、心が弾んだが、すぐに否定する。そんなわけはない。今までロイドをいい人呼ばわりしたのは、彼より年や身分が上の人ばかりだ。そういう人たちに対して、いい大人が横柄な態度をとるわけではない。

あまりにもギャップがありすぎるだけで、厳密に言えば二重人格ではないのかもしれない。自分だけ特別だと変な期待をするのはやめよう。

フィオナには申し訳ないが、応援してもらったところで、自分とはともかくロイドはからかって遊んでいるだけだと思う。

とりあえずは尻叩きの刑を免れるためにも、本来の目的を果たさなければならぬ。正体がばれているのだから、かえって訊きやすい。

「フィオナは、王子様が教えてくれるって言った秘密って、何だと思う？」

結衣が尋ねると、フィオナは少し首を傾げた。

「わかりませんわ。ただ、目に見えるものだと思います。見たら驚くよって、おっしゃってましたから」

「目に見えるもの？」

王子はロイドのマシンがお気に入りだと聞いた。昔もらったという機械のおもちゃだろうか。しかし、その場で見せずに”次に会った時”に教えると言った理由がわからない。

「それって、その場で見せるわけには、いかなかったのかしら」

「帰り間際でしたから、時間がなかったのかもしれませんが」

「そっかあ」

時間がなくて見せられなかっただけで、それがロイドのくれた機械のおもちゃだったとしたら、行方不明の原因とはあまり関係がないような気がする。

少し沈黙が続いた時、部屋の扉をノックする音が聞こえた。クラーク氏が応対に出て、すぐにフィオナの所にやってきた。

「失礼します。フィオナ様、ラスカーズ公爵がお帰りになるそうです」

「わかりました。すぐにまいります」

そういつてフィオナは立ち上がった。結衣も続いて立ち上がり、一緒に入口に向かう。入口で立ち止まると、フィオナは微笑んで結衣に挨拶をした。

「今日は突然お邪魔して申し訳ありませんでした。お話しできで楽しかったです」

「ボクも楽しかったよ。また、いつでも気軽に遊びにきてね」

「ええ、そうさせていただけますわ。それでは今日はこれで失礼します」

フィオナは笑顔で会釈すると、迎えに来た侍女と共に貴賓室を後にした。

後ろ姿を見つめたまま、結衣はクラーク氏に正体がばれた事を告げた。クラーク氏はひどく動揺したが、結衣には妙な確信があった。

「大丈夫。あの子は約束を守る。誰にも言わないと思うよ」

結衣が自信に満ちた笑顔でそう告げると、クラーク氏も納得して頷いた。

心に引っかかるのは、やはり王子の秘密。目に見えるもので、見たら驚くもの。

誘拐犯については、探るなど言われたが、こっちについては調べてみてもいいかもしれない。

結衣は行方不明当日の、王子の足取りを追ってみる事にした。

秘密 (5)

クラーク氏によれば、行方不明当日、王子は午前中の半分をロイドの研究室で過ごし、残り半分は本を持って東屋に行っていたようだ。そして昼食を終えて少し後、忽然と姿を消したらしい。

クラーク氏が探し回った時、使用人たちの目撃情報によると、昼食後に自室に入るのを見たというのが最後だ。

王子の部屋の中には特に変わったものはない。その昔、ロイドにもらったと思われる昆虫型ロボットは机の上に置かれていたが、電源が入っていないため動かない。

もつとも、私物に触るなど言われているので、机の中や戸棚の奥に何かが隠されていたとしても、結衣にはわからないのだが。

その可能性は大いにあるが、とりあえず午前中話題に上った事でもあるし、まだ行ってみてないので、結衣は王子のお気に入り場所、東屋に行ってみる事にした。

庭園に出て、噴水の横の花壇を通り抜けると、芝生の上に敷石の道が造られていた。道の上を覆うように白い花を付けた蔓植物のアーチがトンネルのように延びている。その先に東屋があると聞いた。敷石の道は右に緩くカーブしていて、先にあるという東屋は見えない。たしかに一人きりの時間に浸れる隠れ処としては、もってこいだろう。

結衣は緑のトンネルの中を進み、東屋の前に出た。

丸いドーム状の屋根を四本の柱が支える、白い石でできた東屋は、結衣が想像していたよりも少し大きかった。壁はなく、周囲を丸く取り囲むように緩やかな階段が数段あり、屋根の真下に丸い机と椅子が二脚置かれていた。王子はそこで本を読んでいたのだろう。

結衣は東屋の周りをぐるりと一周してみた。特に変わった所は何もない。

机の側まで行ってみようと、階段を三段ほど上った時、突然足元が傾いた。

結衣が足を乗せた途端に階段の下の地面が陥没し、人ひとりがすっぽりと収まるほどの穴が空いたのだ。結衣の身体は重力に従い、その穴に吸い込まれていく。

悲鳴を上げながら、結衣は目の前の階段にしがみついた。幸いしがみついた上の段は大丈夫だったようだ。

一応ホツとしたものの、この状況はあまり安心できるものではない。なにしろ足が宙に浮いている。いずれ力尽きて穴の中に転落してしまうだろう。

少し足を伸ばしてみたが、底に足が届かない。どのくらい深い穴なのか判別不能だ。

しがみついた上の段を支える地面は、結衣の太もも辺りで途切れていた。

今度は足を横に動かしてみた。ふと、右足の甲が土の出っ張りに触れた。恐る恐るその上に右足を乗せてみる。少し体重をかけてみたが、大丈夫そうなので左足も乗せてみた。その途端に左足の下が崩れた。全体重を支えられるほどの強度はないようだ。

だんだんと腕が痛くなってきた。

こんな奥まった場所に人がやってくるのを待っていても絶望的だ。自力で抜け出せない以上、助けを呼ぶしかない。

通信機はポケットの中。とても片手で体重を支えられるとは思えない。試しに少し右手を浮かせてみただけで、左腕がぶるぶると震えた。

ボタンだけでも押せないものかと、身体をよじってみたがうまくいかない。こんなことなら、少しくらい筋トレでもしておくんだったと後悔した。

聞こえるわけもないのに、結衣は大声で叫んだ。

「ロイド——ッ！ 助けて——っ！」

すると、黄色い小鳥が目の前に舞い降りて、ピッと返事をした。

結衣が穴に落ちた時、肩から飛び立ってその辺にいたのだろう。

結衣は、わらにも縋る思いで小鳥に頼んだ。

「お願い、ロイドを呼んできて」

だが、小鳥は返事をするだけで動こうとはしない。

それもそのはず、小鳥は”ロイド”を自分の名前だと認識しているのだ。

「あなたの生みの親よ。わからないの？」

苛々しながら訴えかける結衣を小鳥は首を傾げて見つめるばかり。ふと、小鳥に初めて命令した時のことを思い出した。結衣はロイドを指差して命令した。あの後も何度か小鳥の前でロイドをそう呼んだ。

あの言葉を小鳥がロイドの事だと認識しているなら、きっと通じるはず。

「ロイド、エロ学者をここに連れてきて」

小鳥はピツと返事をして飛び立つと、緑のトンネルを飛び越えて姿を消した。

後は小鳥が、ロイドを連れてきてくれる事を信じて待つしかない。少しホッとしてひと息ついた後、結衣は思わず苦笑した。

（ロイドが知ったら、変な言葉を教えるなって怒るだろうな）

どれだけ時間が経ったのか、待つ時間はやけに長く感じられる。そろそろ腕も限界に近い。助かったら、明日は間違いなく筋肉痛だろう。

結衣が荒い息を吐き始めた時、緑のトンネルの方から走る足音が聞こえてきた。結衣は弾かれたように、そちらへ顔を向けると大声で名を呼んだ。

「ロイド！」

その直後、緑のトンネルから、小鳥の後を追うようにロイドが駆

け出してきた。

先に小鳥が返事をして、結衣の側に舞い降りた。

「ユイ！ どうした？」

ロイドは結衣の姿を認めると、東屋の側まで駆け寄った。そして、結衣の嵌った穴を少し眺めると、裏側に回って頭の上から姿を現した。

案外冷静だ。確かにこちら側から階段を上がると、更に崩れて二人とも穴の中に転落しかねない。

それよりも、先ほど駆け寄ってきた時の必死な表情と、名前を呼ばれた事が意外で、結衣は呆然としてロイドを見つめた。その様子を怪訝そうにロイドが尋ねる。

「なんだ？」

「初めて名前を呼ばれたような気がする」

結衣がポツリとつぶやくと、ロイドは意地悪な笑みを浮かべた。

「余裕じゃないか。もうしばらく、そうしているか？」

途端に現実を思い出して、結衣は泣きそうな顔で訴えた。

「足場が崩れそうなの。お願い、すぐに助けて」

ロイドは真顔になると、結衣の両腕の根元を掴んだ。

「首に掴まれ」

結衣は言われた通りロイドの首に腕を回した。腕に力が入らないので、首の後ろで両手の指を組み合わせる。

ロイドは結衣の背中に両腕を回すと、抱きかかえるようにして一気に穴から引き抜いた。二人は同時に安堵の息を吐いた。

安心した途端、結衣は掴まったロイドの首が、うっすらと汗をかいている事に気がついた。研究室からずっと走ってきたのだろうか。すっぽりと包み込まれた暖かさに、すっかり安心しきって、そんな事をぼんやり考えていると、突然耳元で声が聞こえた。

「ケガは？」

顔を上げると、息が掛かるほどの至近距離にロイドの顔があり、結衣は思い切り驚いた。

そして、ふと我に返り、自分の置かれている状況に再び驚いた。首に腕を回して、ロイドのひざの上に座り、抱きかかえられている。まるで、イチヤイチャカップルのようではないか。

慌ててロイドから離れようとする、足に痛みが走った。

「いたっ……！」

結衣が思わず声を上げると、ロイドが上から覗き込んだ。紺色のパンツのひざから下が黒く変色している。

「なんか派手に血が出ているみたいだな。医者に診せた方がいい」
そう言ってロイドは軽々と結衣を抱き上げ、立ち上がった。そのまま平然と歩き始めたロイドに結衣は思わず抵抗する。

「降ろして。自分で歩くから」

「歩かない方がいい。骨に異常があるかもしれない」

ロイドはそう言っ歩き続ける。なおも結衣は食い下がる。

「医者に診せたら、私が女だってばれるんじゃないの？」

「大丈夫だ。いう事を聞く医者がひとりいる」

「……え……」

やはり自分以外にもロイドの本性を知る者がいるようだ。なんだかガツカリしている自分に少し苛立って、結衣はそのまま黙って俯いた。

「いわゆる、これって”お姫様だっこ”だ。それが照れくさくて抵抗したが、ロイドにしてみれば荷物を運んでいるのと同じなのだろう。自分だけドキドキしているのが、ちょっと悔しかった。

考えないようにしようと思っていたのに、フィオナに指摘されて、余計に意識してしまい、ロイドの顔を見ただけでドキリとしてしまう。

東屋を離れ、緑のトンネルに差し掛かった時、黙り込んだ結衣を不審に思ったのか、ロイドが立ち止まって顔を覗き込んだ。

「おまえ、顔が赤いぞ。熱でもあるのか？」

そんな事は言われなくても自分でわかっている。だから黙って俯いていたのに、いちいち指摘しないで欲しい。

ロイドの無神経さに、無性に腹が立ち結衣はついつい声を荒げた。
「なんでもないわよ。放つといて!」

「何を怒っているんだ」

呆れたようにそう言うと、ロイドは再び歩こうとして、すぐに立ち止まった。

「あ、そうか。そういう事か」

頭の上でつぶやく声にギクリとして、結衣は思わずロイドを見上げた。

また学者の脳が、勝手に思考の飛躍をしているに違いない。ここは是非とも確かめておく必要がある。

「何?」

結衣が尋ねると、ロイドはニヤリと笑った。

「せっかく人気のない場所に呼び出したのに、さっさと帰ろうとするから怒ってるんだろう? おまえがケガをしてなければ、もう少し付き合ってやるんだが、今日の所は諦めろ」

結衣は愕然とする。やはり、確認してよかった。とんでもない勘違いだ。今度はキツパリ否定しなければ!

「違うわよ! もう、降ろして!」

結衣が手足をばたつかせて、降りようとする

「暴れるな。落とすぞ」

そう言ってロイドは腕の力を一瞬緩めた。

「イヤッ……!」

身体が滑り落ちそうになり、結衣は思わずロイドにしがみつく。

「ったく。ケガを増やしたくなければ、おとなしく掴まってろ」

吐き捨てるようにそう言って、しっかりと結衣を抱え直すと、ロイドは再び歩き始めた。結衣はまた黙って俯いた。

緑のトンネルに入り少し歩いた時、ロイドが頭の上でポツリとつぶやいた。

「そんなにイヤなのか」

何の事だろう? 結衣がゆっくりと顔を上げると、ロイドが見下

ろしていた。目があった途端、ロイドはふてくされたような表情で顔を背けた。

「いや、いい」

ひと息嘆息すると、ロイドはそれきり口を閉ざし、黙々と歩き続けた。

ロイドにしては歯切れが悪い。きっと呆れているのだろう。訳もなく怒っている結衣に。

結衣が苛立っている理由などロイドにはわかるはずがない。元々身勝手な理由だ。自分だけドキドキしているのが悔しくても、それについてロイドに責任はない。

わざわざ走って助けに来てくれたのに、礼も言ってなかった事に気がついた。

「ロイド、助けに来てくれて、ありがとう」

「ああ」

短く返事をしただけで、ロイドはまた、黙々と歩き続けた。

秘密 (6)

王宮内の医務室にたどり着くと、ロイドは乱暴に扉を足で蹴った。

「開けろ、ローザン！ いるんだろう？」

「なんなんですか。扉ぐらい自分で開けてくださいよ」

ブツクサ言いながら、小柄な若い医師が扉を開けると、ロイドは
ずかずかと部屋に入った。

「見ての通りだ。両手がふさがっている」

ロイドは勝手に結衣を診察台の上に降ろすと、ローザンを振り返
った。

「さっさと閉めろ。おまえひとりだな？」

「そうですけど。セリオス殿下じゃないですか。どうかなさったん
ですか？」

ローザンは言われた通り扉を閉めて、ロイドの側までやってきた。

「こいつを診てやってくれ。足にケガをしている」

「こいつって……。え？」

ローザンは困惑した表情で、結衣とロイドを交互に見つめる。

ロイドは凶悪な笑みを浮かべ、ローザンの肩を引き寄せると、耳
元で静かに恫喝した。

「いいか、これから話す事は国家の重要機密だ。たとえ相手が上司
や同僚でも、口外すれば守秘義務違反で、王宮医師の資格はもとよ
り、医師免許そのものも剥奪されるものと思え。ついでに懲罰付き
だ」

「そんな話、聞きたくないです」

ローザンは泣きそうな顔で訴えたが、ロイドは聞く耳持たない。

「もう遅い。黙って聞け」

そう言っってロイドは、ローザンの額をペチッと叩くと、一方的に
王子失踪事件と結衣の正体について説明した。

話を聞き終わるとローザンは、諦めたように嘆息した。

「わかりました。ようするにこの方、ユイさんを殿下だと思って接すれば、問題ないわけですね」

「そういう事だ」

ロイドはローザンの背中をバシバシ叩いた後、ふと何かを思い付いたらしく、再びローザンの肩を引き寄せた。

「そうだ、ローザン。おまえヒマだろう。明日からしばらく、オレの助手になれ」

ローザンは驚いてのけぞる。

「ええ?! ぼくは人間専門で機械の事はわかりませんよ。それに、たとえヒマでも、ここに待機しているのが仕事なんですから」

「機械の事はわからなくていい。データ解析の助手だ。それに忙殺されてて、肝心の装置や基盤の調整に手が回らないんだ。医局長にはオレから話を通しておく。新しい医療機器の開発で外科医の意見を聞きたいという事にしておこう」

「勝手に決めないでくださいよ。ぼくにも都合ってもんが……」

わめくローザンの鼻先に、ロイドは人差し指を突きつけた。

「おまえの都合より殿下の方が、はるかに優先順位が高い。わかりきった事だ」

ロイドはローザンの抗議を一蹴すると、出口へ向かう。

「オレは日が暮れる前に調べる事があるから、そいつは任せた。自力で歩けないようなら呼んでくれ。そいつが通信機を持ってる」

口を挟む隙を与えないロイドに、すっかり諦めモードのローザンは、大きいため息をついて従った。

「わかりました」

部屋を出ようとするロイドに、結衣は声をかけた。

「あの、なんとか自力で帰るようにするから」

ロイドは不機嫌そうに結衣を睨むと、

「おまえは、これ以上勝手な事をするな。ローザンの判断に従え」と厳しく言い放ち、扉を閉めた。

なんだか、いつにも増して横柄さがパワーアップしているような気がする。

ローザンはロイドを見送った後、ガツクリ肩を落として、とぼとぼと結衣の乗った診察台の側に戻って来た。

「相変わらず、強引な人だ……」

ぼやくローザンに結衣は問いかけた。

「いつも、あんな風なの？」

「はい。でも今日は、特に機嫌が悪そうでしたね。あ、ちょっと失礼します」

そう言いながらローザンは結衣の靴を脱がせた。ローザンは血の滲んでいる右足を少し眺めて、結衣に許可を得ると、パンツの裾からひざのあたりまで、ザクザクとハサミで切り開いた。

結衣は一連の作業を、ぼんやりと眺めながらポツリとつぶやいた。

「たぶん、私のせいなの」

「え？ 何がですか？」

ローザンは、デジカメのようなもので結衣の足を撮影しながら尋ねる。

「ロイドの機嫌が悪い理由」

「そうなんですか？ 骨に異常はないようですね」

結衣の話を聞きながらも、ローザンはてきぱきと治療を進める。

先ほどのデジカメはレントゲンのようなものだったらしい。

「ちよっと苛ついてて、ロイドに八つ当たりしちゃったの」

それを聞いて、途端にローザンの手がピタリと止まった。驚愕の表情で結衣を見つめる。

「ロイドさんに八つ当たり？ ユイさんって怖いもの知らずっていうか……強者ですね」

「……え？ そう？」

ロイドってそんなに恐れられているんだろうか？ 結衣が苦笑すると、ローザンは治療を再開しながら、おもしろそうにクスクス笑った。

「ロイドさんって強引で頑固ですけど、陛下に信頼されてて、仕事もできるし、案外社交的で面倒見もいいから、人望も厚いんですよ。科学技術局の人たちも、局にほとんどいない局長なのに信頼してるんです。その分、副局長は大変そうですね」

意外だ。エライ人たち以外にも”いい人”呼ばわりされている。

結衣は思わず目を丸くした。

「でも、ちょっと子供っぽいところがあるんですね。あれって、たぶん……」

そこまで言うと、ローザンは益々おもしろそうにクスクス笑った。「何？」

結衣は訳がわからず、身を乗り出して尋ねた。しかし、ローザンは答えず、包帯を巻き終わると話をはぐらかした。

「派手に出血してましたが、打撲とすり傷だけです。歩いてかまいませんよ。夕食後、お部屋にお薬をお持ちします」

ローザンは結衣の疑問に答えるつもりはないらしい。柔和な笑顔に強固な意思を感じられる。結衣は追及するのを止める事にした。

結衣は診察台から降りて靴を履くと、その場で二、三回足踏みをしてみる。ほんの少し傷が疼くけど、歩くのに支障はなさそうだ。

ローザンに礼を述べると、結衣は医務室を出て、自力で王子の部屋に戻った。

部屋に戻り、汚れた服を着替えて、ホッとひと息ついた途端、なんだか小腹が空いてきた。朝、厨房でもらったお菓子を食べようと捜してみたが見つからない。

確かに部屋に持って帰ったと思ったが、どこかに置き忘れたか、あるいはクラーク氏に見つかって処分されてしまったのかもしれない。

置き忘れたとしたら、あの後行ったロイドの研究室のような気も

するが、だとしたら甘いものが嫌いだというロイドは、それこそ処分してしまっているだろう。

ガツカリしたら、よけいにお腹が空いてきたが、仕方がないので夕食まで我慢する事にした。

結衣はソファに座り、肩に留まっていた小鳥を手の平に乗せて頭を撫でた。

「ロイド、さっきはありがとう」

それは、両方のロイドに向けた礼の言葉だった。

小鳥は誇らしげにピッと返事をした。結衣にはそんな風に見えて、思わず目を細めた。

秘密 (7)

夕食後、ローザンが持ってきてくれた化膿止めの薬を飲んだ後、結衣は小鳥の電源を切った。

ゆうべは星空しか見てなかったのだ、クランベールの夜景を見てみたくなったのだ。

夜に小鳥を連れ出して、うっかりどこかへ飛んで行ってしまったら、捜すのが大変そうだ。大声で呼んで、隣からロイド本人が出てきても困る。

結衣は、部屋の隅にある机の上に小鳥を置いてテラスに出た。

外に出ると、なんだか甘い香りが鼻をついた。ふと、視界の端に小さな灯りが見えて、そちらに視線を向けると、自室前の手すりにもたれて、ロイドが紫煙をくゆらせていた。

ガラス戸の開く音に気付いたのか、ロイドもこちらに視線を向けた。

目が合うと、ロイドは早速いつものように、本気なのか冗談なのかわからない軽口を叩く。

「何だ？ オレの部屋に忍んで来るつもりだったのか？」

「違うわよ。あなた、タバコ吸うの？」

「たまにな」

たまになら、いっそ吸わない方がいいんじゃないかとも思うが、タバコを吸わない結衣にはわからない、たまに吸いたくなる何かがあるのかもしれない。

先ほどからしていた甘い香りは、どうやらタバコの煙の匂いだったようだ。日本のタバコは苦いようなイヤな臭いしかないが、この香りなら結構好きだと結衣は思った。葉っぱが違うのかもしれない。

そんな事を考えていると、突然ロイドが思い出したように、結衣

を手招いた。

「あ、そうだ。おまえ、ちょっと来い」

言われた通り、結衣が側までやって来ると、ロイドは自室前に置かれた机の上の灰皿にタバコをもみ消して、結衣の額を強めに叩いた。

「誰が、エロ学者だ。変な言葉を教えるな」

結衣は額を押さえながら、目を見開いた。

「あの子、しゃべったの?!」

「エロ学者って、呼ばれたぞ」

「ずるい! 私はいしゃべったの聞いた事ないのに!」

小鳥がしゃべったのを、ロイドの方が先に聞いた事が、なんだか無性に悔しかった。

「おまえ、昨日からずっと電源入れっぱなしだろう。あいつは眠らないからな。おまえが眠っている間も、勝手にいろんな事を学習している。しゃべるようになったから、おまえの寝言を復唱するかもしれないぞ」

おもしろそうに笑うロイドに、結衣は頭をかかえて叫んだ。

「そんなの、困る――っ!」

「だったら、夜は電源切っとけ」

「あ、今は切ってる」

結衣は小鳥の電源を切って、外に出てきた理由をロイドに話した。
「夜景か。運がよければ、おもしろいものが見られるぞ」

そう言ってロイドは手すりに縋ると、王宮の外に視線を移した。
結衣もその横で、両手を手すりにかけて、眼下に広がるラフルールの街並みを眺めた。

淡い光に彩られたラフルールの街は、さながらおとぎの国のようだ。だが、ロイドの言う”おもしろいもの”が何かはわからない。

一生懸命捜していると、ロイドが指摘した。

「街の中じゃない。外だ」

言われて結衣が街の外の暗闇に視線を移した時、ラフルールの南

東にある、こんもりとした森から、天に向かって青白い光が放たれた。

「今の何？」

結衣が興奮して尋ねると、ロイドは笑って答えた。

「運がよかったな。朝話した遺跡だ。時々ああやって光を放つ。昼間に光る事もあるが、夜の方がわかりやすいな。ちなみに今のは、オレが拾われた遺跡だ」

「え？ そうなの？ また光らないかな」

結衣が再び遺跡の方を向くと、側でロイドが声を上げ笑った。

「一度光ったら、しばらくは光らない」

「しばらくって、どれくらい？」

「数時間か、長ければ数日だ」

「じゃあ、本当に運がよかったんだ。もっと、しっかり見とけばよかった」

結衣は手すりに縋って項垂れると、ため息をついた。すると、隣でロイドがクスクス笑った。

「何？」

結衣が訝しげに見つめると、ロイドは笑顔のままで、よくわからない事を言う。

「やっぱりおまえ、おもしろい奴だな。予想通りかと思えば、予想外だし、オレのいう事はちっとも聞かないし。おまえほど逆らう奴は他にいないぞ」

「……え……」

結衣は思わず苦笑する。そういえば、ローザンにも強者だと言われた。

「足の傷は大したことなかったらしいな」

「うん」

ロイドは真顔になると、眉間にしわを寄せて結衣を睨んだ。

「余計な事をするなど言っただろう」

「え？ 何の事？」

「クラークさんから聞いた。おまえ、殿下の行動を探っていたらしいな」

ヤバイ。誘拐犯でなければ、かまわないかと思ったが、ケガをした事で”余計な事”に分類されてしまったらしい。

「でも、今回はたまたま……」

結衣が言い訳をしようとする、ロイドはそれを遮った。

「たまたまじゃない。あの後、調べに行ってみたら、細工の跡があった」

「え？」

背筋に冷たいものを感じて、結衣は絶句する。ロイドは不愉快そうに続ける。

「オレは地質学には詳しくないが、穴自体はかなり古いものだった。自然に浸食されてできたものかもしれない。だが、おまえの落ちた階段だけ、石が後から嵌め込まれた形跡があった。穴の深さは大したことなかったが、石と一緒に転落したら、下手すりゃ命に関わる」

「それって……」

「殿下が東屋によくお行きになる事は、王宮内では周知の事実だ。誰かが殿下を穴に落とそうとしていた可能性がある」

結衣は黙ってロイドを見つめた。王子を取り巻く環境は思っていた以上に、ヘヴィなものようだ。

「王宮内の探検はもういい。明日からはなるべくひとりになるな。オレの目の届く場所、研究室にいろ。いいな」

いつものごとく、有無を言わさぬ命令に、今回ばかりは結衣も素直に返事をした。

「わかった」

結衣がケガをした事で、行方不明の王子の身が、危険に晒されている可能性が色濃くなってきた。搜索を任されているロイドはそれで苛立っているのだろう。

そう考えていると、さらに苛立たせそうな事を、ふと思い出した。黙っているわけにもいかなないので、結衣は恐る恐る告白した。

「あの……。フィオナに正体バレちゃったんだけど……」
すると、意外にもロイドは平然と受け流した。

「ああ、それもクラークさんから聞いた。あの方は大丈夫だろう」
あまりにあっさりと返されて、結衣は拍子抜けする。

「え？　それだけ？」

結衣が呆けたようにつぶやくと、ロイドは不思議そうに問いかけた。

「何だ？」

「だって、誰にもバレないようにしろって言ってたから、バレたらお仕置きでもあるのかと……」

結衣がそう言って苦笑すると、ロイドはニヤリと笑い、手すりから離れ、結衣の方に一步踏み出した。

「お仕置きを期待してたのか？」

「期待してないから。ないなら、なくていいのよ」

結衣も手すりを離れて、ロイドが近付いた分だけ後退する。

なんとか話をはぐらかそうと、頭の中を探り、王子の秘密について話してみた。

「フィオナから聞いたの。王子様の秘密って、目に見えるもので、見たら驚くものなんだって」

「まるで謎々だな。漠然としすぎている。お仕置きを帳消しにできるほどの情報じゃないぞ」

そう言ってロイドは、素早く腕を掴んで引き寄せ、倒れ込めできた結衣を抱きしめた。

「放して！」

結衣が抵抗すると、ロイドはさらにきつく抱きしめ、耳元で囁いた。

「放さない。お仕置きだからな。おまえ、オレに触られるのがイヤなんだろう？」

「イヤよ」

（だって、自分だけドキドキするんだもの）

即答すると、ロイドが耳元でフツと笑った。

「はつきりと言うんだな。じゃあ、イヤな事されなくなかったら、今度こそはオレのいう事を聞けよ。明日からはオレの側にいろ。側にいれば、必ず守ってやるから」

ロイドは腕の力を少し緩め、顔を上げると結衣を見つめた。

最後の一言に、心臓を射貫かれたような気がして、結衣は確信した。

（ダメだ。やっぱり好き）

穏やかな笑顔で見つめるロイドを、結衣は黙って見上げた。

ずるいと思う。いつもは意地悪で横柄で強引なのに、時々優しく気遣ってくれる。

ローザンはロイドを面倒見のいい人だと言っていた。その優しさを勘違いして、好きの気持ちが溢れて、こんなにも自分はドキドキしている。

抱きしめるその腕は、とても温かいのに、伝わる鼓動は、やけに静かで落ち着いている。それが切ない。

結衣の視界の中で、ロイドの笑顔が滲んでいく。

「泣くほどイヤなのか？」

ロイドはさらに腕の力を緩めると、親指の腹で結衣の頬をそっと拭った。

「……違う。なんでもない……」

「なんでもないのに泣くのか。やはり変わった奴だな、おまえ」

そう言いながら、ロイドは結衣の頭を撫でた。イヤだと言ったのに、完全に無視している。

「オレが嫌いなら、それでかまわない。だが、今度だけはオレのいう事を聞いてくれ。いいな」

責任感からだとしても、そう何度も念を押して心配されると、やはりちよつと嬉しくて、結衣は少し笑って答えた。

「何度も言わなくてもわかってるわよ。それに、あなたの事、嫌いじゃないわ」

ロイドは驚いたように少し目を見開くと、続いて安心したように微笑んだ。

「そうか」

安堵のため息と共に、ロイドは涙に濡れた結衣のまぶたに軽く口づけた。

結衣が咄嗟に目を閉じ、ゆっくりと目を開くと、ロイドがメガネを外していた。次の行動は容易に想像がつく。

近付いてくる顔をぼんやり見つめていると、唇が触れあいそうになる間際、ロイドが動きを止めた。

「逃げないのか？」

静かに問いかけるロイドに、結衣はキツパリと答えた。

「逃げてでも無駄だから」

（だって、心はすでに捕まってる）

「だったら、目を閉じろ」

ロイドの静かな命令に、結衣は素直に従う。その直後、唇にロイドを感じた。

あのタバコ、香りは甘いけど味はやっぱタバコなんだ、と妙に冷静に考えていた。

抱きしめるロイドの腕に、少し力が加わった。

二度目のキスは、少し苦くて、そして優しかった。

（第2話 完）

覚醒 (1)

「ロイド、ただいま!」

研究室の扉を勢いよく開け放ち、セリオス王子が満面の笑みで駆け込んで来た。

人捜しマシンのガラスの筒に、朝の光が反射して眩しく煌めいている。ロイドはその横に立ち、少し驚いた表情で王子に視線を向けた。

王子はそのまま駆け寄ると、ロイドの正面に立ち、彼を見上げて微笑んだ。

「心配かけて、ごめんね。隙を見てやっと逃げ出してきたんだ」

ロイドは穏やかな表情で、王子を見つめて尋ねる。

「今まで、どうなさってたんですか?」

「悪い奴に捕まってたんだ。ずっと怖くて、帰りたくて、ロイドに会いたかった」

ロイドは黙って耳を傾けている。王子は俯いて話を続けた。

「……気付けば、ロイドの事ばかり考えてた。ロイドはボクの友達だから、きつとすぐく心配してるだろうなって。そう思うと、ロイドに会いたくて仕方がなかった」

ロイドは相変わらず何も言わない。

「どうして、こんなにロイドの事ばかり気になるんだろうって、不思議に思った。だけど、気がついたんだ」

王子は不意に顔を上げると、真剣な眼差しをロイドに注いだ。

「友達なんかじゃない。ボク、ロイドが好きだよ」

反応を待ったが、ロイドは動かない。穏やかなその表情からは、驚きも、嫌悪も、喜びも、窺い知る事はできない。王子は更に言い募る。

「身分とか気にしなくていい。ボクの想いに応えてくれるなら、キ

スして」

ロイドを見つめて、少し上向いたまま、王子は静かにまぶたを閉じた。

次の瞬間、ロイドは王子の鼻先に軽く口づけた。

ピクリと身体を震わせて、王子が目を開くと、ロイドは片手でメガネを外しながら、王子の身体を抱き寄せた。

驚いて目を見張る王子の唇に、ロイドはためらうことなく深い口づけを刻む。

王子は身を硬くして、再びきつく目を閉じた。

少ししてロイドは、王子の唇を解放し、抱きしめていた腕をほどいた。

王子は目を開き、驚愕の表情でロイドを見つめる。

「ロイドって、やっぱり……」

何かを言いかけた王子を見下ろして、ロイドは目を細めると、その額を強く叩いた。

「何のつもりだ」

王子のフリをした結衣が、額を押さえて顔を歪める。

「気がついてたの？」

ロイドは無然とした表情で、メガネをかけ直すと、冷ややかに結衣を見下ろした。

「気がつかないわけがないだろう。オレとキスしたいなら素直にそう言え。ったく、回りくどい」

「違うわよ」

結衣が頬を赤らめて否定すると、ロイドは眉間にしわを寄せて問いかける。

「じゃあ、何だ」

結衣は常々思っていた疑問をロイドに打ち明けた。

「私って王子様にそっくりなんでしょ？ だから、ロイドにとっての私は、やっぱり王子様の身代わりなのかなって思ったの」

結衣が克蘭ベールにやって来て、すでに十日が経っていた。そ

の間結衣は、王やロイドとの約束を守り、事情を知らない人の前では、王子を演じ続けている。そして、フィオナ以外の誰にもばれていない。

クラーク氏に徹底的に仕込まれたとはいえ、役者でもなければ、演劇経験も小学校の学芸会以外、皆無の結衣を、皆が王子と信じて疑わないというのは、よほど王子とそっくりだからに違いない。

それほど王子とそっくりな結衣に対して、ロイドは抱きしめたり、キスをしたりする。それは王子を好きだからではないのか、と思ったのだ。

本物の王子にそんな事をすれば、不敬に当たる。その上、同性愛者のレッテルを貼られてしまうだろう。

だが、結衣は王子ではない。王子とそっくりな結衣を王子の身代わりとして、道ならぬ想いをぶつけていたのではないか、という結論に達したのだ。

話を聞いてロイドは、思い切り呆れた表情で結衣を見つめた。

「どこから、そういう発想が湧いて出るんだ」

「だって……」

「だってじゃない！ オレは男を好きになった事は一度もない。思い切り女好きだ」

拳を握って高らかに宣言するロイドに、結衣はすっかり脱力して、反論する気もすっかり失せた。

ストレートがゲイの疑いをかけられるのは、確かに屈辱かもしれないが、女好きを力説するのもどうかと思う。

大きいため息をつく結衣の額を再び叩いて、ロイドは力説を続ける。

「第一、オレはおまえを殿下だと思った事もない。たとえ百万人の殿下のクローンの中に、おまえが紛れ込んでいても、オレは見分ける自信がある」

こちらこそ、どこからそんな途方もない自信が湧いて出るのか、訊いてみたい。

そう思いながら、ふとロイドの言葉が心に引つかかった。

「ねえ、どうして王子様のクローンを、元々用意してなかったの？ クランベールの科学技術ならクローンなんて簡単に作れるでしょ？」

結衣が尋ねると、ロイドは逆に問い返してきた。

「ニッポンには、人間のクローンがいるのか？」

「いないと思う。日本だけじゃなくて、世界中のどこにも。牛や羊の動物実験が成功したって話は、聞いた事あるけど」

ロイドはひとつ嘆息すると、結衣の質問に答えた。

「クランベールにも、ヒトのクローンはいない。前陛下の勅命により、二十年前に禁止されている」

「二十年前にはいたの？ その人、今は？」

何の気なしに尋ねた後で、気付いた。二十年前にロイドは十歳前後だ。さすがに学者ではなかっただろう。クローンの所在など知るはずがない。

バカな事を訊いたものだと思っていると、

「オレも陛下に伺った話だが」

と前置きして、ロイドはクローンについて話し始めた。

二十年前、まだ王子だった国王は、度々熱を出しては寝込む事が多い、病弱な少年だった。

公式行事への欠席も頻繁で、次期国王がこれでは、国民に不安を抱かせかねないと、国王を始め、大臣たちも頭をかかえていた。

その頃、科学技術局では、ヒトのクローニング技術が確立され、被験者同意の下での不妊治療の一環として、ヒトクローンの成功が報告されていた。

培養液の中での、生体急速成長技術も確立されている。

王室は極秘裡に、病弱な王子のクローン作成を科学技術局に要請した。せめて公式行事に参列する、王子の身代わりが欲しかったのだ。

母胎を使わないヒトクローンの作成という初の試みに、科学技術

局のバイオ科学者たちは沸き返った。

「科学者ってのは、理論が確立されていれば、それを実証してみなければ気が済まない。おまけに熱中すると、周りや後先の事が見えなくなる。そんなバカが多いんだ。オレもその感覚はよくわかる。同じバカの仲間だからな」

そう言って、ロイドは自嘲気味に笑った。

「それで、結局王様のクローンは成功したの？」

「ああ。わずか半年で、当時の陛下とまるっきり同じ少年が誕生したらしい」

生まれたクローン少年は、外見だけ王子とそっくりだったが、脳の中身は生まれたての赤ん坊と同じだ。そのままでは身代わりの役目は果たせない。

それについては、あらかじめ分かっていた事なので、培養液の中で成長中に、脳に直接記憶や知識を植え付けて、培養液から出た時には、人間の少年として生活するには支障のない状態になっていた。クローン少年は培養液から出た後、王子としての教育を受けながら、本物の王子や弟のラフィット殿下と共に分け隔てなく育てられた。

王子たちには、少年がクローンである事は知らされていない。クローン少年自身も、与えられた偽りの記憶により、王子たちの生き別れになっていた兄弟だと信じ込んでいた。この頃が、クローン少年にとって一番幸せだった時期かもしれない。

クローン少年は発育の経過を確認するため、定期的に検査を受けていた。

そしてある時、科学者の一人が、クローン少年に出生の秘密をうつかり漏らしてしまったのだ。

生まれて間もない少年の心は、過酷な現実には納得して、受け止められるほどには強くなかった。

クローン少年は思い悩み、次第に心を病んでいった。そして、遂には人に会うのを嫌がり、部屋に引きこもったまま出て来なくなっ

た。

「かわいそう。その子、どうなったの？」

「自ら命を絶った」

クローン少年の死後、王子は初めて真相を知った。王子は大層心を痛め、「こんな悲しい思いは二度としたくない」と、ヒトクローン作成の全面禁止を、泣きながら国王に懇願した。

国王はこれを重く受け止め、科学技術局と全ての民間研究機関に勅令を発し、以来クランベールではヒトクローンは禁止されている。「おまえは、クローンが何だかわかっているのか？」

新たな質問返しに、結衣は持てる知識を総動員して答える。

「元になる生き物と、全く同じ遺伝子を持つコピーの事でしょ？」

「そうだ。いわば、人工的に作られた一卵性双生児のようなものだ。全く同じ環境で、同じものを食べ、同じ教育と愛情を受けて育ったとしても、双子が全く同じ人間にならない事は知ってるだろう。クローンも同じだ。そんな事はわかりきってた事なのに」

最後の言葉には、いたたまれない虚しさが漂っていた。

「でも、禁止されたからって、本当にやめちゃったの？ そんな、物わかりよくないでしょ？ 学者バカって」

結衣の言葉に、ロイドはニヤリと笑うと真相を明かした。

「言うじゃないか。確かにその通りだがな。禁止されたのは脳と全身の複製だけだ。四肢や臓器、皮膚の複製は禁じられていない。今は主に医療の分野で、当たり前のように実用されている。手足や胃が世を夢んで自殺したりはしないからな。転んでもタダで起きないのが、学者バカの取り柄だ」

結衣は思わず、クスリと笑う。確かに、科学者が何かに躓いてすぐに諦めていたら、世の中は何も発展しなかっただろう。

国王のクローンと、クローンが禁止された理由は分かったが、クローンは他にもいたはずだ。

ロイドは、今クローンはいないと言った。不妊治療の一環として生まれてきたクローンはどうなったのだろう。

望まれて、母の胎内から普通に生まれてきた子供が、クローンだったからといって自殺したとは考えにくい。それが気になったので、ロイドに尋ねてみた。ロイドは再び表情を曇らせる。

「みんな短命だったそうだ。当時はまだテロメアの修復技術が不完全だったからな」

訳のわからない単語に、結衣は眉間にしわを寄せる。

「テロメア？　――って何？」

「人間を含む真核生物の染色体は末端にテロメアという構造を持っている。こいつには染色体を安定させる役割がある。細胞分裂のたびにテロメアは短縮され、なくなると分裂は止まる。テロメアを失って不安定になった細胞は癌化するので、アポトーシスによって取り除かれる。通常テロメアは短縮されるだけで、伸びる事はない。つまり、分裂のたびに細胞は老化していくという事だ。クローニングに使われる体細胞の核は、すでにある程度老化している。だから体細胞クローンは短命なんだ」

一気にまくし立てるロイドに、結衣はしばし沈黙した。

「……ごめん。途中から思考回路にシャッターが下りた。つまり、どういう事？」

「……体細胞から作られたクローンは、見た目が赤ん坊でも、細胞は大人だから長生きできないという事だ」

相変わらずロイドの知識量には感心する。結衣は半ば呆れたように、ロイドに尋ねた。

「あなたって、機械専門の割に、人間の脳や身体の事にも、やたらと詳しいのね」

「ラフィット殿下がおっしゃってただろう。オレはちまちました機械が得意なんだ。そういうちまちました機械は、人間の心理や動きに密接に関係している。たとえば、この携帯用パワードスーツ」

そう言ってロイドは、ポケットから折りたたまれた棒状の金属を取り出した。

ロイドがそこについたボタンを押すと、金属の棒は四方に蜘蛛の

足のような状態で広がった。

「これは手足に装着して、通常の力で二倍から三倍の重さのものを持ち上げたりできるんだ。おまえでもオレを持ち上げる事ができるぞ。これも、脳科学や生体力学なくしては作れない」

今度のマシンは役に立ちそうだが、何故それをポケットに入れて持ち歩いているのかは謎だ。

色々と不思議なマシンが出てくる、ロイドの白衣のポケットは、まるで四次元ポケットのようだと結衣は思った。

クローンの話ですっかり話が脱線してしまったが、結衣は話を本題に戻した。

「で、話を元に戻すけど、王子様が好きなわけじゃないなら、どうして私にキスするの？」

ロイドは開いたマシンを折りたたみながら、気まずそうにチラリと結衣に視線を送った。そして、折りたたんだマシンをポケットにしまうと、クルリと背を向けて吐き捨てるように言う。

「おまえの唇がそうさせるんだ」

「はあ？」

意味がわからない。また、結衣の方がキスをしたいと言っている、とでも言うのだろうか。

「どういう意味よ！」

結衣がムツとして怒鳴ると、ロイドは背を向けたまま、入口横の工具置き場に向かって歩き始めた。

「そのままの意味だ。おまえの唇はそういう魔性を秘めている」

「……え……」

思わずキスしたくなる魔性の唇。

それが本当なら、今まで二十三年間、男に縁のない生活を送ってきた結衣の人生に説明がつかない。

結衣が絶句して立ち尽くしていると、入口の扉が開いてローザンがやってきた。

「おはようございます」

挨拶と共に入口横にいるロイドに目を留めると、ローザンは不思議そうに尋ねた。

「あれ？ ロイドさん、顔が……」

「黙れ！」

言い終わる前にロイドにいきなり怒鳴られ、ローザンはのけぞって一歩退く。

「なんで、朝から怒ってるんですか」

ローザンは扉を閉めて部屋に入ると、今度は結衣に尋ねた。

「何かあったんですか？」

「ううん。別に」

結衣が苦笑して答えると、ローザンは首を傾げながら、いつもの定位置、コンピュータの方に歩いていった。

覚醒 (2)

今日もまた、退屈な一日が始まった。まさか、朝からいきなりキスをされるとは思わなかったが、それ以外はいつもと変わらない。

ローザンはコンピュータの前に座り、ロイドの指示でデータ解析を行い、ロイドは隣の机でローザンの解析結果を眺めたり、機能縮小版の人探しマシンを確認したりしている。

今日は全長三十センチはある大きな工具、スパナを使い、正規版の人探しマシンの裏で六角のボルトを回していた。

大きなスパナは金属製で、見るからに重そうだ。持ち歩いているだけで、筋トレになりそうな気がする。そんな事をしているから、学者のくせに無駄にいい身体になるのではないか、と結衣は思った。

結衣は二人の様子を時々眺めながら、窓際に置かれた椅子に座り、ひざの上に広げた絵本をパラパラとめくった。

結衣が退屈してぼやくとうるさいので、ロイドが暇つぶし用に王宮の図書室から、数冊持ってきてくれたものだ。

王子が子供の頃に読んでいたという、その絵本は文字がほとんどなく、ページ一面にカラフルな絵が描かれていて、文字の読めない結衣でも充分に楽しめた。

一通り見終わった後、結衣は絵本を閉じて、肩に留まった小鳥を手の上に乗せると頭を撫でた。

しばらく、ぼんやりそうしていると、入口の扉がノックされ、珍しい客人が現れた。

「ヒューパック様、いますか？」

声をかけて扉の隙間から顔を覗かせたのは、厨房の女の子だ。

結衣は最近、時々ケーキを作り厨房に通っているの、お菓子作り担当の彼女とはすっかり仲良くなっていた。

「パルメ、どうしたの？」

「あ、セリオス殿下。こちらにいらしたんですか。ちょっと調理機械の調子がおかしくて……。あの、ヒューパック様は……」

そう言って、パルメは部屋の中をキョロキョロ見回した。

結衣が横に視線を向けると、入口からは死角になる人捜しマシンの裏で、ロイドは座り込んでいた。マシンから取り出した基盤を眺めて、いじり回すのに熱中している。人が来た事に気付いていないようだ。

結衣はひとつ嘆息すると、少し大きな声でロイドを呼んだ。

「ロイド、お客さんだよ」

結衣の声に反応して顔を上げたロイドは、立ち上がって入口に向かった。

入口でパルメの話を聞いた後、ロイドは振り返り、
「殿下、厨房に行つて参りますので、少しの間そこでお待ちください」

と言って、部屋を出て行った。

結衣が二冊目の絵本を読み終わる頃、ロイドが研究室に戻ってきた。

「土産だ。二人で食え」

そう言ってロイドは、持っていた紙袋を結衣に突き出した。結衣は席を立ち、袋を受け取りながら顔をほころばせる。

「パルメのお菓子？」

「ああ」

ロイドは不服そうに顔を背けた。

結衣が袋を開けて中を覗くと、そこにはシュークリームが二つ入っていた。相変わらず、厨房のお菓子はもらわない事になっているらしい。ロイド曰く、彼が満足するだけもらうと、お菓子がなくなるからだ。

「ローザン、お茶にしよう」

「はい」

結衣が声をかけると、ローザンは嬉しそうに返事をして立ち上が

った。

「あなたもお茶は飲むでしょ？」

「砂糖十五杯でな」

「はいはい」

ロイドが実は”超”の付く甘党だということを知ったのは五日ほど前だが、未だにこの砂糖十五杯は馴染めない。

結衣がお茶を淹れると、三人は部屋の隅の机を囲んで座った。結衣とローザンは紙袋からシュークリームを取り出し、手づかみでそれを頬張る。

「これ、私が作り方教えたの」

「いいですね。こうやって手づかみで食べられるお菓子って」

極甘のお茶をすすりながら、ロイドは二人を黙って見つめる。物欲しそうな視線に気付いて、結衣は一応なだめてみた。

「今度、あなたにも作ってあげるから」

「そのサイズなら二十個だ」

「はいはい」

苦笑して、結衣が再びシュークリームを食べ始めると、ロイドはまだ何か言いたそうにこちらを見ている。

「何？」

結衣が尋ねると、ロイドは呆れたように見つめて、口を開いた。

「おまえ、いつも甘いもの食って、座ったままほとんど動かないのに、なんで太らないんだ？」

毎日、砂糖十五杯入りのお茶をガブガブ飲んでも、太らない人に言われたくない。

「知らないわよ。体質なんだから」

ムツとして結衣が頬を膨らませると、ロイドはさらに言う。

「それにしたって、抱くたびに細くなってる気がするぞ」

途端にローザンが、喉を詰まらせて激しく咳き込んだ。

「汚いな、おまえ」

ロイドは自分のカップを持ち上げて、ローザンから遠ざける。

「ちょっと、大丈夫？」

結衣が覗き込むと、ローザンはひとしきり咳き込んだ後、お茶を一口飲んで息を整え、ロイドと結衣を交互に見つめて問いかけた。

「お二人の仲は、そんなとこまで進展してたんですか？」

「違うわよ！」

結衣は頬を赤らめ、思い切り否定すると、ロイドを睨んだ。

「もう！ あなたが誤解を招くような事を言うから！」

「ウソは言っていない」

しれっとして、そっぽを向いたロイドをチラリと見て、ローザンは困惑した表情で結衣を見つめる。

「不可抗力よ。たまたま何度か、抱きしめられるような形になっただけよ」

「はぁ……」

結衣が苦しい言い訳をすると、ローザンは納得したようなしなやかな表情で、小さく頷いた。

不可抗力というよりは、ほとんどロイドのセクハラのような気がする。

結衣は気を取り直して、話題を変えた。

「パルメの用事は何だったの？」

ロイドはお茶をすすりながら首を傾げる。

「調理機械の不調だと言われて見に行ったんだが、どこもおかしくない。不調というより怪奇現象っぽかったな」

結衣とローザンは同時に顔をしかめた。

「怪奇現象ですか？」

「今度は厨房に幽霊が出たの？」

「幽霊じゃない」

パルメが言うには、調理機械の中から、出来上がった料理が忽然と消えるらしい。誰かが持ち出したのかと思い、厨房の者に訊いても、皆一様に知らないと言う。

それを体験したのは、パルメだけではなく、他にも何人かいると

いう。まさかとは思うが、機械に転送機能でも付いているのではないかと、ロイドに確認してもらったようだ。

「転送機能なんて付いてるの？」

結衣が尋ねると、ロイドは眉をひそめる。

「付いてるわけないだろう。そんな無意味なもの」

「……え……」

無意味なものを色々作っている人が、何を言う。――とは言わない事においていた。

「誰かが内緒で、こっそり犬猫を飼ってるんじゃないですか？ そのエサに料理を持って行ったとか……」

ローザンが仮説を述べると、ロイドはあっさり否定した。

「違うだろうな。消えた料理は犬猫が食うようなものじゃなかった。第一量が多すぎる。それに犬猫にやるなら、料理を丸ごと持って行くより、肉や魚の切れ端でも持って行った方が、騒がれずに済むじゃないか」

「そうですねえ。じゃあ、人間？」

ローザンがそう言って苦笑した時、結衣はふと閃いた。

「もしかして、王子様じゃない？」

「殿下？」

ロイドが訝しげに結衣を見つめる。

「王子様が王宮内のどこかに隠れてて、料理を食べてるのよ。客室の幽霊も王子様じゃないの？」

結衣は興奮して、自説推理を展開したが、ロイドは冷めた調子で問い返した。

「おまえの推理はなかなか素晴らしい。だが、一つ難がある。王宮内は捜索隊が、地下の霊廟に至るまで、真っ先に隈無く捜索したんだ。王宮外はオレのマシンが同時に捜索している。その時に殿下はどこにいらしたのか、教えてくれないか？」

結衣はロイドを睨んで頬を膨らませると、プイと顔を背けた。

「悪かったわね、ヘボ推理で。地下に霊廟なんかあるから、幽霊話

が絶えないんじゃないの？」

「そうかもな」

結局、料理消失の謎は謎のまま、話は途絶えた。

三人は休憩を終えると、それぞれ元の位置に戻っていった。

そのまま午前中は、何事もなく退屈に過ぎ去った。そして昼食後、結衣が再び窓辺の椅子で絵本を広げた時、またしても研究室の扉がノックされた。今日はよく来客のある日だ。

扉を開けて現れたのは、クラーク氏だった。

「失礼します。セリオス殿下、フィオナ様がお見えです」

「わかった、すぐ行く」

結衣が絵本を置いて立ち上がると、そばの床に座り込んで、基盤をいじっていたロイドが、顔を上げてつぶやいた。

「最近よくお見えになるな」

「うん。退屈だから、どんどん遊びに来てって頼んだの。フィオナって、かわいいし、やっぱり女同士でおしゃべりするのって楽しいのよね」

結衣が楽しそうにそう言うと、ロイドは真顔で結衣を見つめた。

「おまえが頼んだのか？」

「うん。いけなかった？」

「……あまり不必要に親しくしすぎない方がいい。おまえは殿下なんだ」

ロイドが何を言いたいのかわからず、結衣は憤る。

「わかってるけど、婚約者と親しくして何が悪いの？」

「婚約者だからだ」

「意味わかんない！ 説明して！」

結衣が苛々して叫ぶと、ロイドは俯いて大きくため息をついた。

「後で話す。とりあえず行ってこい」

結衣は眉を寄せてロイドを見つめた後、入口に向かった。入口ではクラーク氏が二人の様子を心配そうに見つめている。結衣は小走りにクラーク氏の元へ駆け寄った。

「待たせてごめん」

そう言って、クラーク氏と共に、フィオナの待つ貴賓室へ向かった。

小一時間ほど、お茶を飲みながらおしゃべりをする、フィオナは席を立った。

貴賓室を出て、フィオナを見送ると、クラーク氏は足早に国王の執務室へ向かった。そして、廊下にはロイドが立っていた。

「わざわざ迎えに来たの？」

結衣は歩み寄ると、ロイドに尋ねた。

「クラークさんから連絡があった。陛下に急用を仰せつかったらしい。この辺は物騒だからな」

真顔で言うロイドに、結衣は苦笑する。

「おおげさね。王宮の中よ」

「おまえこそ、少しは緊張しろ。穴に落とされたのを忘れたのか。王宮の中でも安心するな」

結衣はムツとしてロイドを睨むと、話題を変えた。

「会うのは週に一回くらいにしようって、フィオナに言つといたわ」「そうか」

ロイドの表情が少し緩んだのを見て、ふとイタズラ心が芽生えた。何もかもロイドのいいなりになるのはシヤクなので、ちょっとからかってやろうと思ったのだ。

結衣はイタズラっぽい笑みを浮かべ、ロイドを上目遣いに見上げて言う。

「あなたが、ヤキモチ焼くからって」

「なっ……！ 何て事を言うんだ、おまえは！」

ロイドは思い切り目を見開くと、結衣の額を強く叩いた。

「誰が女相手にヤキモチなんか焼くか！ オレが心配してるのは、そんな浮ついた理由じゃない！」

まさか、これほど動揺するとは思わなかった。結衣は額を押さえてすぐに訂正した。

「ウソよ。文字の勉強が忙しいからって、本当はそう言ったの。あなたがこんなにくろたえるなんて珍しいわね」

ロイドは気まずそうに結衣を睨むと、背を向けて歩き始めた。

「行くぞ。歩きながら話す」

結衣は慌ててその後を追った。

人のいない廊下を研究室に向かって歩きながら、ロイドは話し始めた。

結衣とフィオナが頻繁に会っていると、王子の結婚が近いのではないかと勘繰られかねない。そんな噂を立てば、今は沈静化している王位継承問題が、表面化してくるだろうと言うのだ。

「だって、王子様十七歳でしょ？ フィオナは十五歳だし。結婚なんてまだ……」

「王族や貴族は早婚なんだ。十歳位ですでに婚約者が決まっている事が多い。下賤の血を混ぜないためだろう。陛下も十八の時、ご結婚なさった」

「じゃあ、お貴族様に見れば、あなたのように三十前後まで独り身なんて、あり得ない事なのね」

「黙れ。おまえだって立派な行き遅れだ。女子は大体二十歳までには結婚するからな」

イヤミを言っただけなのに言い返されて、結衣はムツとする。そして、ふと思った。

もしかしたら王は、結衣を手元に置きたいというよりは、ロイドの行く末を心配して結婚を勧めたのではないだろうか。

女好きを豪語するエロ学者ぶりから見て、女に興味がないわけで

はないだろうが、この男は放って置いたら一生機械と添い遂げそうに見える。

結衣とロイドの結婚は、甘えてくれない息子と結婚しないロイド、という王の気苦労を一石二鳥で取り除く会心の策だったのだろう。

話している内に研究室にたどり着いた。扉の前で立ち止まると、ロイドは振り返って釘を刺す。

「とにかく、もうすでに噂になってるかもしれない。身边には気を配れよ」

「わかった」

結衣が全く違う事を考えてたため息をついていると、ロイドが結衣を見つめてニヤリと笑った。

「後で文字の学習教材を持ってきてやる。自分で言ったからには、やってもらわないとな」

「いいわよ。そのかわりケーキ作れなくなるけど、いいの？」

結衣が反撃すると、ロイドは表情を崩すことなく平然と言う。

「オレは一向にかまわない。甘いものは街で買ってくればいいわけだし。おまえの方が文字の勉強だけしている事に耐えられるならな」

結衣は絶句する。確かに耐えられそうにない。またしてもロイドのいいなりだ。

「もう！ くやしーっ！ こんな事なら、ヤキモチだって言っとけばよかった」

結衣がわめくと、ロイドはすかさず額を叩いた。

「ふざけるな。それじゃ、まるでオレが……」

そこまで言って、ロイドは口をつぐみ、不愉快そうに顔を背けると、扉を開けて研究室に入って行った。

『まるでオレが……』——何？ ロイドが何を言いかけたのか気になった。

結衣は首を傾げながら、ロイドの後について研究室に入った。

覚醒 (3)

研究室に入ると、ローザンが立ち上がり、ロイドに歩み寄って来た。
た。

「ロイドさん、科学技術局から、一度顔を出してくれて連絡がありました」

「当分行けないって、言ってるんだがな」

ロイドがそう言うのと、ローザンはうんざりしたように、ため息をついた。

「そうだろうと思って、言ってみたんですけどね。なんでも、局長の承認が下りないと臨床に回せないものがいくつもあるらしくて、手空きになる局員が数名いるそうなんです。それで副局長から延々二十分くらい愚痴を聞かされて……」

「それは災難だったな」

ロイドは憐れむようにローザンの肩をポンポン叩いた。

「それにしても、手空きになる事自体おかしいだろう。研究者なら他にやりたい事の一つや二つあるはずだ。オレなんか、一生の内にやり遂げられるかどうか分からないくらい、やりたい事があるぞ」

ロイドの意見に大きく頷いて、ローザンが同調する。

「そうですね。ぼくなんか、やりたい事いっぱいあるのに、関係ない事を手伝ってるんですよ」

「おまえのやりたい事を、うちの局員に分けてやってくれないか？」

「いやですよ。ぼくがやりたいんですから。ロイドさんこそ、有り余ってるんなら分けてあげたらどうですか？」

「絶対、イヤだ」

やりたい事の数を競い合っている二人を不思議に思っ、結衣が問いかけた。

「ローザンって、お医者さんじゃなかったの？」

結衣の声に気付いて、二人は同時にこちらを向く。ローザンが笑顔で答えた。

「医師ですよ。専門は外科と内科と循環器科です。そして、研究者でもあります」

「え？ 学者さんなの？」

結衣が驚いて再び尋ねると、代わりにロイドが答えた。

「こいつ、見た目はとぼけてるが、医学博士の称号を持ってる。オレと同じ、学者バカ仲間だ。虫も殺せないような顔をして、おまえが怖がってた生体実験をバリバリにやってるぞ」

意地悪な笑みを浮かべるロイドに、結衣が顔を引きつらせると、ローザンが横から小突いた。

「変な言い方しないでくださいよ。ユイさんが引いてるじゃないですか」

確かにちよつと引いた。普段穏和なローザンが、実験動物を藁漬けにしたり、病巣を植え付けて観察したりしている姿は想像できない。

結衣が苦笑すると、ローザンも苦笑を返した。

突然、ロイドが大袈裟にため息をついて、頭をガシガシかいた。

「仕方ない。明日にでも一度顔出しとか。ったく、手空きになるのはどいつだ。喝入れてやる」

ロイドの喝って何だろう。やっぱり額をビシビシ叩くんだろうか、と結衣が考えていると、ローザンがクスクス笑いながら追加提案した。

「ついでに自宅にも寄ってきたらどうですか？ ブラーヌさんが帰ってるそうですよ」

「あの放浪おやじ帰ってたのか。半年ぶりだな」

「お父さんなの？」

「ああ、そんなようなもんだ」

結衣が尋ねると、ロイドは説明した。

ブラーヌⅡヒューパックは、幼いロイドを遺跡で拾い、そのまま

引き取った考古学者だ。一年の大半を、各地の遺跡を点々として過ごし、滅多に自宅に戻らない。その生活はロイドが幼い頃から、ずっと変わらなかった。

拾われて間もない頃は、ロイドもブラーヌと共に遺跡を巡っていたが、学校に上がる頃には、ブラーヌはロイドを置いて、ひとりで旅に出るようになった。何年も帰ってこない事もあるので、以来、数えるほどしか顔を合わせていないという。

「小さい頃、大変じゃなかったの？」

結衣がそう言うと、ロイドは肩をすくめる。

「別に。近所の人時々様子を見に来てくれたし、むしろあいつの方が、今も生きてるのが不思議なくらいだ。あいつ、オレには自分の面倒は自分で見ろ、と言っておきながら、自分の面倒は自分で見ないんだ。放って置いたら、メシも食わずに一日中、土くれを眺めたり転がしたりしてるんだぞ」

「……え……」

ロイドも機械をいじり始めたら、周りは何も見えなくなる。血が繋がってないのに、似たもの親子だと結衣は思った。

「おかげでガキの頃から、あいつの面倒までオレが見てた。ひとりの方が仕事量が減る分、楽だったな」

結衣は思わず苦笑する。ローザンが言っていたロイドの面倒見のいい性格は、こうやって培われたのかもしれない。

ロイドは再び頭をガシガシかいた。

「仕方ない。変死体になってたら面倒だから、そっちも様子を見に行くか。ほら、仕事に戻るぞ」

そう言ってロイドは、ローザンの背中を叩くと、コンピュータの前へと促した。

結衣は二人から離れて、まっすぐに窓際の椅子へ向かい、絵本を手取る。

コンピュータの前に座った途端ローザンが、人捜しマシンの方へ足を向けたロイドを呼び止めた。

「ロイドさん、時々出てくるウィンドウなんですけど、出ないよう
にできませんか？　ちょっと、うっとうしいんですよ」

ロイドは足を止めて、ローザンを振り返る。

「うっとうしいって、日に一、二回のもんだろ？」

ロイドが問いかけると、ローザンは思い切り顔をしかめた。

「えーっ？　そんなもんじゃありませんよ。間隔にはムラがあるんですけど、何度も出ますよ。数えてないので正確には分かりませんが、日に十回以上は出てます。今も、ちょっと話してる間に三つも出てますし」

「そんなに出てるのか？」

ロイドは足早に歩み寄ると、コンピュータの画面を覗き込んだ。
絵本を持ったまま立ち尽くして、二人の様子を見ていた結衣も、
何だか気になって、側に行くと後ろから覗き込んだ。

画面の真ん中に、文字の書かれた小さなウィンドウが三つ、重なるように表示されている。ロイドがそれを、一つずつ確認しながら
閉じていくのを、横でローザンが読み上げた。

「ジスクール……ベイシユヴェル……ラグランジュ……。なんです
か？　この地名……」

「探知機を設置した遺跡だ。他に、カノン、ディケム、ロングヴィ
ル、ラフルールにも設置している。三年前から、時空の歪みを観測
してるんだ」

ロイドは遺跡調査に同行している内に、謎の装置が作動した時、
微妙な時空の歪みが生じる事を発見した。約三十年に一度、全遺跡
の装置の活動が活発になる時期がある事は、すでに考古学者の間で
は知られている。

時空の歪みと装置作動の規則性を探る事で、新たに作ろうとして
いる、時空移動装置に応用できるのではないかと考えたのだ。

「時空移動装置って、何に使うんですか？」

ローザンが最も至極な質問を投げかける。結衣も同じ事を考えた
が、答えは大体想像がついた。

「他の世界に行けたら、おもしろいと思わないか？」

想像通りの答えを、大真面目に言つてのけるロイドを見て、結衣は苦笑し、ローザンは微妙な表情で首を傾げながら、顔を引きつらせる。

ロイドは二人の反応を気にした風でもなく、画面に向き直ると、新たなウィンドウを開いた。そこには棒グラフが表示され、左から三分の一辺りから、急に棒の長さが長くなっている。

「なるほど、十日前から多くなってるな」

「あなた、自分でそこに座ってる時に気付かなかったの？」

結衣が尋ねると、ロイドは振り返ることなく、表示を切り替えながら答えた。

「通知が来るのはいつもの事だし、他に気をとられてて気にしてなかった。……全遺跡から頻繁に来てるな」

表示は折れ線グラフに変わり、途中から全ての線が急角度で上向いている。

ロイドは画面を見つめたまま、腕を組んだ。

「妙だな。過去データからすると、遺跡の活動期はもう少し先のはずだ」

「十日前っていうと、セリオス殿下が行方知れずになった日ですよ
ね」

ローザンの指摘に、ロイドは再び表示を切り替えた。

「時間は……午後二時十分にラフルールから。それ以降増えている」

「午後二時って、もしかして……」

結衣がおずおずと口を挟むと、ロイドは振り返り、まっすぐ見つめた。

「おまえが現れた頃だ」

その声にローザンも結衣を振り返る。二人に黙って見つめられ、結衣は思わず目を泳がせた。

自分が何かをした自覚はない。考えられるとしたら、人捜しマシンの誤動作が、遺跡の装置に何らかの影響を及ぼしたという事だろ

うか。

ロイドはおもむろに隣の席につくと、机の上に置かれたノートパソコンを操作し始めた。どうやら隣のメインコンピュータからデータをコピーしているようだ。

少しして、ロイドはノートパソコンを閉じ、立ち上がった。

「遺跡の事は、あいつに訊いた方が早い。ちよつと家に行ってくる」
ケーブルを引き抜き、パソコンを小脇に抱えると、ロイドは足早に出入口に向かう。途中で不意に振り返り、結衣を指差してローザンに告げた。

「ローザン、そいつが勝手にうろつかないように見張っててくれ。
頼んだぞ」

「はい」

ローザンの返事を聞くと、ロイドは忙しそうに研究室を出て行った。

ロイドを見送った後、ローザンは結衣を見上げて微笑んだ。

「とりあえず、ぼくたちはいつも通りにしてましようか」

「うん」

結衣も笑って頷くと、窓際の席に戻った。先ほど椅子の上に置いた絵本を取ろうと身を屈めた時、廊下から荒々しい足音がバタバタと近付いて来るのが聞こえた。

結衣が振り向いたと同時に研究室の扉が開き、ロイドが駆け込んできた。

「忘れるところだった。ユイ、これを持ってろ」

駆け寄ってきたロイドが結衣に差し出したのは、以前もらった通信機の色違いバージョンだった。今度のは、暗い赤だ。

「通信機？」

結衣が受け取り尋ねると、ロイドは簡単に説明した。

「バージョンアップした。通信エリアを少し拡大して、発信器機能も付けた。おまえの居場所がすぐわかるようにな。前のはローザンに渡しとけ」

それだけ言うと、ロイドは再びバタバタと研究室を駆け出して行った。

結衣は以前もらった黒い通信機をローザンに渡し、元の席に戻ると絵本を広げた。

しばらくの間、ローザンと結衣はいつも通りの日常を過ごしていた。ローザンはデータ解析を行い、結衣は絵本を見たり小鳥を撫でたりしている。

お茶でも淹れようと、結衣が席を立った時、研究室の扉がノックされた。

結衣とローザンは同時に出入口に注目する。扉が開かれ、訪問者が姿を見せた。

「失礼します。こちらにセリオス殿下はいらっしゃいますか？」

訪問者は軽く頭を下げると、正面に立っている結衣に目を留めた。本日三人目の来客は、結衣の見知らぬ若い男だった。

覚醒（4）

王宮の使用人ではないようだ。身なりはきちんとしている。だが、貴族のようではない。王子に用があるとは何者なのだろう。

結衣がこっそり品定めをしていると、青年は結衣を王子と認めたらしく、軽く頭を下げて挨拶をした。

「申し遅れました。私はセギュール侯爵の使いの者です。侯爵より、セリオス殿下に内密のお話があるとの事で、お迎えに上がるよう仰せつかって参りました」

言葉遣いは自分より遙かに丁寧だ。しかし、この青年と共に歩いているのかどうかは、ためらわれた。

「少し、待って」

結衣はそう言うのと、部屋の奥にいるローザンに歩み寄った。

青年に聞こえないように小声で話しかける。だが、彼が聞き耳を立てているだろう事は考慮に入れて、王子のフリは怠らない。

「セギュール侯爵って、知ってる？ 叔父さんの一派？」

「何度かお会いした事があります。中立派だったと思いますが」

ローザンの言葉に結衣は腕を組んで考えた。

「そっか、じゃあ一緒に行っても大丈夫かな」

結衣がつぶやくと、ローザンは焦って反対する。

「ダメですよ。ここから出ないように言われてるじゃないですか」

「だって、ボクが病気でも忙しいわけでもない事は、彼にばれてるんだよ。理由もなく貴族の申し出を断れないよ」

ローザンはため息と共に立ち上がった。

「わかりました。ぼくが話してみます。せめてクラークさんに確認を取らないと」

そう言ってローザンは青年の元に歩いていった。結衣もその後に続く。

ローザンは笑顔で青年に話しかけた。

「お待たせして申し訳ありません。私は王宮医師のローザンⅡセグラと申します。現在セリオス殿下の御身をお預かりしている者ですが、私の一存でお引き渡しするわけにはまいりません。殿下のお付きの者に確認を取りますので、もう少しお待ちいただけますか？」

青年は慌ててローザンを引き止めた。

「困ります。私はセリオス殿下ご本人に用件を告げるように言われているんです。本来なら、あなたに知られてしまった事自体、まずいんです。これ以上他の方に知られるのはご容赦願います。今ならお一人のはずだからと言われて来たのに……」

青年は困惑した表情でローザンを見つめた。

「どうやら、ロイドが出かけたのを見計らってやって来たようだ。」

よほど、人に知られたくない話なんだろうか。

「そう言われなくても……」

ローザンも困って、頭をかいた。

「侯爵は今どちらに？」

結衣が尋ねると、青年は途端に表情を明るくした。

「陛下と謁見の後、今は貴賓室でご休憩中です」

「貴賓室なら平気だね。この人も困ってるみたいだし」

結衣の意見に、それでもローザンは渋い顔をする。

「しかし……」

「王宮の中だし、大丈夫だよ。ね？」

そう言って結衣はポケットの通信機を指し示した。ローザンは結衣のポケットにチラリと視線を送ると、渋々了承した。

「わかりました。殿下をよろしく願います」

と言うと、青年に頭を下げた。

「かしこまりました」

と答え、青年もローザンに頭を下げると、三人はそろって廊下へ出た。

結衣が肩の小鳥を預けると、ローザンは心配そうな顔をして、二人を見送った。

しばらく青年の後について廊下を進んでいると、青年が後ろを振り返った。結衣もつられて視線を追う。廊下にはもう、ローザンの姿はなかった。

青年は再び正面を向くと、貴賓室に向かって廊下を進む。そして途中から、広い廊下をはずれて、狭い通路に入ってしまった。その先は、王宮の裏手にある馬車置き場に続いている。

結衣は慌てて青年に声をかけた。

「貴賓室はそっちゃじゃないよ」

青年は歩を休めることなく、少し振り返り平然と言う。

「存じております。侯爵は裏の馬車でお待ちです」

結衣は立ち止まって表情を硬くした。

「騙したの？」

青年も立ち止まり、振り返ると薄い笑みを浮かべる。

「ああでもない言わないと、あの方は納得しなかったでしょう？」

ローザンは納得などしていなかった。結衣本人に対してなら、断固反対しただろう。だが、“王子”に対して、あれ以上強硬な態度を取れなかったただけなのだ。

騙されたのは、ローザンではなく自分だ。自分の甘さに腹が立って、結衣は踵を返した。

「帰る。平気で騙すような人の話は聞けない」

青年は慌てて追いますが、結衣の腕を掴んだ。

「お待ちください！」

無理矢理引き止められ、結衣はムツとして青年を睨んだ。青年の方は、掴んだ結衣の腕を見つめて、驚いたような表情をしている。おそらく、男の腕とは思えないあまりの細さに驚いたのだろう。

しまった、と思ったが、平静を装いつつ、あくまで威厳を持って、静かに言い放つ。

「手を離せ。ボクを誰だと思っている」

こんな時、王子の權威は絶大だ。

青年はハツとして、結衣の腕を離すと、その場にひざをついた。拝むように両手を組んで結衣を見上げる。

「ご無礼をお許しください。ウソをついた事はお詫び申し上げます。ですが、お願いです。私と共においでください。殿下と侯爵が接触した事を知られた上に、お話しすら叶わなかったとなると、私がお咎めを受けてしまいます」

泣きそうな顔で見上げる青年に、結衣は嘆息する。お咎め怖さに手段を選んでいられなかったという事か。

「……今度騙したら、許さないからね」

結衣がそう言うのと、青年はパツと表情を明るくして、床につくほど頭を下げて礼を述べ、先に立って歩き始めた。

しばらく通路を進んで、王宮裏の馬車置き場に出た。

青年は正面に停めてある馬車に歩み寄り、扉をノックした後開いて、結衣を招いた。

「どうぞ、こちらへ」

結衣は馬車の扉の前で、踏み台に片足をかけ、中を覗いた。薄暗い車内をクルリと見回す。しかし、中には誰もいない。

「誰もいないよ」

結衣が眉をひそめて振り返ると、青年が下卑た笑みを浮かべていた。

「いいから、さっさと乗れよ」

そう言っで結衣の背中を乱暴に突き飛ばした。小さく悲鳴を上げて、結衣は馬車の中に両手をついた。

再び騙された事に怒りがこみ上げ、身体を反転させると、青年の腹を蹴りつける。

距離があつたため、大したダメージは与えられなかったが、青年が一瞬ひるんだ隙に結衣は馬車の外に出た。そのまま逃げようとしたが、青年が体勢を立て直して行く手を阻んだ。

腹を撫でながら、青年は結衣に毒づく。

「……やりやがったな」

「今度騙したら、許さないと言っただはずだ」

結衣が言い返すと、青年は鼻で笑った。

「騙される方が間抜けなんだよ。噂通りのバカ王子だな」

そう言って今度は、結衣の胸を突き飛ばした。

踏み台に足を取られ、結衣は馬車の中に尻餅をつく。ふと見ると、青年が目を見開いて硬直していた。

「やけに細いと思ったら……。おまえ、女か？」

いつもベストを着ているので、小さい胸を隠すには充分だが、さすがに触られては、ばれてしまう。黙って睨んでいると、青年は忌々しそうに舌打ちした。

「替え玉か……。謀ったな」

「騙される方が間抜けなんでしょ？」

結衣が不敵に笑うと、青年は顔を歪めて睨みつけた。そして何かを考えながら、結衣から視線を逸らした。

その隙に結衣はこっそり通信機のボタンを押す。ついでにこっそり馬車から出ようと、じりじり移動していると、青年が気付いて、両手を広げ馬車の入口を塞いだ。

「逃がすかよ。オレは王子を連れて行けば、それでいいんだ。これだけそっくりなら、しばらくは、ばれないだろう。おまえはそのまま替え玉やってな」

「私がすぐにばらすわよ」

それを聞いて青年は、思い切りバカにしたように嘲笑う。

「どうやって？ 口で言っただって誰も信じるもんか。私は女ですって脱いで見せるのか？ やれるもんなら、やってみな」

青年の嘲笑にムカついて、結衣は立ち上がると、彼の腕を強引に押し退け、立ち去ろうとした。

「どいて！ 帰るんだから！」

青年は一瞬呆気にとられて結衣を見つめたが、慌てて腕を掴んだ。「バカか、おまえ。逃がさないって言っただろ？ 痛い目見たくな

かったら、おとなしくいう事聞け」

「あなたこそ、バカじゃないの？　どうして、あなたのいう事を聞かなきゃならないのよ！」

「は？」

結衣の切り返しに、青年は目を丸くして一瞬絶句する。

「だ、だから！　痛い目に遭いたくなかったら、だ！」

「だから、どうして私が痛い目に遭わなきゃならないのよ！」

「え……、どうしてって……」

青年は再び絶句して考え込んだ。――が、少しして、ハタと気付きわめいた。

「えーい！　うるせえ！　つべこべ言わずに、とっとと来やがれ！」

そう言って結衣を強引に馬車に押し込もうとした。

「放してよ！」

結衣は抵抗して青年の身体を押し戻す。しばらくの間揉み合っていると、二人の間を黄色い影が通り過ぎた。二人同時にその影を目で追う。それはローザンに預けてきた小鳥だった。結衣は思わず小鳥を呼んだ。

「ロイド！」

「何?!」

青年は学者のロイドが来たと勘違いしたのか、慌てて周りを見回した。しかし、結衣の視線が小鳥を追っているのを見て、舌打ちした。

「まったく、紛らわしい名前つけやがって。ほら、来い！」

「いやっ！」

再び二人が揉み合い始めると、小鳥は青年の目の前で、視界を遮るように羽ばたいた。

青年は片手で結衣を掴んだまま、小鳥を追ひ払おうと手を振る。しかし、小鳥はそれを避けて、頭の後ろに回り込んだりしながら、青年の邪魔を繰り返した。

今にもはたき落とされそうな気がして、結衣は小鳥に命令した。

「ロイド、ローザンを呼んできて」

しかし、小鳥は返事をするだけで、青年の邪魔を止めようとしな
い。

「いいから、ロイド！　お願い、ローザンを呼んできて！」

結衣がいくら叫んでも、小鳥は返事をするだけで、命令を聞か
ない。そして、とうとう青年の腕が命中し、小鳥は地面に叩きつけ
られた。

「ロイド！」

結衣が小鳥に駆け寄ろうとするのを、青年が引き止めた。

「おっと、邪魔者はいなくなっただ。さっさと行こうぜ」

おどけたように笑う青年を結衣は睨みつける。

「なんて事するのよ！」

怒鳴った後、ふと青年の後ろに目を向けると、さっき出てきた通
路の出口に、学者のロイドが立っていた。

「ロイド！」

結衣が思わず名を呼ぶと、青年は小鳥のロイドと勘違いし、苛々
したように怒鳴った。

「いつまでも、うるせえぞ」

ロイドは指を一本立てて、口に当ててみせる。結衣は小さく頷い
た。続いて両手で耳を覆ってみせた。耳を塞げという事だろうか。

結衣は青年から手を離すと、両手の人差し指を両耳にそれぞれ突
っ込んだ。

突然の結衣の奇行を、青年は訝しげにまじまじと見つめる。

「何の真似だ？」

その隙に、こっそり青年の後ろまで来ていたロイドが、いきなり
青年の耳元で囁いた。

「わ」

見た目は囁いたように見えたが、あまりの大きな声に、青年は文
字通り飛び上がって振り向いた。

青年と目が合うと、ロイドはにっこりと微笑み、今度は思い切り

大声で叫んだ。

「こっちだ——っ！」

耳を塞いでいても、頭が割れそうなほどの轟音に、青年は硬く目を閉じ、両手で耳を塞ぐ。

ロイドはすかさず、その腕を逆手に取ると、背中の後ろでひねりあげた。そして、人懐こい笑顔を湛え、青年の耳元で自己紹介を始めた。

「はじめまして。私はセリオス殿下の友人代表、ロイドⅡヒューパツクと申します」

青年は堪らず、わめき声を上げる。

「いて——っ！ しかも、うるせえええっ！」

ロイドは尚も笑顔のまま、他愛のない事を大声で話し続ける。とんでもない嫌がらせだ。

ロイドが嫌がらせを続けていると、通路の出口から、バラバラと王宮の警備隊が現れた。ロイドの手から青年の身柄を引き受けると、再びバラバラと王宮の中に帰って行った。

それを見送りながら、ロイドは耳栓を外し、自分の首にリモコンを当ててボタンを押した。

耳を塞いでいた手を外し、結衣はロイドに尋ねた。

「さっきの大声、何？」

「おまえが毎朝飲んでるナノマシンの姉妹品で拡声器だ。演説用にどうかと思ったんだか、音量調節に難があるため、実用化に至っていない」

ロイドの声は普通に戻っていた。今度のマシンも今日初めて役に立ったようだ。

ロイドは静かに結衣を見つめると、短く問いかけた。

「大丈夫か？」

「うん……」

なんとなく、きまりが悪い。またしても、ロイドのいう事を聞かず、迷惑をかけてしまった。

「行くぞ」

「待って」

背を向けようとしたロイドを追おうとして、結衣は突然ひざから力が抜けるのを感じた。

ロイドは慌てて駆け寄ると、結衣を抱き止めた。

ロイドの顔を見た途端安心したのか、今頃になって攫われそうになった恐怖が、全身を震わせる。

「ケガでもしたのか？」

優しい問いかけに、勝手に涙が溢れ出す。

結衣はロイドの胸に顔をすりつけて、しがみつくと、掠れた声でつぶやいた。

「……怖かった……」

ロイドは結衣の震える身体を、しっかり抱きしめると、項垂れて詫びた。

「悪かった。側にいっておきながら、オレの方が側を離れた」
結衣は首を横に振る。

「あなたは悪くない。勝手に研究室を出た私が悪いの。ローザンも引き止めてくれたのに。ごめんなさい。もう勝手な事しないから」
そう言って、さらにしがみつく結衣の頭を優しく撫でながら、ロイドはクスリと笑った。

「素直にいう事を聞くおまえなんて、薄気味悪いぞ」

「ひどい」

結衣の不服そうな声に、ロイドは益々おもしろそうにクスクス笑う。

ロイドはそのまま、結衣の涙と震えが収まるまで、優しく頭を撫で続けた。

覚醒 (5)

ロイドの鼓動が聞こえる。規則正しく、穏やかに。優しく頭を撫でる、サラサラという音も耳元で響く。それ以上に、自分の鼓動がうるさく聞こえているような気がしてならなかった。

気持ちちが落ち着いてくると、自分からしがみついた手前、離れる機会を完全に逸していた。

おまけにロイドの腕の中は、暖かくて心地よくて、離れがたくもあつた。

結衣が機会を窺って悶々としてしていると、ロイドが頭を撫でる手を止め、静かに問いかけた。

「落ち着いたか？」

「うん……」

ロイドの声をきっかけに、結衣は俯いたまま、ゆっくりと身体を離れた。取り乱してしまつた事と、泣きはらした顔を見られるのが照れくさくて、ロイドの顔をまともに見る事ができなかった。

「戻ろう」

そう言つてロイドが通路に足に向けた時、結衣は思い出して地面にしゃがみ込んだ。

「待って、ロイドが……」

「オレが？」

怪訝な表情で振り返るロイドに、結衣は両手の平に乗せた小鳥を差し出した。

地面に叩きつけられた小鳥は、そのまま動かなくなっていた。

小鳥を受け取って眺め回すロイドを見上げて、結衣は再び涙ぐむ。

「この子、私の命令を聞かなかったの。どうして？」

「どんな状況だった？」

結衣が先ほどの状況を説明すると、ロイドが理由を教えてくれた。

「絶対命令のせいだ」

「人を傷つけてはいけないっていう、あれ？」

「ああ。同時に人が危険な目に合っているのを見過ごしてもならない。こいつは、おまえが襲われていると判断したんだろう。だが、相手が人間だから傷つけるわけにはいかない。せいぜい邪魔するくらいしかできなかったというわけだ」

「直せる？」

結衣が上目遣いに見つめると、ロイドは口の端を上げて、額を叩いた。

「誰に向かって言っている。オレが作ったんだ。メモリがやられてなけりゃ、元通りになる」

「よかったあ」

結衣が安堵の息をつくとき、ロイドは少し目を細め、小鳥を白衣のポケットに収めた。そして思い出したように、反対側のポケットを探ると、掴んだ物を結衣に差し出した。

「おまえ、これが何かわかるか？」

ロイドの手の平の上には、明らかに携帯電話と思われる物が乗っていた。

「ケータイ？」

「やはり、そうか」

結衣はそれを手に取り、開きながら尋ねる。

「あなたが作ったの？」

訊いた後で、すぐに違ふとわかった。そこに書かれているメーカー名や文字は日本のものだ。

電源を入れてみると、待ち受け画面が表示された。バッテリーは切れていない。つまり、この携帯電話はつい最近ランベールにやってきたという事になる。

結衣は驚愕の表情でロイドを見つめた。

「どうしたの？ これ」

「ブラーヌから貰った。昨日ベイシユヴェルの遺跡で拾ったそうだ」

「その遺跡、日本に通じてるの?!」

「それがニッポンの物なら、そういう事になるな」

ブラーヌが言うには、遺跡の装置が活動期に入っているという。本来なら、あと二、三年先のはずだ。何が原因で早まったのか、ブラーヌにはわからないらしい。

遺跡の装置は三十年に一度、三十日間稼働が活発になる。普段の十〜二十倍の頻度で装置が稼働し、光を放つ。この動作が何を意味するのかはわかっていないが、装置が稼働する間隔は、各遺跡ごとに一定となっている。ラフルールは一時間間隔、ベイシユヴェルは五時間間隔といった具合である。

それぞれの遺跡は稼働間隔がまちまちで、時々周期的に稼働時間が一致して、一斉に光る時がある。その時は時空の歪みが最大となり、遺跡は異世界への通路を開く。

過去、遺跡の活動期には、よく物が消えたり、現れたりしたという。人が現れたりするのは稀だが、何例もあるらしい。

「あいつ、そこまでわかっていながら、オレに一言も教えてくれないんだ」

不愉快そうに顔をしかめるロイドに、結衣はため息混じりに言う。

「あなたが、訊かないからじゃないの?」

「あいつと同じ事を言うな」

すかさずロイドが額を叩いた。

「とにかく、おまえが攫われそうになったという事は、誘拐の線は、ほぼ消えたと見て間違いない。まあ、身代金の要求も犯行声明もないから、元々、可能性は薄かったが。逆に遺跡の活動期が早まったせいで、最悪のケースが浮上してきた」

「王子様が異世界に飛ばされたかもしれないって事?」

「ああ。今回の事も含めて、陛下にご報告申し上げる。おまえはまた研究室でおとなしくしてろ。今度はローザンのいう事聞けよ」

「うん」

ふたりは王宮内に入り、そろって研究室に向かった。

研究室に戻ると、結衣の姿を見た途端、ローザンが駆け寄ってきた。

「ユイさん！ よかった、無事だったんですね」

心底安心したような笑顔を向ける彼を見て、本当に悪い事をしたと、結衣は深く反省した。

研究室に帰る道すがら、結衣はロイドが助けに来てくれた時の経緯を聞いた。

怪しい青年と共に結衣が研究室を出た後、ローザンはまず貴賓室の使用状況を確認した。もしも、青年が本物の使いだった場合、いきなりクラーク氏に真相を告げては、内密の接触を断りもなく暴露してしまう事になるからだ。

ところが確認の結果、貴賓室を使用している者はいないという。ローザンは慌てて廊下に出たが、すでに二人の姿は見えなかった。

結衣の通信機に発信器の機能がっている事を思い出したローザンは、ロイドに居場所の確認方法を訊く事にした。

ローザンの通信を受けたロイドは、ちょうど王宮に帰ってきたと同時に、結衣の通信を受け取り、研究室に急いで戻った。結衣の居場所を確認し、警備隊に連絡して、ロイドは馬車置き場に向かったという。

ローザンの機転がなければ、ロイドの帰りが遅れ、結衣は連れ去られていたかもしれない。

頭を下げて礼を述べる結衣に、ローザンが恐縮していると、ロイドが話に割って入った。

「悪いがローザン、大至急調べて貰いたい事がある。十日前からこっちで全遺跡の稼働間隔と、その最小公倍数だ。あと、できれば各遺跡の平均稼働時間も」

「はい。さっき見てたデータでいいんですよね？」

ローザンがそう言って、まっすぐ見つめると、ロイドはなぜか気まずそうに目を逸らす。

「ああ。オレは陛下のところへ行ってくる。それでまた、ユイを頼んでいいか？」

ロイドがローザンに対して下手に出ている。お願いをしている姿が意外で、結衣は目を見張った。

「はい。今度こそ、安心して任せてください」

ローザンが笑顔で答えると、ロイドは益々気まずそうに俯いた。

「すまない。……さっきは悪かった」

ロイドは絞り出すようにそれだけ言って、研究室を出て行った。自分のいない時、二人の間に何があったのだろう。

結衣は呆気にとられてロイドを見送った後、ローザンをまじまじと見つめた。ふと、ローザンの左の頬がうつすらと赤くなっている事に気付いた。

「もしかして、ロイドに殴られたの？」

厳しい表情で尋ねる結衣に、ローザンは頬を押さえて軽く答えた。

「あ、ばれちゃいました？ わからないように、すぐ冷やしたんですけどね」

苦笑するローザンに、いたたまれなくなって、結衣は俯いた。

「ごめんね、わたしのせいで。後でロイドに言っとくから」

「気にしないでください。ぼくの責任でもありますし、ロイドさんの気持ちもわかりますしね」

「だって……」

顔を上げて食い下がる結衣に、ローザンは静かに、けれど強固な意思を持って言う。

「本当に気にしないでいいですよ。それに珍しいものが見られたから、ぼくとしては、ある意味満足しています」

「珍しいもの？」

不思議そうに首を傾げる結衣に、ローザンはにっこり笑って答えた。

「はい。あんなに取り乱したロイドさんは、初めて見ました」

「……え……」

うろたえたのは何度か見た事がある。けれど、いつもは横柄で強引で、本気か冗談かわからない、人を食ったような態度のロイドが、取り乱したとなると確かに珍しい。結衣にはとても想像できなかった。

顔を引きつらせて絶句する結衣を見つめ、ローザンは静かに微笑む。

「きつと、ロイドさんはユイさんを大切に思ってるんですよ」

「それは……」

結衣の顔は苦笑に歪む。

大切に扱われているような気がしない。いきなり押さえつけて得体の知れないマシンを無理矢理飲まされたし、いつも強引に唇を奪われるし。

大切に思われているのだとしたら、それは多分――。

「王子様が見つかる前に、身代わりの私がいなくなったら、困るものね」

結衣の言葉に、ローザンは眉をひそめると、非難するように冷たく言い放つ。

「本当に、そんな理由だと思ってるんですか？」

「え……違うの？」

結衣が力なく問い返すと、ローザンは大きくため息をついた。

「ぼくが口出しする事じゃないと思うんですけど、こんなにも伝わってないとなると、他人事ながら切ないですね。はっきり言わないのも悪いんでしょうけど」

何をブツブツ言っているのかよくわからず、結衣が黙り込んでいると、ローザンが探るように見つめながら問いかけた。

「ユイさんは、ロイドさんをどう思ってます？」

「ど、どうって、どう？」

唐突に脈絡のない事を訊かれて、結衣は思いきり動揺する。その

様子にローザンは納得したようににっこり笑った。

「あ、やっぱりそうなんだ」

「やっぱりって何が？」

ローザンの指摘にさらに動揺が広がり、顔が熱くなってくるのを感じた。

ローザンはにっこり微笑んだまま、意味不明な宿題を出した。

「絶対にそんなはずはないと思い込んで、心にフィルタをかけてませんか？　まずは、そのフィルタを取り払って、ロイドさんを見てあげてください。ぼくの言った事の意味がわかると思いますよ。自分が殿下の身代わりである事は棚に上げて考える事をお勧めしますじゃ」

言うだけ言うと、ローザンはコンピュータの方へ歩いて行った。

結衣はローザンの背中を少しの間見つめていたが、窓際の椅子に戻って、ひざの上に絵本を乗せた。

見るともなしに絵本の表紙をぼんやりと眺めながら、ローザンの出した宿題に取り組んでみる。

思い返せば、ロイドの思っている事など、深く考えた事はなかった。

『学者の考えている事はわからない』

これがローザンの言う、心にかけてフィルタの一番大きいものだと思う。

わかるわけではないから、実際にはロイドを見ないで一般論と自身自身の思い込みで片付けていた。

こう思っているのだろう、こう考えているに違いない——と、思えばいろんな事を勝手に決めつけていたような気がする。

ローザンは王子の身代わりである事は棚に上げると言う。そう言えば今朝、ロイドは結衣を王子だと思った事はないと言った。そしてその後、彼が自信満々で言った言葉を思いだし、結衣の心臓は跳ね上がる。

——たとえば百万人の殿下のクローンの中に、おまえが紛れ込んでいても、オレは見分ける自信がある——

（それって、私は特別だって事？）

そう考えた途端、今までのロイドの言動のあれこれが、ひとつの色に染まっていく。

結衣はおもむろに立ち上がると、ローザンの側まで小走りに歩み寄った。

「ローザン、ひとつ訊きたい事があるんだけど」

「なんですか？」

ローザンは椅子を反転させて、結衣を見上げた。

「私の唇って、魔性を秘めてると思う？」

「へ？」

ローザンは面食らった表情で一瞬絶句した。そして、すぐに意味ありげに微笑んだ。

「ああ。そんな事を言った人にとっては、そうなんでしょうね」

ローザンは結衣をチラリと見上げた後、おもしろそうにクスクス笑いながら、コンピュータの画面に向き直った。

「ぼくの言った事の意味、わかったみたいです」

きっと、おもしろいほどに赤面しているのだろう。自分でも分かるくらいに顔が熱い。

結衣は火照った頬を両手で押さえて、元の席に戻った。

ロイドは王子を好きだから、あるいは、結衣の反応をおもしろがって、からかっているだけだから、そう思っていたから、案外冷静でいられたのに。

今度キスされたら、冷静でいられる自信がない。

気持ちを落ち着かせようと、結衣は絵本をパラパラめくった。けれど、文字が読めないのも、ちっとも絵本に集中できない。集中できない焦りが、益々心の動揺を煽り立てる。

突然、研究室の扉が開き、結衣は弾かれたように顔を上げた。

視線の先にロイドの姿を認めて、結衣の鼓動は高鳴る。

「ユイ、陛下がお召しだ」

そう言いながら、ロイドはまっすぐこちらに歩いてきた。

全然心が落ち着いていない。目の前までやって来たロイドの顔を見る事ができず、結衣は俯いた。

「おまえ、顔が赤いぞ。熱でもあるのか？」

額に触れようと、伸ばしたロイドの手を避けるように、結衣は素早く身を引いた。そして、ロイドを見上げると適当な出任せを言う。「なんでもないの。ちよつとエロい事を考えて、恥ずかしくなっただけだから」

「は？」

ロイドが怪訝な表情をする。あまりにも適当すぎる出任せに、自分でもげんなりした。

すると、ロイドがニヤリと笑い、身を屈めて囁いた。

「考えるだけじゃなくて、体験したくなったら、いつでも協力してやるぞ」

「えええええ——っ?!」

結衣が思い切りのけぞって叫ぶと、ロイドは目を細くして、額をペチッと叩いた。

「いいから、さっさと行ってこい。陛下をお待たせするな」

結衣はハッと我に返り、ロイドの後ろに目を向けた。扉の側にクラーク氏が控えていた。

「行ってくる」

結衣は立ち上がり、クラーク氏に駆け寄る。そして、一緒に国王の元へ向かった。

覚醒 (6)

てつきり軽率な行動を咎められるものと覚悟して行ったら、意外にも王は危険な目に遭わせた事を結衣に詫びた。

あの青年がセギール侯爵の名を使い、王宮内に入ってきた事は間違いない。しかし問い合わせたところ、セギール侯爵は青年の事を知らないと言っているらしい。

たとえ知っていても、青年が失敗してしまった以上、無関係を装うだろう。青年の言っていた事から察すると、誰かに頼まれていたのだろうが、裏に誰がいたのか確証を得るのは難しそうだ。

そして王は、王宮内の警備の強化を結衣に約束してくれた。

ひと息つくと、王は人懐こい笑みを浮かべて、結衣に問いかけた。

「ところでユイ、ロイドとの結婚話に何か進展はあったか？」

そろそろ訊かれるのではないかと思っていたら、案の定だ。結衣は引きつり笑いを浮かべながら答える。

「いえ、何も。彼がずっと忙しくしていますし、私も王子様を演じるのに手一杯で余裕がなかったものですから」

王は少しガッカリしたような表情になる。

「そうか。だが、十日も一緒にいると、ロイドの事がわかっただろう？」

「はい。色々」

横柄で頑固で強引でセクハラな奴です——とは言えない。やはりここは先延ばしにするしかない。

「ですが、私ひとりで決められる事ではありません。この件については、王子様の事が落ち着いてから、改めて彼と相談の上、ゆっくりと考えさせて頂きたいと思います」

「わかった。ゆっくり愛を育むがよい」

(いや、そういう意味じゃないんだけど……)

ニコニコと満足そうに微笑む王に、結衣は苦笑しながら挨拶をして、謁見の間を辞した。

結衣を研究室まで送り届けると、クラーク氏は事件の後処理のため、王の元へ戻っていった。

研究室に入ると、部屋の灯りは消えていた。窓から差し込む夕日が、薄暗い室内をオレンジ色に染めている。

誰もいないのかと思ったら、ロイドがコンピュータの横の机に片腕を乗せて、横向きに座っていた。その上の灯りだけが点いている。

「ローザンは？」

結衣が尋ねると、ロイドは今気がついたように慌ててこちらを向いた。

「ああ、今日はもう帰った」

そして、握った手をまっすぐに結衣の方へ差し出すと、手の平を上に向けて広げた。

「復活したぞ」

手の平の上には、小鳥が乗っていた。結衣は驚きと共に笑顔になる。

「もう直ったの？」

「ああ。予備のボディにメモリだけ移した。動作確認だ。呼んでみる」

結衣は小鳥に向かって手を差し伸べると、名前を呼んだ。

「ロイド、おいで」

小鳥はピッと返事をして飛び立つと、結衣の手の平に着地した。

「よかった。さっきはありがとう」

結衣は小鳥を両手で包み込んで頬を寄せた。

「今度はこちらに來させてみる」

ロイドの声に結衣は顔を上げると、彼を指差し小鳥に命令する。

「ロイド、エロ学者のところへ行って」

小鳥は返事をして飛び立ち、伸ばしたロイドの手に留まった。

ロイドは小鳥を見つめて、小さくため息をつく。

「この情報だけメモリから削除してやればよかったな」

結衣はクスリと笑うと、笑顔で駆け寄った。

「ロイド！」

両手で小鳥を受け取り、頭を撫でていると、横でロイドがボソリとつぶやいた。

「なんだ、そっちな」

顔を向けると、不服そうに手の中の小鳥を見つめている。ふと、礼を言っただけでなかった事に気付いた。

「あ、さっきは助けてくれてありがとう」

結衣の軽い口調が気に入らなかったのか、ロイドはふてくされたようにそっぽを向いて、吐き捨てるように言う。

「オレは、ついでか」

その様子がおかしくて、結衣がクスクス笑うと、ロイドは結衣を睨み上げながら

「何がおかしい」と言う。

座ったままでは立っている結衣の額を叩けないせいか、一際すごく見せたようだが、子供がすねているようにしか見えなくて迫力がない。背が高くてよかったと初めて思った。

結衣が更に笑うと、ロイドは益々不愉快そうに顔をしかめた。

ひとしきり笑った後で、結衣はロイドに声をかけた。

「ねえ」

「何だ」

ロイドはまだ半分ケンカ腰に返事をする。結衣は苦笑しながら問いかけた。

「こんな薄暗いところで何してたの？」

途端にロイドの口調は暗く沈む。

「別に……。そいつを直した後、ぼんやり考えてた」

「何を？」

「どうして一日は、二十四時間しかないんだろうと」

「は？」

一瞬からかわれたのかと思って、結衣は眉をひそめた。しかし、ロイドの深刻そうな表情から、そうでない事はすぐにわかった。ロイドは少し俯いて話を続ける。

「ローザンに調べて貰った結果から、あまり時間がない事が分かった。あいつには感謝している。あいつが遺跡の事を指摘してくれなかったら、オレは今も見当違いな事をしていたかもしれない」

「でもまだ王子様が異世界に飛ばされたって、決まった訳じゃないんでしょ？」

「ああ。だが可能性が高い上に期間が限られている以上、優先する必要がある。遺跡の同期間隔は三十時間だとわかった。明日十四時に最初の同期が取れる。それには、どうしたって間に合わない。それ以降、活動期が終わるまでに十六回しかない。おまけに稼働時間は最短で十秒だ」

ロイドは俯いたまま、額に手を当てた。

「考えなきゃならない事や、やらなきゃならない事が山積しているのに、何から手をつけたらいいのか、頭が働かない」

何をどうやって、異世界に行ってしまった王子を捜そうとしているのか、結衣には見当もつかない。だが、いつもは強気で自信満々のロイドが、気弱になっているところを見ると、大変な労力が必要なのだろう。

おまけにおそらく、これまで通りの搜索も同時に行わなければならないはずだ。何も手伝う事ができないのが、ひどくもどかしかった。

せめて少しでも気持ちを楽にしてあげようと、努めて明るく話しかけた。

「じゃあ、頭が働くように甘いもの食べる？ 明日、さっきのお礼も兼ねてケーキを作ってあげる。何がいい？」

ロイドは顔を上げ、少し笑みを浮かべて答えた。

「今朝の奴」

「わかった。シュークリーム二十個ね。とりあえず今は、甘いお茶を淹れてあげる」

結衣が背中を向けてお茶を淹れに行こうとすると、後ろでロイドがつぶやいた。

「なるほど」

そう言いながらロイドは、振り返ろうとした結衣の手首を掴んで引き寄せた。後ろへ引かれバランスを崩した結衣は、フラつきながら二、三步後ずさり、そのままロイドのひざの上に尻餅をついた。

「ちょっと、何なの！」

わめきながら立ち上がりとする結衣を、ロイドは片手で捕まえ、もう片方の手でメガネを外しながら顔を覗き込んだ。

「確かに、エネルギーの補給は必要だ」

「何、メガネ外してるの！ だから、ゲロ甘茶を淹れてあげるって言ってるでしょ？」

メガネを外したという事は、キスが来る。そう思った途端、結衣の鼓動は早くなる。やはり冷静でいられない。

ロイドはメガネを机の上に置くと、もがく結衣を両腕で抱きすくめた。

「そんなものより、おまえの唇の方が何倍も甘い」

歯が浮くようなセリフに結衣が硬直した隙を突いて、ロイドは素早く口づけた。

唇に伝わるロイドの感触に、結衣の鼓動は益々高鳴る。

少しの間、結衣の唇を味わうと、ロイドは顔を離してニッと笑った。

「エネルギー充填、百二十パーセントだ」

百二十パーセントって、溢れてると思う。心の中でツツコミを入れながら、結衣は身体を突き放すと、ロイドを軽く睨んだ。

「バカ……！ 人が来たらどうするのよ」

「おまえが言ってた、殿下との禁断の恋か？」

ロイドは少し声を上げて笑った。そして、目を伏せると、皮肉な

笑みを浮かべ投げやりに言う。

「それで投獄されるなら、その方がいい」
「なんだか様子がおかしい。」

「ロイド？」

探るように見つめると、ロイドはいきなり荒々しく結衣を抱きしめた。

「無能な学者として投獄されるより、遙かにマシだ」

そう言ってロイドは、再び口づけた。

「らしからぬ言動、投獄って何？ 訊きたい事は色々あるのに、きつく抱きしめられていて逃れられない。叩きつけるような激しい感情とキスに、軽い恐怖と目眩のようなものを感じる。」

「……やっ……！」

ようやく少し顔を背ける事に成功し、話しかけようとしたが、ロイドはそれを許さなかった。

「まだだ」

頭に手を添え、抱きしめる腕に力を加えると、更に深く口づける。今までにない激しく濃厚で長い口づけが、次第に結衣の全身から力を奪い、身体の芯が痺れてくるような感覚を覚えた。

しばらくして解放された時には、まるで熱に浮かされたように、頭の中は真っ白で、目の焦点は合わないほど、結衣の意識は朦朧としていた。実際に全身が熱い。

すっかり放心しきった結衣の耳元で、ロイドが囁いた。

「感じたのか？」

その声にハッとして我に返った結衣は、思い切りロイドを突き放した。

「違うわよ！」

否定したものの、本当のところはよくわからない。頬を膨らませる結衣を見て、ロイドはおもしろそうにクスクス笑う。

「キスで放心するほど感じてるようじゃ、先が思いやられるな」

「だから違うってば！ 先って何よ！」

わめく結衣の耳元で、再びロイドが囁いた。

「知りたければ教えてやる。今からオレの部屋に行くか？」

いつもの軽口とは少し違うような気がして、背筋がゾクリとした。真面目に反応してはいけないと思い、精一杯冗談として受け流す。

「行かないって前に言ったでしょ？ この、エロ学者！」

『エロガクシャ』

別の場所から聞こえた結衣の声に驚いて、二人同時にそちらを向くと、机の上で小鳥がロイドのメガネをつつきながら、首を傾げていた。

ロイドは目を細くして、結衣を見つめると額を叩いた。

「音声多重で言うな」

いつものロイドに戻った事にホッとして、結衣はひざの上から立ち上がった。振り向くと、来た時と同じように、少し俯いてぼんやりしたロイドの姿があった。

詳しい事はよく分からないが、時間がないのにやる事がたくさんあって、少し混乱しているようだ。結衣の知る限り、この十日間、王子の捜索に関して成果も上がっていない。それで心に余裕をなくしているのだろう。

大きなロイドが、途方に暮れる小さな子供のように見えた。

結衣は側に寄ると、ロイドの頭を腕の中にそっと抱きかかえた。

「エネルギー充填、百二十パーセントなんでしょ？ あなたの超優秀な頭脳を存分に働かせて。あなたなら絶対できるから」

ロイドは結衣の手をそっと握ると、静かに返事をした。

「ああ……」

覚醒 (7)

すでに日が沈み、夕闇の迫る研究室は益々暗くなってきた。ひとつだけ点いた灯りの下で、結衣はロイドの頭を胸にかかえて、先ほど彼がそうしてくれたように、優しく頭を撫でていた。

蜂蜜色の髪は、見た目が人形の髪のように、硬くごわごわしているのかと思ったら、案外柔らかく手触りがよかった。

しばらくそうしていると、ロイドがポツリとつぶやいた。

「おまえ、ホント胸小さいな」

「……え……」

思わず手を離して一歩下がると、ロイドはメガネをかけて結衣を見上げながら更に言う。

「最初、ゴツツて、肋が当たったぞ。女の胸に抱かれてるような気がしない」

結衣はムツとして眉を寄せると、ロイドの頭を小突いた。

「悪かったわね!」

ロイドはニヤニヤしながら、両手をこちらに向けて握ったり開いたりしてみせた。

「オレに任せてみる。ひと月で三倍にしてやるぞ」

怪しい投資ビジネスにでも勧誘されているような気がして、結衣は大きくため息をつく。

「……その手つき、やめて」

だが、ふと好奇心に駆られて、ついつい問い返した。

「ねえ、それって本当に大きくなるの?」

ロイドは腕を組んで、大真面目に答える。

「さあ……。ここまでささやかな胸に出会ったのは初めてだからな。これまでに顕著な成果が現れたのを実感した事はない」

「だったら、三倍になるかどうか、わからないじゃないの」

結衣が肩を落として、ため息混じりに言うと、ロイドはニヤリと笑って再び両手をにぎにぎする。

「生体実験を試みるなら、協力するぞ」

「結果がどう転ぶかわからない生体実験は、許可しないんじゃないかなったの？」

「局長権限で特別に許可する。人体に悪影響がない事はわかってい
るからな」

「そういうの職権濫用って言わない？ 形が悪くなったらどうする
のよ」

「まず形がなければ、悪くなりようがない」

「形ぐらいあるわよ！ 失礼ね！」

頭を叩こうとしたが、いつものごとくヒョイと避けられて空振りに終わった。

結衣はいつものロイドに戻った事にホッとしながらも、不愉快そうに小鳥を呼び寄せる。

「もう！ 落ち込んでるのかと思って心配して損した。ロイド、おいで！」

手の平に飛んできた小鳥を見て、もうひとつ疑問が湧いてきた。

「そういえばさっき、私、思い切り襲われてた気がするんだけど、この子どうして、あなたの邪魔しなかったの？」

ロイドは机に片手で頬杖をつく、横目で結衣を見上げて口の端に笑みを浮かべた。

「おまえが嫌がってるように見えなかったんだろう」

「そ、そんな事ないわよ」

結衣が焦って否定すると、ロイドは更に目を細めて意味ありげな視線を注ぐ。

「そうか？ 安心してるとき、艶っぽい表情してたぞ」

一瞬にして顔に血流が集まってくるのがわかって、結衣はクルリと背を向けた。

「お茶、淹れてあげる」

そう言ってスタスタ歩き始めると、後ろでロイドのクスクス笑う声が聞こえた。

艶っぽい表情って、いったいどんな顔していたんだろうと思うと、恥ずかしくてしょうがなかった。

研究室の隅にある給湯コーナーの灯りを点けてお茶を淹れながら、結衣はチラリとロイドの様子を窺った。彼は机に向かってノートパソコンを操作し始めていた。頭が働くようになったらしい。

結衣はホッとひと息つくとお茶を持ってロイドの側に戻った。

お茶を机の上に置き、いつもはローザンが座っているメインコンピュータ前の椅子を引いて、ロイドの隣に座った。

覗き込むと、画面にズラズラと文字を打ち込んでいた。何が書いてあるのかはわからないが、ただの文書のように見える。

「何やってるの？」

結衣が尋ねると、ロイドは手を休めてお茶を一口すすり、こちらを向いた。

「頭を整理しようと思って、やる事リストを作っている」

「え……こんなにあるの？」

改めて画面を見ると、画面の上から下まで数十行に渡って、文字がびっしり並んでいる。

「細分化して書いてあるだけで、大きく分けたら二つだ。これまでの作業で今後も継続するものと、今後新たに行うものだ。新たに行うものは装置の改造が主だからオレがやるしかないが、継続作業の方はローザンに手伝って貰うつもりだ」

ローザンはこれまで、人捜しマシンの誤動作の原因を探るため、マシンの稼働ログや検索結果データの解析を行っていた。

指定していないのに結衣を転送してしまった原因を探るためだったが、結衣が現れたのはマシンによる転送ではなく、遺跡の装置によるものである可能性が高い。

現時点でローザンの解析結果から転送機能のバグは発見されていないし、ロイドによるマシンそのものの調査からも不具合は発見さ

れていない。

この事実から転送機能にバグはないものと結論し、データ解析は打ち切る事とした。

手空きになったローザンは、今までロイドが行っていた捜索隊の捜索結果と機能縮小版マシンの捜索結果確認等を行う事になるらしい。

「あなたは何するの？」

「正規版装置の改造だ。異世界検索対応に変更する」

平然と答えるロイドに、結衣は目を丸くする。

「そんな事できるの？」

「遺跡の同期時に検索かければ、可能な事は実証されている」

「実証？」

いつの間に調べたのだらうと不思議に思っただけで結衣が首を傾げると、ロイドはまっすぐ見つめてあごをしゃくった。

「おまえだ」

「え？」

「おまえが現れた時の検索結果に、この世界にはありえない位置座標が記録されている。しかも装置はそれをエラーとして処理していない。装置の誤動作はこの部分かな」

人捜しマシンは元々、検索対象範囲が克蘭ベール大陸全土をカバーする範囲に限定されている。それ以外の範囲を指定すればエラーとなり検索は行われない。

特に範囲指定がない場合、大陸全土が検索対象となり、それ以外の範囲は検索しないので、記録に残る事自体おかしいのだ。

「その誤動作は放置して大丈夫なの？」

「かまわない。異世界対応に当たって、範囲の限定は解除する。問題なのはそれに伴う処理速度の低下だ。範囲が広がれば、それだけ検索に時間がかかる。異世界が検索可能な時間は十秒だ。ソフト、ハード共に高速化が必要になる」

範囲が広がると遅くなるなら、範囲を狭くすればいいのではない

かと思い、結衣は提案してみた。

「この世界以外を対象範囲にすればいいんじゃないの？」

ロイドは少し笑って首を横に振った。

「それは更に時間がかかる」

結衣がキョトンとすると、ロイドは説明した。

キー項目の設定されたデータベースに、キー項目を指定して検索をかけるなら有効な場合もあるが、キー項目以外を検索条件に指定すると、否定条件の指定は全件検索より時間がかかるものらしい。

おまけに王子の検索はデータベースの検索ではない。キー項目などあろうはずがない。

これまでの対象範囲は検索の終了条件だ。終わりがどこにあるのかわからない異世界の範囲を終了条件に設定するのは不可能なため、全範囲を検索するしかないという。

一体どういう理屈で「範囲指定あり」が「範囲指定なし」より時間がかかるのか、結衣にはさっぱりわからないが、とにかく無理だという事らしい。

結衣は眉間にしわを寄せて、頭をかかえた。

「なんかよくわからないけど、大変そうな気がする」

その様子を見て、ロイドはクスリと笑うと事も無げに言う。

「やる事自体はそれほど大変じゃない。だが悠長に試行錯誤を繰り返しているヒマはない。あさっての二十時までには、できるだけ高速化しておかなければならない。ほとんどぶっつけ本番だか、それまでは異世界を除く全世界を対象にしてテストするしかないな」

結衣にしてみれば大変な事のように思えるが、ロイドにとっては大して大変でもなさそうだ。なのはどうして、さっきはあんなに余裕をなくしていたのだろう。少し気になったので、思い付く事を訊いてみた。

「ねえ、王様に何か言われた？」

脈絡のない質問に、ロイドは不思議そうに結衣を見つめる。

「いや、労をねぎらっていただいた」

そう言った後、思い出したようにクスクス笑った。

「おまえと同じ事おっしゃってたぞ。おまえなら、きっと成し遂げるだろうって」

結衣は思わずため息をつく。

それはかえってプレッシャーかもしれない。結衣の言葉ならただの励ましだろうが、王の言葉だと期待に応えなければならぬ気がする。

だが、ロイドが王に信頼と期待を寄せられているのは、今に始まった事ではない。気弱になる原因としては弱い気がする。

”投獄”も気になる。もしも王の期待に応えられなかったら、投獄されるって事だろうか。

異世界の検索で王子が見つからなかったとしても、今と変わらない。むしろロイドを投獄してしまつては、今後の搜索作業には大きな痛手となるはずだ。心に余裕をなくしていたから、そう思っただけだろうか。

結局、納得できる投獄の理由を思い付かないので、結衣は別の事を考えた。

もしも王子の不在がこのまま続いたら？

「このまま何年も王子様が見つからなかったら、私、フィオナと結婚しなきゃならないのかな」

結衣が何気なく疑問を口にする、ロイドは穏やかな表情を湛え、抑揚のない声で言う。

「そうなるだろうな」

結衣は思わず笑顔を引きつらせた。

「だって女同士よ？　できるわけがないのに、今度は世継ぎが生まれないって問題になるんじゃないの？」

ロイドは表情を変えることなく、機械的に言う。

「子供なんかどうとでもなる。禁忌のクローン技術を使えばな。殿下の体細胞と遺伝子情報は科学技術局に保管されている。偽者が現れたりした時の科学捜査のためだ。局長のオレが許可すれば利用は

可能だ」

結衣は眉をひそめてロイドを見つめたまま、一瞬絶句する。感情を殺したロイドに違和感を覚えながら、立ち上がって叫んだ。

「そんなのフィオナがかわいそう！　フィオナは王子様が好きなのに！」

ロイドは相変わらず穏やかな表情で結衣を見上げ、静かに問いかけた。

「他人の事より自分はどうなんだ？　この先、もしかしたら一生、耐えられるのか？」

考えてなかった。この先一生、克蘭ベールで王子の身代わりをするなど。

呆然と立ち尽くす結衣を見つめて、ロイドの表情が少し動いた。淡い笑みを浮かべると再び問いかける。

「オレと一緒に逃げるか？」

「え？」

「何もかも放り出して、何もかも失ったオレと一緒に」

時が止まったかのように、二人で見つめ合ったまま微動だにせず沈黙が続いた。

少ししてロイドが目を逸らし、低くぐもった声で笑った。

「本気にするな。そんな事しても、のたれ死ぬだけだ。おまえはちゃんとニッポンに帰してやる。最初にそう言っただろう」

「うん……」

少しホッとして結衣は気の抜けた返事をする。それから、ふと思いついて尋ねた。

「でも、どうやって？　見当がつかないって言ってたじゃない。ついたの？」

「ああ。遺跡の同期を利用する。おまえのいた場所の座標はわかっているんだ。装置の転送機能を拡張して、逆転送可能にすればいい。同期の最後の一回はおまえを帰すために使う」

毅然として見上げるロイドに、結衣は身を屈めて詰め寄る。

「でもそれじゃ、それまでに王子様が見つからなかったら？」

ロイドはいつものように自信満々で言う。

「誰に向かって言っている。オレは諦めない。必ず殿下を見つけ出して、おまえをニッポンに帰す」

投獄の意味がわかった。

王子が見つからないまま、結衣が克蘭ベールから姿を消せば、いずれ王子の不在が公になってしまう。搜索責任者である上に、独断で結衣を逃がした事が知れば、ロイドは何らかの罰を受けるだろう。

かといって、三十年に一度のこの機会を逃せば、この先三十年は結衣を克蘭ベールに縛り付けてしまう事になる。

時間はあと二十日しかない。ロイドは自分の働きに左右される結衣の行く末を案じて、思い悩み心を乱していたのだろう。

そして多分、王子が見つからなくても、結衣を日本へ帰す決意を固めてしまったようだ。

気がつかなければよかった。こんなにも大切に思われている事に。横柄で強引でセクハラなだけの奴でいてくれたら、何も気にせず喜んで日本に帰れた。こんなに氣遣って貰っているのに、自分は彼に何もしてあげていない。何もできる事がない。

黙ってロイドを見つめる結衣の頬を涙が伝う。ロイドは少し驚いたように尋ねた。

「どうした？」

「なんでもない」

結衣が小さな声でやっと答えると、ロイドはフツと笑って立ち上がり、結衣の頭をかかえるようにして抱き寄せた。

「また、なんでもないのに泣いてるのか」

ロイドは結衣の頭を撫でながら、優しく諭すように言う。

「心配するな。おまえは必ず守ってやる。前にも言っただろう？」

ロイドの優しさに涙が止まらなくなり、結衣は彼の胸に顔を伏せてしがみついた。

「優しくしないでよ」

「わかった。激しい方がいいんだな？」

「バカ。エロ学者」

耳元でロイドがおもしろそうにクスクス笑う。

「私、あなたに何もしてあげられない」

「おまえにはエネルギーを貰った。オレはきっと成し遂げられる。おまえの胸は確かに小さいが、すごく温かった」

「小さくて悪かったわね。他に言う事ないの？」

ロイドの抱きしめる腕に力が加わった。

「あ………もう少し太れ」

一際強く抱きしめた後、ロイドは身体を離れた。

「オレは、もうしばらくここで設計をする。部屋に戻るなら送って
いこう」

結衣は涙を拭いて、ロイドを見上げた。

「ここにいる。邪魔しないから。一緒にいたい」

ロイドは目を細めて頷いた。

「わかった。好きにしろ」

その日の夜、結衣は時々テラスに出てみたが、ロイドの部屋の灯りは遅くまで消えたままだった。

覚醒（8）

結局、二日後の二十時まで装置の改造は間に合わなかった。

異世界検索の際は、ローザンがタイムキーパーを務める事になっていたが、中止となったため帰された。

次の同期は二日後の午前二時。ローザンは昼まで一旦休み、真夜中に再び来て貰う事になっている。その間もロイドはローザンの分まで作業を行うらしい。

ロイドはあれから夜遅くまで研究室に詰めている。夕食までは結衣も研究室にいるが、結衣が起きている間に部屋に戻ってきた気配はない。

寝てないのではないかと思ひ尋ねてみたら、眠らないと頭が働くわけではないからちゃんと寝ていると言う。

結衣は他にできる事がないので、毎日ケーキを作る事にした。

今日行われるはずだった初めての異世界検索は中止になったので、遺跡が光るところを見ようと、結衣は夜のテラスに出た。

前に見た時は、ほんの一、二秒だったので一瞬で終わったが、同期時は十秒間発光するという。

この先は検索に忙しくて、見る事はできないかもしれない。三十年に一度の珍しい光景を、目に焼き付けておきたかった。

テラスに漂う甘い香りに、結衣はロイドの部屋の方に視線を向けた。手すりにもたれ、灰皿を持ってタバコを吹かしているロイドの姿がそこにあった。

ロイドは結衣に気付いてこちらを向くと、タバコをもみ消した。

「おまえも見に来たのか？」

そう言いながら、自室前に置かれた机に灰皿を置くと、再び手すりの側に戻って来た。

「うん」

結衣は答えて、ロイドの側に歩み寄った。二人は並んで手すりに
縋る。少し後、ロイドが腕時計を見てつぶやいた。

「始まるぞ」

その声を合図に、街の外の遺跡に目を向けた時、青白い光が天に
向かって放たれた。

時間が長いせいか、以前見たものとは比べものにならないほど、
太く明るい光の柱は、天を焦がさんばかりに高く立ち上る。

幻想的な光景に圧倒されて見入る結衣の隣で、ロイドが低くつぶ
やいた。

「こんな時でなければ美しい光景なんだろうが、一回無駄にしたか
と思うと忌々しい」

やがて光が収束し、結衣はロイドに視線を向けた。ロイドは少し
肩をすくめて、天を指差した。

「大陸全土を見渡せる上空から見たら、壮観だろうな。全遺跡が一
斉に光る様は」

黙って見つめていると、おどけたようなロイドの笑顔が、次第に
真顔に変わっていった。

そして、ロイドはいきなり結衣を抱きしめた。

「何？」

驚いて結衣が尋ねると、ロイドはさらにきつく抱きしめて絞り出
すように言う。

「少し、黙ってろ」

言われるままに黙って、しばらくじっとしていると、ロイドの腕
が少し緩んだ。

「おまえを抱いていると、気持ち落ち着く」

耳元でつぶやくロイドの声に謎が解けた気がして、結衣は思わず
クスリと笑った。

（だから、ロイドはドキドキしないんだ）

結衣はロイドの背中に腕を回して、抱きしめ返した。

「つらいの？」

結衣の問いかけに、ロイドは腕をほどき、両肩に手を置いて、結衣の身体をゆっくりと突き放した。

「……大丈夫だ」

ロイドは俯いて少し笑顔を作ってみせると、結衣の頭をひと撫でし、背を向ける。

「もう少し高速化のロジックを考えてみる。おまえはもう寝ろ」
そう言って自室に向かい歩き始めた。

遠ざかっていくロイドの背中が、どこか儚げで、結衣は思わず名を呼んで駆け寄った。

「ロイド！」

振り向いたロイドの胸に飛び込んで、結衣はしがみついた。

「一緒に連れて逃げて。王子様が見つからなかったら。私、あなたについて行く」

ロイドはそっと結衣を抱きしめ、静かに答えた。

「ああ。だがそれは最後の手段だ。最後まで最善を尽くそう」

「うん」

結衣が笑って頷くと、ロイドは一変してイタズラっぽい笑みを浮かべ問いかけた。

「じゃあ、殿下が見つかった時は、どんなご褒美を貰えるんだ？」

「え？ それは王様から出るんじゃないの？」

思いも寄らない質問に、結衣が戸惑いながら答えると、ロイドは不服そうに見つめる。

「おまえからは何もないのか？ オレについて来るって事は、人生をオレに預けるって事だろう？ 見つからなかった方がご褒美を貰えるってのは、おかしくないか？」

「そう言われても……」

結衣が苦笑して言い淀んでいると、ロイドは何かを思い付いたらしく、大きく頷いた。

「よし。見つかった時は、おまえを頂くとしよう」

「い、頂くって何？」

思い切りうろたえて、結衣が腕の中から逃れようすると、ロイドは身体を引き寄せ耳元で囁いた。

「子供じゃないんだ。わかるだろう？」

「えーと、そう言う意味じゃ、私、子供だから」

声を上ずらせて、乾いた笑いを漏らす結衣を、ロイドは少し目を見開いて見つめた。

「そうなのか？　　そういえば、キスも初めてだって言ってたな」

「……え……」

どうやらウソだとウソをついた事が、ばれていたらしい。

ロイドは改めて結衣を抱きしめると、楽しそうに笑った。

「まあいい。それはそれで楽しみだ」

「え？　　男の人って、初物は引くんじゃないの？」

結衣が意外そうに見上げると、ロイドはニヤリと笑った。

「オレは気にしない。初物には初物の良さがある。オレ好みにカスタマイズ自在って事だからな」

「機械のように言わないで」

結衣は思いきり脱力して、大きくため息をついた。

「とりあえず今は、前金を頂いておくでしょう」

そう言いながらロイドは、メガネを外してポケットに収めた。結衣は再び焦って、逃れようと腕を突っ張る。

「そういう前金なら、充分に支払ってるでしょう？」

抵抗する結衣を少し強引に引き寄せ、ロイドは真顔で問いかけた。
「イヤなのか？」

髪と同じ金のまつげに縁取られた濃い緑の瞳に間近で射すくめられ、結衣の身体から抵抗の意志が抜け落ちていく。

「……訊かないでよ」

力なく言い捨てて目を逸らそうとすると、ロイドが指先であごを掴み、顔を上向かせた。結衣は少しロイドを見つめた後、観念し目を閉じた。

唇に優しいキスが落ちてきた。

いつの間にか、ロイドのキスを心地よく感じるようになっていた自分に気付いた。

少ししてロイドが唇を離すと、結衣はロイドの胸に顔を伏せて小さく告げた。

「……好き……」

「ん？ 何か言ったか？」

ロイドはメガネをかけて、結衣の顔を覗き込む。

勢いに任せて告白した事が途端に照れくさくなり、もう一度告げる勇氣はなかった。

「なんでもない」

ロイドは結衣から離れると、耳元で一言囁いた。

「――」

そして、そのまま背を向けると自室の中に消えていった。

最後の一言で結衣は悟った。ロイドは結衣を連れて逃げる気なんかない。

結衣は両手の拳を握りしめ、顔を歪めて叫んだ。

「この、頑固者……！」

薄暗いテラスに、結衣の叫びが空しく響く。

結衣はしばらくの間、夜風に髪をなびかせて、ぼんやりテラスに佇んでいた。

（第3話 完）

Last Kiss (1)

朝日が差し込む研究室に、二度目の緊張感が漂っていた。メインコンピュータの前に座ったローザンは画面に表示された時計を見つめて、ロイドに告げる。

「ロイドさん、同期開始三十秒前です」

それを聞いてロイドは、人捜しマシンの横にあるコントロールパネルを操作し始めた。

ガラスの筒の天辺にある赤いランプが点灯する。転送機能オンの合図だ。

結衣は邪魔にならないように、少し離れた場所から二人の様子を見ていた。

「二十秒前です」

ロイドが操作するパネルの画面に、バラバラと文字が表示され、次々にスクロールしていく。

「十秒前です」

ロイドが最後のキーを勢よく叩き終わると、人捜しマシンがヴンと低いうなりを上げて作動した。

パネルの上のボタンに手をかけたまま、ロイドはローザンのカウントダウンに耳を傾ける。

「五秒前……四……三……二……一……開始」

合図と同時にロイドがボタンを押すと、マシンは一際高いうなりを上げて検索を開始した。

ロイドの見つめる画面には王宮を中心とした世界地図が表示され、時間経過と共に白地図は、中心から同心円を描きながら、みるみる青く染め上げられていく。

地図が一面真っ青に染まった後も、マシンは検索を止める事なく、そのまま動き続けた。検索が終了すれば、画面中央にメッセージウ

インドウが開くという。

固唾を飲んで画面を見つめる中、再びローザンのカウントダウンが始まった。

「同期終了五秒前……四……三……二……一……終了です」

終了の声と共に、マシンはうなりを止め検索を停止した。画面の真ん中には、赤い文字の書かれたウィンドウが点滅している。

ロイドはコントロールパネルの上で拳を握り、ガツクリと項垂れた。

「くそっ……！ また終了サインが出なかった」

一気に緊張の糸が切れた結衣は、大きく息をついた。邪魔にならないように両手の中に閉じ込めていた小鳥を放ち、肩に留まらせる。ロイドは気怠げにマシンを停止させると、力なくローザンに命じた。

「ログを出してくれ」

「はい」

人捜しマシンの起動停止時刻や、検索中の検索終了地域の座標や所要時間等の検索状況、エラーが発生した場合のメッセージやエラーの状態などは、接続されているメインコンピュータにログファイルとして出力される。

言われた通り、ローザンが画面にログを表示すると、ロイドはそれを後ろから覗き込み、二人で検索結果の検証が始まった。

見ているとよくわからないので、結衣はその場を離れ、お茶を淹れるために給湯コーナーへ向かった。

異世界の検索は予想以上に困難を極めていた。これで二回失敗したことになる。

失敗しているので、対象範囲の規模が把握しきれていないという。七つの遺跡がいくつかの異世界に通じているのか、あるいは通じていないものもあるのか、わかっていない。最多でこの世界も併せて八つの世界を検索しなければならぬことになる。

それだけで大変そうだということだけ、結衣にもわかった。

ロイドは相変わらず、夜遅くまで研究室に詰めている。いつも忙しそうにしているので、結衣は関係ないことを話しかける事ができずにいた。

勢いでうっかり告白してしまった事が、ロイドを余計に追い詰めてしまったような気がしてならない。

最初は聞こえていないのかと思ったが、あの言葉はどう考えても聞こえていたとは思えない。あの言葉の真意を確かめたいのに、あの言葉が歯止めとなって、ロイドに話しかけにくくなっていった。

最初の異世界検索が中止になった夜、ロイドが最後に残した言葉。

——オレなんか、好きになるな——

ロイドを好きになったら、言う事を聞かない結衣は、日本に帰らないと言い出すかもしれない。現に王子が見つからなかったら、一緒に逃げると言っている。それを承諾したのは、結衣を安心させるためだろう。

ロイドの中では、結衣を日本に帰す事は、揺るぎない決定事項となっているようだ。昨日の実験からもそれは明らかだ。

人捜しマシンの転送機能を拡張して、逆転送可能にする事は、ロイドにとって簡単な事だったようだ。すでにその機能は完成していて、昨日テストが行われた。

ロイドはローザンに操作方法を教え、自らの身をもって実験を行った。

研究室から科学技術局へ自分自身を転送してもらい、以前連絡のあった局長の仕事をこなし、局員に渴を入れ、三十分後にローザンの手により、研究室に転送されて帰ってきた。

実験の成功にローザンは酷く興奮していたが、ロイドは平然としていた。元々、確実に成功するという自信があったのだろう。

結衣を日本に帰す準備はすでに整ったという事だ。

結衣は自分がどうしたいのか、よくわからなかった。

日本には帰りたと思う。

克蘭ベールにやってきて今日で十五日目だ。盆も夏期休暇もすでに終わっている。

何の連絡もなく、エアコンも付けっぱなしで、部屋から忽然と姿を消していたら、親も会社も心配しているはずだ。

けれど日本に帰ってしまえば、ロイドとはもう二度と会えないかもしれない。

遺跡の活動期を利用すれば、三十年後には会える。それ以前にロイドが作ろうとしている時空移動装置が完成すれば、もっと早く会えるだろう。

しかしロイドが、そうまでして自分に会いたいと思ってくれるかどうかは、わからない。そして何より、その事でロイドを自分に縛り付けたくはなかった。

日本に帰るつもりなら、ロイドが言ったように、これ以上彼を好きにならない方がいいのかもしれない。だけど……。

結衣は休憩コーナーにお茶を運ぶと、二人に声をかけた。

「ロイド、ローザン、お茶入ったよ」

結衣の声に振り向いた二人は、話しながら揃ってこちらにやって来た。

「全世界の検索に二秒もかかるのは問題だな」

「そうですか？　ぼくには充分速いと思えますけど」

「他がどれだけあるかわからないんだ。できれば一秒未満に抑えたい。ハードはこれ以上どうにもならないから、ソフトでなんとかするしかないな」

「ぼくにプログラミングの知識があれば、もう少しお手伝いできるんですけどね」

三人で席に着くと、ローザンが笑顔で結衣に話しかけた。

「いつもありがとうございます」

結衣も少し笑顔を作って答える。

「気にしないで。他にできる事ないし。三時にまたケーキ作ってく

るから、楽しみにしててね」

「はい」

ローザンは嬉しそうに一層微笑むと、カップを口へ運んだ。

ロイドは砂糖十五杯入りの橄甘茶を黙々と飲んでいる。結衣はその横で机の上のカップを両手で包み、俯いてぼんやりしていた。

少しして、黙り込む二人を不審に思ったのか、ローザンが尋ねた。
「ケンカでもしてるんですか？」

「いや、別に」

同意を求めるようにこちらに視線を送るロイドと目が合い、結衣も頷いて答える。

「してないよ」

ローザンは腑に落ちないといった表情で、首を傾げながら再び尋ねた。

「そうですか？ ユイさん、元気がないですね。どこか具合が悪いんですか？」

ローザンが心配してくれているのはわかるし、嫌な雰囲気を漂わせて申し訳ないとは思うが、少しうるさい。軽く苛ついた結衣は、笑顔で沈黙の呪文を唱えた。

「大丈夫、なんともないから。ちょっと生理痛なの」

「え……」

案の定ローザンは、絶句して気まずそうに俯いた。

「すみません。詮索して……」

お茶を飲みながらチラリと横目で様子を窺うと、ロイドが呆れたような表情で、こちらを見ていた。彼にはウソだとばれているようだ。

そもそもロイドには、結衣が気落ちしている理由はわかっていると思う。

お茶を飲み終わり、二人が仕事に戻ると、結衣はさっさと後片付けを済ませた。給湯コーナーから出て、すぐロイドに告げる。

「私、部屋に戻る」

ロイドは振り返り、

「そうしろ。生理痛なら、しばらく寝とけ」

そう言いながら、こちらにやって来た。

向こうでローザンが苦笑している。ウソだとわかっているくせに、イヤミな男だ。結衣はムツとして、眉を寄せるとロイドを睨んだ。

ロイドはそれを無視してローザンに一声かけると、結衣と共に研究室を出た。

一言も口をきかないまま王子の部屋にたどり着き、結衣が扉に手をかけるのを見届けて、ロイドは立ち去ろうとした。結衣は慌てて、それを引き止める。

「待って。一緒に来て」

ロイドは怪訝な表情をしながらも、結衣の後について部屋に入った。

部屋の中では三人の女の子が掃除の真っ最中で、クラーク氏がそれを監督していた。

部屋に入ってきた結衣を見て、クラーク氏は驚いたような顔をした。いつも日中はロイドの研究室に入り浸っていて、夜にならないと部屋に戻らないからだ。

「殿下。いかがなさいましたか？」

少し目を見開いて問いかけるクラーク氏に、結衣は王子になって命令する。

「クラーク、悪いけど、彼女たちと一緒に外に出てくれないか？」

クラーク氏は結衣の後から入ってきたロイドに少し視線を送ると、

「かしこまりました」

と言って軽く頭を下げた。

クラーク氏が女の子を連れて部屋を出て行くと、結衣はまっすぐリビングに向かった。ロイドはリビングの入り口で立ち止まると、無表情のまま芝居がかった調子で結衣に問いかける。

「人払いまでなさって、私にどういった内密のご用件ですか？ セリオス殿下」

「茶化さないで。こっちに来て」

結衣が強い口調でそう言うと、ロイドは大腿で結衣の目の前まで歩み寄った。威圧するように背筋を伸ばして、上から見下ろす。

「何の用だ」

結衣も負けじと、睨み上げながら言う。

「あなた、私を連れて逃げるつもりないでしょう」

「当たり前だ」

少しも言い淀む事なく即答するロイドに、思わずカッとなって結衣は怒鳴った。

「守るつもりのない約束なんて、しないでよ!」

ロイドはひるむことなく持論を展開する。

「あんなものは最初から無意味だ。オレは必ず殿下を見つけ出すと言っただろう。見つからなかった時の約束なんか守るつもりはない」

「そんなの……!」

結衣が反論しようとする、ロイドはそれを遮るように言葉を続けた。

「詭弁だというのか? おまえの方こそ考えが矛盾しているじゃないか。オレには絶対できると言っておきながら、なぜ、できなかった時の事にこだわるんだ。あれは単なる気休めで、本当のところはできないと知っているのか? 侮辱するな」

詭弁には間違いないが、ロイドの言う事はもっともで反論できない。結衣は項垂れて、もうひとつの疑問をぶつけた。

「好きになるなって、どういう意味?」

「そのままの意味だ」

また、はぐらかそうとしている。結衣は顔を上げて再び怒鳴った。「できるわけじゃないじゃない! 好きなんだもの! あなたはできるの? 言われたからって気持ちを換えられるの? 私に好かれて困るんなら、優しくしないでよ! 抱きしめないでよ! キスなんかしないでよ!」

「そんなの、オレの勝手だ」

怒ったようにそう言うと、ロイドはメガネを外しながら、片腕で結衣を強引に抱き寄せ、荒々しく口づけた。

「バカ！ 大嫌い！」

結衣はロイドを突き飛ばし、平手を振り下ろした。

パンと派手な音がして、結衣は目を見開いたまま硬直した。いつもならヒョイと軽くよけられるのに、まともにヒットしてしまったようだ。

ロイドは少し頬を撫でた後、メガネをかけ直し、結衣をまっすぐ見つめた。少し目を細め、口の端を片方持ち上げると、静かに言う。「それでいい」

そして背を向け、王子の部屋を出て行った。

結衣は呆然とロイドの背中を見送ると、よろよろと移動してソファに座りポツリとつぶやいた。

「見え見えなのよ。そんなんじゃ、益々好きになっちゃう」

ロイドはわざと結衣に嫌われようとしている。それは多分、結衣が克蘭ベールに未練を残さないように。

頑固者のロイドは何が何でも結衣を日本に帰すつもりだ。それならせめて、気持ちよく日本に帰れるように、なんとしても王子を見つけて出してほしい。

結衣は少し微笑んで、ソファの背もたれに留まった小鳥に話しかけた。

「余計な事するなって言われてるけど、考えるだけなら、かまわないわよね」

小鳥は結衣を見つめて、首を傾げる。

結衣は王宮内の怪現象や遺跡の事、王子失踪の事について考えてみる事にした。

その前に、三時のケーキを何にするか考えていなかった。

結衣は内線電話でクラーク氏に掃除の続きを頼むと、材料になりそうなものを確認するため、厨房へ向かった。

Last Kiss (2)

厨房から戻ると、部屋の掃除は終わっていた。結衣はソファに座ると腕を組み、厨房で聞いた話を思い出してみた。

厨房では三時のおやつにプリンの材料を確保した。一度作ってみたいと思っていたバケツプリンを、ロイドに食べさせるつもりだ。

そのついでに、以前ロイドから聞いた料理消失事件の詳細を、パルメに尋ねた。

ロイドが作ったという調理機械は、いわゆるオーブンレンジのようなもので、使う人間は厨房の中でも限られている。パルメと結衣とオーブン料理担当の調理師二名だ。

調理機械のある場所は、厨房内の仕切られたエリアで、出入り口はひとつしかなく、出入りする人間は厨房内から丸見えになっている。

オーブン料理は時間がかかるので、大概の者はタイマーをセットした後、他の事をするためにその場を離れる。しばらくの間、調理機械のエリアが無人になるのはよくある事だ。

しかし、パルメが言うには、料理が消えるようになって、機械の不調を見に来たロイド以外に、他の人間が出入りした事はないという。

出来上がったばかりのオーブン料理は、容器共々熱くて、素手では触れない。仮に誰かが持ち去ったとしても、ワゴンに乗せて運ぶしかないのですぐ目に付いたはずだ。

食事時以外でワゴンを使うのは結衣だけなので、気づかないわけではないのだ。

誰かが持ち去ったのではないとすると、他に考えられるのは、遺跡の装置のせいだろうか。

過去、遺跡の活動期には、物や人が消えたり現れたりしたと聞い

た。そう考えると、客室の幽霊もそれが原因かもしれない。

幽霊がいると言った女の子は、幽霊の姿は見えていない。浴室から点々と付いていた濡れた足跡というのは、見方を変えれば、無数の小さな水たまりという事になる。

遺跡の活動期のせいで、厨房からは料理が消え、客室には水たまりが現れたという事か。だが、何かがひっかかる。

結衣は頭を抱えてうなった。

「うーん。頭がごちゃごちゃしてきた」

紙に書いて整理しようと思い、部屋の中を見回したが、ハタと気づいて、ため息をついた。この部屋の物は勝手に触ってはいけない事になっている。

先ほどの事でお互い気まずいが、ここはロイドに頼むしかなさそうだ。結衣は立ち上がり、部屋を出ると研究室に向かった。

研究室の扉を開けると、ロイドとローザンが揃って振り向き、驚いたような表情をした。驚いている理由はそれぞれ違うのだろうが。ローザンが心配そうに声をかけた。

「ユイさん、寝てなくて大丈夫なんですか？」

「うん。もう平気。大したことないから」

結衣は苦笑して答える。元々仮病だ。

結衣は休憩コーナーの側まで行くと、物言いたげに見つめるロイドに頼んだ。

「ロイド、紙とペン貸して」

ロイドはプリンタから用紙を数枚抜き取り、机の上のペンを持って結衣の側までやって来た。それを手渡ししながら、無表情のまま尋ねる。

「文字の勉強でもするのか？」

「ありがとう」

受け取った紙とペンを机の上に置き椅子に座ると、結衣はロイドを見上げて言う。

「色々考えてみようと思って。王宮内の怪現象や、王子様の失踪の

事や、遺跡の事とか」

途端にロイドは不愉快そうに顔をしかめた。

「余計な事はするなと言っただろう」

「何もしないわ。考えるだけ。気になる事や知りたい事は、自分で動かず、あなたに訊くから。それならいいでしょ？」

ロイドは今ひとつ不満げな顔をしながらも、渋々承諾する。

「まあ、それならいいが……。本当に考えるだけにしとけよ」
「うん」

結衣は笑って頷くと、ついでに笑顔のままサラリと告げた。

「それと、さっき言った事撤回。大嫌いじゃなくて、好きだから」
「な、何を言い出すんだ、おまえは！」

ロイドが目を見開いて、思い切り動揺している。いつもなら額を叩かれるところだろうが、それすらも忘れているようだ。

「あーっ。そういう事だったんですか」

遠くから様子を窺っていたローザンが、突然大声を上げた。

「何が、そういう事だ」

ロイドが不愉快そうにローザンに尋ねる。ローザンはわざとらしく大きなため息をついて立ち上がると、出入り口に向かって歩き始めた。

「ユイさんのところから帰って、なんかロイドさんの機嫌が悪いと思ったら、やっぱりケンカしてたんですね。仲良すぎるのも目の毒ですけど、仲悪いのはもっと迷惑ですから、勘弁してくださいよ」

「こら待て。仲良すぎるって事はないだろう。どこへ行く」

扉の前で立ち止まったローザンは、微笑んで答えた。

「ちょっと医務室に行ってきます。ユイさんに鎮痛剤を処方しますので、三十分くらいで戻りますよ」

そう言ってローザンは研究室を出て行った。ロイドはローザンを見送ると、気まずそうに結衣を見下ろした。

「おまえが妙な事を言うから、あいつに変な気を使わせたじゃないか」

「妙な事じゃないわよ。本当の事だもの」

ロイドはひとつ嘆息すると、結衣の前の椅子を引き、横向きに座った。目を合わさないように、そっぽを向いたまま腕を組み、吐き捨てるように言う。

「ったく。とことんオレの言う事を聞かない奴だな」

「言ったじゃない、できないって。嫌いにはなれないわ。でも日本に帰らないとは言わないから安心して」

結衣の言葉に、ロイドが意外そうな表情で、こちらに視線を向けた。結衣はイタズラっぽい笑みを浮かべ、ロイドを上目遣いに見つめて言う。

「私が日本に帰らないって、駄々捏ねたら困るから、あんな事言っただんでしょ？」

「そんな風に考えていたのか」

ロイドは相変わらず、意外そうにしている。自分の考えが間違っていたのかと、少し不安になって、結衣は恐る恐る問いかけた。

「……違うの？」

ロイドは目を逸らすと、俯いてひとつ息をついた。

「いや、それもある」

「他にもあるの？」

問いかけるとロイドは、結衣を一瞥し、再び目を逸らして観念したように、とつとつと話し始めた。

「おまえはニッポンに帰った方がいい事はわかっている。おまえにはニッポンでの暮らしがあるし、両親や友人も向こうにいて、おまえを心配しているはずだ。元々オレが無理矢理、殿下の身代わりを押しつけたんだ。おまえには、ここに在る義理もない。まさかこんなに長引くとは思っていなかったし、事態がこんなに深刻化するとも思っていなかったから、オレも軽く考えていた。おかげで何度も危険な目に遭わせたし、おまえには悪い事をしたと思っている。だから、なんとしても無事にニッポンに帰そうと決めたんだ。なのに……」

ロイドはそこで一旦言葉を切ると、更に項垂れた。結衣が黙って待っていると、少しして大きく息をつき、再び話し始めた。

「最初、おまえには嫌われていると思っていた。殿下の身代わりを押しつけられてムツとしていたし、なにより最初のキスがマズかったしな。あの後おまえ、怯えてたし」

「……え……」

必死で隠していたつもりだったのに、全部ばれていたらしい。

ロイドは少し上向いて、中空を見つめたまま、しみじみと言う。

「言う事はさっぱり聞かないし、触れば怒って抵抗するし、相当嫌われていると思っていた。なのに嫌いじゃないと言われて、ちよつと調子に乗りすぎた」

そして結衣の方を向くと、何かが吹っ切れたような清々しい表情を見せた。

「おまえがニッポンに帰ると決めたなら大丈夫だ。それが歯止めになるだろう」

「歯止めって、何の？」

結衣が首を傾げると、ロイドは気まずそうに顔を背けた。

「オレ自身のだ。おまえをニッポンに帰すと決めたのに、おまえが連れて逃げてとか言うし。まあそれは、先にオレが余計な事を言ったからだろうが、その上好きだとか言うし。おまえが帰らないって言い出したら、決意が揺らいでしまいそうだったんだ。連れて逃げても、おまえを不幸にしかできないから、そうしないために、あの言葉は歯止めだった」

うっかり告白が、やはりロイドを追い詰めていたらしい。結衣は首をすくめてポツリと言う。

「ごめん。余計な事言って」

「いい。気にするな。元々オレは歯止めのきかない男だ。こんなに長期間、キス止まりなのは快挙だ」

平然と言い放つロイドに、結衣の顔は思わず引きつる。

「……え……エロ学者」

『エロガクシャ』

小鳥の復唱を聞いて、ロイドはすかさず机の向こうから、長い手を伸ばして結衣の額を叩いた。

「だから、音声多重で言うな。その言葉しか教えてないのか」

「そんな事ないわよ。最近は色々しゃべるのよ。結衣ちゃんかわい
いとか、ロイド好きとか」

その言葉にロイドがピクリと反応する。結衣は慌てて補足した。

「ロイドって、この子の事よ」

「わかってる」

そう言ってロイドは立ち上がり、結衣の横にやってきた。見上げる結衣の頬に手を添え、身を屈めて顔を覗き込んだ。そして、ニヤリと笑う。

「だが、今度何か言う時は覚悟しろよ。こっちの歯止めは外れかかっているからな」

そして、結衣の唇に軽く口づけると、元いたコンピュータの前に戻って行った。

結衣はロイドが触れた唇に指先を当てて、彼の背中を見つめた。
自然に頬が緩む。

せっかくロイドが忙しい時間を割いて、自分のためにマシンを改造してくれたのだ。それを無駄にしないためにも日本には帰ろうと思う。それなら、日本に帰るまでの十五日間、できるだけ楽しく過ごしたい。

ロイドの言う事を聞いて、彼を嫌いになって、ケンカ別れのような事はしたくなかった。

あの言葉の真意がわかり、ロイドが結衣を連れて逃げようと思った事もわかった。決定的な言葉を聞いたわけではないが、ロイドの想いの一端に触れて、舞い上がりそうなほど嬉しい。

それだけで、残り十五日間を楽しく過ごせそうな気がする。

結衣は思わずにやけてしまう頬を両手で押さえ、机の上の紙に視線を落とすと、ペンを取った。

すると、研究室の扉がノックされた。珍しくロイドが気づいて返事をする、扉が開きローザンが様子を窺うように顔をのぞかせた。「なんだ、おまえか。よそよそしい」

ローザンは笑顔で頭をかきながら部屋に入ると、後ろ手で扉を閉めた。

「いやあ、取り込み中だとマズイと思って」

「何を想像している。エロ医者め」

毒づくロイドに、ローザンはため息をつきながら、結衣の元に歩いてきた。

「あなたに言われたくありませんよ。はい、ユイさん。鎮痛剤です」

ローザンは笑顔で、白い小さな紙袋を結衣に差し出した。

「ありがとう」

結衣はそれを受け取り、中を覗いた。ハーブの甘い香りが鼻をつく。この香りはカモミール？ 見ると袋の中には丸いキャンディが三つ入っていた。

結衣が不思議そうにローザンを見上げると、彼は一層微笑んだ。

「ぼくはこれが、案外効くんですよ。特に、ここにね」

そう言って親指で自分の胸を指した。そして、こっそり結衣に耳打ちする。

「ロイドさんにいじめられた時、服用してください」

結衣がクスリと笑うと、向こうからロイドが怒鳴った。

「何をコソコソやっている。さっさと仕事に戻れ」

「はいはい。ちょっと話してただけで、そんなにヤキモチ焼かなくても……」

ローザンはブックサ言いながら、ロイドの側に戻る。待ち構えていたように、ロイドがローザンの額を叩いた。

「誰がヤキモチ焼いている」

二人は尚も言い争いながら席に着いて、それぞれの作業に戻った。結衣は机の上に視線を戻し、ペンを走らせる。とりあえず今、疑問に思っている事を箇条書きにしてみた。

王宮内

- ・料理の消失
- ・客室の幽霊
- ・王子の失踪
- ・王子の秘密
- ・私の出現
- ・東屋の石段を壊した犯人

遺跡

- ・どうやって活動期の間隔、三十年をカウントしているのか
- ・今回、活動期が早まったのはなぜか

王子の秘密については、さっぱり見当も付かないので、とりあえず置いておく事にする。

その他の王宮内の事件は、東屋の石段以外、遺跡の活動期のせいだとすれば、説明はつく。だが、どうして王宮内に集中して、物や人が消えたり現れたりしているのかは疑問だ。

王宮は遺跡から随分と離れている。結衣が知らないだけで、ラフルールの街でも怪現象は起きているのだろうか。これについては、ロイドに確認してみよう。

東屋の石段の件は、先日の誘拐未遂の黒幕が一枚噛んでいるかもしれない。だとしたら、犯人の特定は無理だろうが、ロイドは何か聞いているだろう。これも後で確かめてみよう。

問題なのは遺跡の方だ。これはある意味、東屋の石段以外、全てに関わっている。遺跡の謎が解ければ、全ての謎が解けるような気がした。

遺跡は三十年に一度、活動期を迎えると聞いた。この三十年を遺跡自体は、どうやって把握しているのだろうか。遺跡には謎の機械装

置があるというから、もしかしたらカウンタのような物が付いているのかもしれない。

では今回、活動期が早まったのはなぜだろう。カウンタが付いているのなら、早まる理由がわからない。全遺跡のカウンタが同時に誤動作を起こすなどありえないからだ。

カウンタではなく、何か自然のエネルギーをどこかに蓄積しているのかもしれない。そして、それが満杯になるのに三十年かかり、三十年に一度それを放出しているとすれば、自然現象や天変地異で活動期が早まるかもしれない。過去にも早まった事があるのか、確認してみなければならぬ。

だが、そうすると全世界規模の自然現象や天変地異が起きた事になる。遺跡は広大な克蘭ベール大陸の各地に点在しているのだ。結衣が現れた日に、そんな出来事があったのだろうか。

なんだか何もかも、ロイドに確かめなければならぬ。

すでに手詰まりとなってしまった結衣の脳裏に、ふと、ひとつの仮説が閃いた。そして、バラバラだった全てのピースがひとつに繋がる。

（もしかして、遺跡は――）

この仮説が正しいとすれば、全ての謎に説明がつく。

すぐにでもロイドに諸々の疑問を確認したいところだが、仕事の邪魔をするわけにはいかない。

結衣はもどかしい気持ちで、ロイドの休憩時間、昼休みを待つ事にした。

Last Kiss (3)

昼食後、すぐに研究室に行ってみると、ロイドはすでに作業を始めていた。忙しくしているので結局昼休みに話しかける事ができず、三時のお茶の時間はいつも慌ただしいので、結衣は夜、彼が部屋に戻るのを待つ事にした。

十時から一時間おきに、テラスに出ては隣の部屋の灯りを確かめる。やっと灯りが点いたのは、午前一時を過ぎた頃だった。

結衣はさっそく部屋の側まで行くと、外からガラス戸を叩いた。カーテンが開き、ロイドが驚いたような表情をしてガラス戸を開いた。

「まだ起きていたのか」

早く話が聞きたくて、ロイドの帰りを待ちわびていた結衣は、思い詰めたような表情をしていたのかもしれない。ガラス戸に縋って笑みを浮かべると、ロイドがいつものように冗談か本気か分からない事をいう。

「覚悟ができたのか？ こんな時間にオレの部屋に来るとは」

「違うわよ。訊きたい事があるの」

「ああ、今朝考えると言ってた事か」

「うん」

なんだか少し、ロイドが落胆したように見えたのは、気のせいだろうか。

「入るか？」

「え……いいの？」

「ちょっと、散らかってるけどな」

ロイドが脇に避けて、結衣を部屋に招き入れる。結衣は少しドキドキしながら部屋に入ると、ガラス戸を閉め、カーテンを引き、振り返って目が点になった。

ちよつとどころではない、その散らかりように思わず苦笑する。
王子の部屋のそれと同じくらいの広さがあるリビングの床には、
何だか分からない作りかけと思われる機械や、その部品、工具のた
ぐいが無造作に並べられ、足の踏み場もない状態になっている。

所々にぽっかりと穴が空いたように、何も置いてない空間がある。
おそらくロイドが座り込んでいた場所なのだろう。

「……ここ、研究室よりすごいんじゃない？」

結衣が呆れたように尋ねると、ロイドは床に散らばった部品や工
具を次々に拾い集めながら、壁際のソファまで通路を作った。

「むこうは仕事で、こっちは趣味だ」

そう言つて、ソファの上に広げられていた設計図を折りたたみ、
ローテーブルの上に置く。

結衣はロイドが作った通路を通つて、ソファの側までたどり着い
た。

ローテーブルの上も部品やネジがゴロゴロしている。

「そこで待ってろ。おまえ、酒は飲めるか？」

「うん。少しなら」

「じゃあ、少し付き合え。机の上の物は端に避けておいてくれ」

ロイドは白衣を脱いでソファの背もたれに引っかけると、床に散
らばった部品類を器用に避けながら、リビングから出て行つた。

結衣は言われた通り、机の上に転がった物を拾い集め、先ほどロ
イドが置いた設計図の上にまとめて置いた。

少ししてロイドが二つのグラスを持って戻つて来た。片方を結衣
に差し出し、彼は結衣の隣に腰を下ろした。

結衣は受け取ったグラスの中を覗き込む。甘い香りのする赤い酒
が入っていた。口を含むとジュースのように甘酸っぱい果実酒だっ
た。

「あ、これ、おいしい」

結衣が続けてもう一口飲むと、横からロイドが忠告した。

「アルコール度数は結構あるぞ。一気に飲むなよ」

ロイドはお酒も甘い物が好きなのだろうか、と思い、ふと見るとロイドのグラスには琥珀色の酒が入っていた。多分ウィスキーとかブランドーとかのようなものだろう。

「で？ 何が聞きたいんだ？ 酔っぱらう前に話しとけよ」
「うん」

結衣はグラスを机の上に置くと、朝疑問に思った事を順番に尋ねた。

まずは東屋の石段を壊した犯人。これは予想通り分かっていないという。

先日誘拐未遂犯の青年も、知らないと言ったらしい。元々彼は王子を連れて行く事だけを、セギール侯爵の使いの者から頼まれていたという。何のために連れて行くのかさえ、聞かされていないかったらしい。

彼の記憶から映像化されたセギール侯爵の使いは、侯爵の関係者の中にはいなかった。もっとも、脳の記憶している映像そのものが不確かなので、似顔絵を描かせたり、風体を口で語らせるよりは、分かりやすいという程度の信頼性しかないのだが。

次に物体消失や出現の怪現象。王宮以外にラフルールの街でも何か起きているのか。

ロイドは何も聞いていないという。ただ、小さな物が一つや二つなくなっただくらいでは、騒ぎにならないだろうから、全く起きてないかどうかはわからない。

この件については、王宮内に住んでいるロイドより、街から通っている使用人たちの方が、確かな情報を持っているだろう。

そして一番聞きたかった遺跡の事。ロイドは何度か遺跡の調査に同行し、実際に遺跡の装置を間近で見て、詳しく調べている。これについては他の事より、かなり有益な情報が得られそうだ。

まずは遺跡の装置にカウンタが付いているのかどうか尋ねてみた。そんなものはないとロイドは言う。操作パネルも何もないので、どうやって作動や停止をさせるのかもわからないらしい。

結衣は心中で密かに、ほくそ笑む。自分の仮説が少し信憑性を帯びてきた。

次に過去、活動期の間隔三十年が狂った事があるのか訊いた。暦の関係で、多少ずれた事はあるが、記録に残っている限りで、狂った事は一度もないらしい。

前回の活動期が二十七年前だということで、今回は三年早まった事になる。

それを聞いて、結衣はふと思い出した。

「二十七年前って確か、あなたが遺跡で拾われた時じゃなかったわけ？」

「ああ」

その時、散々捜したがロイドの両親は見つからなかったと聞いた。「もしかしてあなた、どこか異世界から来たんじゃないの?!」

結衣が興奮して尋ねると、ロイドは他人事のように平然と言う。

「そうかもしれないって、この間ブラーヌが言ってたな」

「なんで、そんな平然としてるのよ」

結衣が苛々して言うと、ロイドは相変わらず平然と返す。

「元の世界も親も記憶にないんだ。どうだっていい」

「よくないわよ。ご両親はきっと捜してるはずよ」

「二十七年も経ってるんだぞ。きっと、もう死んだと思って忘れてるさ」

「忘れるわけじゃないじゃない、自分の子供の事を！ 親なんだもの！」

結衣がロイドのひざを叩いて強く言うと、彼が少しひるんだ。

「そうか？」

そして、少し俯いて自嘲気味に笑う。

「そういうもんなのか。オレは親と暮らした事がないから、親の気持ちにはわからない」

「ブラーヌさんは？」

途端にロイドは顔をしかめる。

「あいつは一般的な親とは、かけ離れているからな。寝床と食べ物

と学問を与えてくれた事には感謝しているが、お互い共同生活者のようなもんだ。共同生活すら稀だけどな」

「抱きしめられた事ないの？」

「記憶にない」

「どうやらブラーヌも相当な変わり者のようだ。なぜロイドを引き取ったのか、直接聞いてみたい。」

「あんな変わり者に幼児期を育てられて、よくも真っ直ぐに育ったものだとも自分で感心する」

「……え……」

確かに、ひねたり、ダークサイドに墜ちたりしてはいないが、あなたも充分変わり者だから、とは言わずにおいた。

「案外、オレもニッポンから来たのかもな」

「楽しそうに問いかけるロイドに、結衣は軽いため息をつく。」

「それはないと思うわ。あなたはどうか見たって日本人じゃないもの」
「厳密に言えば、日本から来た可能性はなくてもないが、日本人である可能性は極めて低い。」

「結衣は自分の髪をつまんで、ロイドに見せた。」

「日本人は私みたいに、黒い髪で黒い目なの。あなたの容姿は地球上だと、ヨーロッパあたりじゃないかしら」

「ふーん。国ごとに髪や目の色が決まってるとは、変わってるな」
「そういうわけではないが、説明すると長くなりそうなので、止めておいた。いつか機会があれば説明しよう。」

「ロイドがもしも、地球上のどこから克蘭ベールにやって来たのなら、二十七年前の事件記事に記録が残っているかもしれない。日本に帰ったら調べてみよう。」

「いつかまた、克蘭ベールに来ることがあるなら、その時に教えてあげたい。」

「結衣はひと息つくと、気持ちを切り替えて最後の質問をぶつけた。」

「じゃあ、これで最後。私が克蘭ベールに来た日に、世界規模の気候変動や天変地異があった？」

「ない」

ロイドの答えを聞いて、結衣の口元は思わず緩んだ。自分の立てた仮説がいよいよ正しいものに思えて仕方ない。

結衣はうかれて、机の上のグラスを取ると、果実酒をグビグビあおった。

横からロイドが慌ててグラスを取り上げる。

「おい、一気に飲むなど言っただろう。何か分かったのか？」

ロイドの問いかけに結衣は、待ってましたとばかりに彼を見据えて言う。

「結論から言うわ。王宮にもう一つ遺跡があるのよ」

「はぁ？」

ロイドは面食らって目を見開いた。

Last Kiss (4)

結衣は続けて自分の仮説を披露する。

携帯電話やロイドは遺跡に現れたのに、遺跡から遠く離れた王宮で、人や物が消えたり現れたりするのは不自然だ。だが、王宮に遺跡があるなら、説明が付く。

そして、自然エネルギーによる稼働スイッチがあるなら、過去一度も周期が狂っていないわけがない。第一、全世界規模の気候変動や天変地異がないなら、一斉に全遺跡の周期が狂う事自体おかしい。ということは、全遺跡を制御している装置がどこにあるはずだ。

現存する遺跡にカウンタも操作パネルもないとすると、未知の遺跡がその機能を持っている可能性が高い。王宮に遺跡があるなら、それがメイン制御装置なのだ。

「オレはここに住んで、かなりになるが、そんなものは見た事も聞いた事もないぞ」

結衣の途方もない仮説に、ロイドはまだ半信半疑の様子だ。

「地下にあると思うの」

「地下には霊廟があるだけだ」

「だから、もっと地下。東屋の下に古い穴が空いてるって言ってたじゃない」

「ああ、なるほど!」

ロイドがやっと納得した。

「私、あの石段は王子様が壊したんじゃないかと思うの」

東屋によく行っていた王子は、たまたま石段を踏み抜き、地下の遺跡を見つけたのではないだろうか。そして、穴が見つからないように元通りに戻しておいたのだ。今回、遺跡の活動期が早まったのは、王子が遺跡の操作パネルを触ってしまったためだろう。そして本人はそのまま異世界に飛ばされたのかもしれない。

「殿下は好奇心旺盛だからな。充分あり得る話だ」

「あの穴、もう塞いじゃったの？」

「いや、おまえを巡って物騒な事件が続いたから、王宮の出入りが厳しく制限されている。信頼の置ける業者が、今手が取れないとかで、立ち入り禁止で放置されたままだ。さっそく、明日調べてみよう」

「私も行っている？」

危険だと反対されるかと思いつながら、恐る恐る尋ねると、意外にもロイドは微笑んで、結衣の頭を撫でた。

「ああ。おまえの仮説だ。自分で立証して見せろ。それに、遺跡が見たいと言ってたじゃないか」

「うん。楽しみ」

結衣は嬉しくなって微笑み返した。

長い説明を終えてホッとしたからか、急に酔いが回ってきた。目の焦点が合わず、すぐそこにいるはずのロイドが近付いたり遠退いたりしているように見える。

幻を見ているような気がして、結衣は手を伸ばした。手の平がロイドの頬に触れ、ホッとした。

この頬に触れるのは二度目だ。朝、思い切り、ひっぱたいてしまった。

「痛かった？」

問いかけるとロイドは少し笑って、結衣の手に自分の手を重ねた。

「ああ。おまえに嫌われるのが、あんなに痛いとは思わなかった」

「ごめんね」

「いい。自業自得だ」

囁くようにそう言うと、ロイドはメガネを外した。合図を受けて、結衣は静かに目を閉じる。

視界が塞がれ一瞬クラッとした直後、抱き寄せられ唇も塞がれた。優しく甘く小刻みに繰り返されるキスに、結衣の鼓動は次第に早くなり、益々頭がクラクラする。

身体が傾き始め、結衣はロイドの背中に腕を回してしがみついた。結衣を抱きしめたまま口づけながら、ロイドはソファに倒れ込んだ。急に体勢が変わり、更に酔いが回って、結衣の頭の中はぐるぐる回り始める。

結衣の頬を両手で包み込み、ロイドのキスは徐々に激しく変わっていく。

アルコールの酔いとロイドのぬくもりの相乗効果で、ふわふわと気持ちよくなってきた結衣は、急速に微睡みの淵に滑り落ちていった。

突然、額に衝撃を感じ、結衣はぱちりと目を開いた。

ソファに横たわる自分の両脇に手について、少し怒ったような顔をしたロイドが見下ろしていた。

「起きろ」

そう言って、もう一度結衣の額を叩くと、ロイドは身体を起こし、ソファの背にもたれ腕を組んだ。

「私、寝ちゃったの？」

結衣が、のろのろと起き上がり尋ねると、ロイドはふてくされたような表情で、吐き捨てるように言う。

「ったく。急に力が抜けたと思ったら……。寝るか？ 普通、このシチュエーションで」

ロイドが何を怒っているのかよく分からないが、一応言い訳してみる。

「私、お酒飲んだら眠くなるのよ」

「だから一気に飲むと言ったんだ。もう、おまえには酒は飲ませない」

「ごめん……」

俯いて、ふとベストのボタンが二つはずれている事に気がついた。結衣は目を細くすると、探るようにロイドを見つめる。

「何しようとしてたの？」

「訊くな」

「触ったの？」

結衣が問い詰めると、ロイドはチラリと結衣を一瞥し、白状した。
「……肋の数を数えているような錯覚に陥った。かなり手強いな。
たとえば、ひと月で三倍になったとしても、成果が目に見えないかもしれない。せめて、さらに倍くらいにはならないと……」

「断りもなく触ったのね?!」

叫ぶように非難する結衣に、ロイドは驚いて反論する。

「って、気付いてなかったのか？ その方が問題だろう。まったく、緊張感のない奴だな」

「もう！ 油断も隙もあつたもんじゃないんだから、このエロ学者！」

ブツクサ言いながらベストのボタンを留める結衣に、組んだ足のひざで頬杖をつきながらロイドが言い返す。

「油断も隙もありすぎる奴が何を言う」

「だいたい、王子様が見つかったらって約束でしょ？ あなたが自分で言ったんじゃない」

「ちっ！ そういえば、そんな事言っただけな。仕方ない。おあずけにしといてやる」

結衣がホッとひと息つくと、強引に身体を引き寄せられた。

「そのかわり、毎日思う存分キスしてやるからな」

「思う存分って、どのくらい？」

「オレの気が済むまでだ」

「……え……」

ようするに時間無制限。想像すると、再び頭がクラクラした。

ロイドは結衣から手を離すと、背中を軽く叩いた。

「目が覚めたなら、さっさと部屋に戻って寝ろ。でなきゃ、約束無視して真剣に襲うぞ」

「うん。帰る」

結衣は立ち上がると、まだ少しフラつく頭をコツンと叩いて、テラスへ向かった。ガラス戸を開き、振り返って尋ねる。

「明日、いつ探検に行くの？」

「十四時に同期が来るから、その後だ。勝手にひとりで行くなよ」
「うん。おやすみ」

「おやすみ」

ロイドの挨拶を聞いて、結衣はガラス戸を閉め、テラスから王子の部屋に向かう。途中立ち止まり俯いた。

明日は自分の仮説を立証するため、地下の遺跡を探しに行く。

本当はそんな事を気にかけている場合ではないのに、自分の胸を見つめて思わずため息が漏れた。

「あと、ほんの少しでいいから、胸が大きかったらなあ……」

^{ぎょうが}仰臥すると、真っ平らになってしまう自分の胸が恨めしかった。

Last Kiss (5)

翌日十四時の異世界検索は、またしても失敗に終わった。ロイドはとりあえず検証を後回しにして、ローザンに研究室の留守番を頼むと、結衣と共に東屋に向かった。

誘拐されそうになって以来、ロイドの研究室に入り浸っていた結衣は、建物の外に出るのは本当に久しぶりだった。

庭園の外れの緑のトンネルを抜けると、白い石造りの東屋が見えた。

ここに来たのは随分昔のような気がして、結衣は何か懐かしさを覚えた。

以前と違っているのは、東屋の周りを囲むようにロープが張られ、文字の書いた立て札が立っている事だ。「危険」とか「立ち入り禁止」とか書いてあるのだろう。

懐かしさと共に記憶が蘇る。

あの時、自分だけドキドキしているのが悔しくて、ロイドに八つ当たりしたのだ。ロイドはそれを結衣に嫌われているからと思いついで、ふてくされていた。

お互い勘違いしていたのが、今となってはおかしくて、結衣は思わずクスリと笑った。

その様子を訝って、横からロイドが尋ねた。

「何だ？」

「前に、ここから帰る時あなたが、ふてくされてたのを思い出したの」

結衣が笑って答えると、ロイドは不愉快そうに結衣の額を叩いた。

「余計な事を思い出すな」

そう言って顔を背けたロイドの表情が、あの時と同じように少しふてくされているのがおかしくて、結衣は益々笑ってしまう。

「笑うな！」

ロイドはムキになって叫ぶと、再び結衣の額を叩いた。

「だって、おかしいんだもん。ローザンも言ってたけど、あなたって、いつもは自信満々で冷静なのに、時々子供っぽいのよね」

「あいつ、余計な事を……」

小さく舌打ちして、ロイドは顔をしかめる。そして、結衣の腕を掴んで引き寄せた。腕の中に結衣を捕まえて、メガネを外しながら意地悪な笑みを浮かべる。

「おまえもだ。余計な事ばかり言ってる口は塞いでやる。今日のノルマはまだ果たしてないしな」

結衣は慌てて、近付いてくるロイドのあごを手で押さえて、顔を背けた。

「ダメ！ そんなノルマは後回しよ。地下の探検の方が先決でしょ？」

途端にロイドは動きを止め、結衣を放すとメガネをかけ直した。

「それもそうだな。地下の方が邪魔が入らなくていい」

「だから、そうじゃなくて……」

ガツクリと肩を落とす結衣の背中を叩くと、ロイドは先に立って歩き始めた。

「ほら、行くぞ」

結衣は気を取り直して、その後を追う。

東屋の裏手に回り、ロープを跨いで石段を上がると、表側に空いた穴の側までやって来た。

以前は余裕がなくて何も見ていなかったが、中を覗くと確かにそんなに深い穴ではない。底には石段を構成していた白い石のブロックがいくつも転がっていた。

穴の入口は人ひとりが、スッポリ嵌るくらいの大きさで、結衣なら余裕だが、ロイドには少し狭いようだ。ロイドもそれに気付いたらしく、穴の周りの石段を踵で踏み抜き、入口を広げた。

案外あっけなく石段が崩れたのを見て、返す返すもあの時、ロイ

ドが裏側から上がってきたのは英断だったと感心する。

ロイドは早速、穴の中に下りた。穴の深さは、丁度ロイドの頭が隠れるくらいだとわかった。結衣も穴の縁に座り、ロイドに手を貸して貰って、穴の中に下りた。

穴の中には、王宮の方に向かって横穴が穿たれている。

ロイドは白衣のポケットからペンライトを取り出し、横穴の奥を照らした。少し先で横穴は、垂直な壁に突き当たっていた。

まさか仮説が見間違いだったのかと、結衣がガツカリしていると、ロイドがライトを少し動かして、突き当たりの壁の下に、穴が続いている事を発見した。

「先がありそうだな。行ってみるか」

「うん」

「足元氣をつけろよ」

ロイドは結衣の手を握り、先に向かってゆっくり進み始めた。

少し天井の低い横穴を、背の高い二人は身を屈めてゆっくり進む。やがて突き当たりにたどり着き、ロイドがライトで下を照らした。

壁の下には、更に地下へと続く狭い石段が、暗闇の中に消えていた。

「明らかに人工物だ。おまえの仮説が、いよいよ信憑性を帯びてきたな」

そう言って振り返ったロイドは、宝物を見つけた少年のように目を輝かせていた。自分もわくわくしてきたが、それ以上にロイドの方が冒険に胸を躍らせているようで、結衣はなんだか楽しくなってきた。

古い石段はいつ崩落するとも限らない。ロイドは一段ごとに足元を確認しながら慎重に下りていく。

少し下りたところで石段は終わり、通路は右に折れ曲がっていた。そのまま真っ直ぐ進むと、突き当たりから更に下へ石段が続いていた。

結衣がロイドの後ろから覗き込むと、石段の終わりが見えていた。

床が青白い光に照らされている。

「灯りが点いてる。誰かいるの？」

結衣が尋ねると、ロイドは石段を下りながら答えた。

「いや、おそらく遺跡だ。遺跡の装置は常に青白く光っている」

「本当？　じゃあ、この下に……！」

ロイドは立ち止まり振り返ると、興奮した結衣の頭をひと撫でした。

「自分の目で確かめろ。行くぞ」

はやる気持ちを抑えつつ、ロイドの後について、ゆっくりと慎重に石段を進む。そして石段の終わりにたどり着いた。

下りてきた石段の通路から一步踏み出すと、そこには青白い光に包まれた、広大な空間が広がっていた。

結衣は息を飲んで、周りを見渡す。

天井の高さは二メートルくらいだろうか。ロイドの頭より少し高いくらいだ。広大な空間には不思議な模様の刻まれた直径一メートルくらいの太い円柱が林立し天井を支えている他は、見渡す限り何もない。結衣はまるで海の底の古代神殿にでもいるような、不思議な感覚を覚えた。

柱の他に唯一あるのは、先ほど下りてきた通路の左側に当たる場所に、青白い光を放つ謎の機械装置だけだ。モーターの回るような、低く静かにうなる音が周りに満ちている。

謎の機械装置は五十センチほどの高さの、直径二メートルはある大きな円盤状の台座の中心に、広間にあるのと同じくらいの太さの円柱が立っている。

台座の上には中央の円柱を囲むように、間隔がまちまちな年輪を思わせる同心円の溝が刻まれ、不規則に青白い光が明滅していた。

中央の柱には迷路のような模様が刻まれ、その迷路をたどるように青白い光が素早く行き来している。

装置から二メートルくらい間隔を置いて、装置を取り囲むように壁が丸く挟られている。その壁の一部にボタンやレバーの並ぶ操作

パネルのような物があつた。ロイドは早速そこへ歩み寄る。

「これが遺跡の装置なの？」

結衣は円柱を眺めながら、ゆっくりとロイドの側まで歩いた。

ロイドは操作パネルの上や、周りに刻まれた模様を、触らないように指先でなぞりながら、こちらに見向きもしないまま「ああ」と短く答えた。

よく見ると、壁には一面不思議な模様が刻まれている。文字のようにも見えるが、結衣の知っているクランベールの文字とは違うようだ。

壁に刻まれた模様を興味深く眺めていると、突然ロイドがこちらを向いて結衣を抱きしめた。

結衣が驚いて小さな悲鳴を上げたが、ロイドはかまわず興奮したように言う。

「すごいぞ、ユイ！ おまえの言った通りだ。この遺跡は、おそらくメイン制御装置だ」

「他の遺跡とは違うの？」

「ああ。第一、天井が抜けてない」

ロイドは結衣から離れて、円柱の上の天井を指差した。

他の遺跡の装置は、目の前にある物より、柱も円盤も一回り小さいという。そして、装置の真上の天井には丸い穴があり、空が見えている。その穴から、時々天に向かって光を放っているのだ。

当然操作パネルなどないし、壁には文字が刻まれていない。そのため、装置が何なのか分からなかったのだ。

「これ、やっぱり文字なの？」

「古代文字だ。オレにはほとんど分からない。ブラーヌに解読して貰おう。あいつ、まだ家にいるかな。しばらく資料の整理をするとは言っていたが……」

独り言のようにつぶやきながら、ロイドはポケットを探り通信機を取り出した。片割れをローザンに渡してある黒い方だ。それを眺めて、ロイドは小さく舌打ちした。

「やはり地下じゃ通じないか……。仕方ない。一旦上へ出て、ローザンにブラーヌを足止めして貰おう」

結衣は少し驚いて、奥の方を指差した。

「先に奥を調べないの？ あ、もしかしてブラーヌさんしか古代文字を読めないとか？」

「いや、そうじゃないが。こんな大発見、遺跡が大好きなあいつに、真っ先に知らせてやりたいじゃないか」

当然の事のように胸を張って言うロイドに、結衣は思わず微笑んだ。

変わり者だとか、親じゃないとか言っていたが、ロイドの中でブラーヌは、やはり特別な存在のようだ。

「うん、そうね。きつと、すごく驚くわよ」

笑顔で答えて、結衣はロイドと共に先ほど下りてきた通路に向かって歩き始めた。

通路に入る間際、名残惜しそうに遺跡の奥に視線を向ける。すると、装置の光が届かない奥の薄暗がりで、何かが素早く横切るのが見えた。

結衣は咄嗟に、すでに通路に入っていたロイドの白衣を引っ張った。

「ロイド、何かいる！」

「何？ どこだ？」

ロイドは通路から出てきて、結衣の横に並んだ。結衣は奥の方を見つめたまま指差す。

「そこから三つめの柱の影を何かが横切ったの」

「人か？」

「わかんない」

二人で黙ったまま、しばらくの間奥の暗がりを凝視していると、件の柱の影から何かがこちらに向かって飛んできた。

近付くにつれて姿が露わになってきたそれは、手の平ほどもある大きな昆虫だった。

ブーンと低く響く羽音に恐怖を感じた結衣が、逃れようと横を向いた時、飛んできた昆虫が腕に留まった。

腕に掴まる昆虫の細い足の感触に、全身総毛立った結衣は、半狂乱で叫びながらロイドにしがみついた。

「いやーっ！ でっかい虫ーっ！ 取って、取って！」

ロイドは腕から昆虫を引きはがすと、結衣の背中をポンポン叩いた。

「落ち着け。ロボットだ」

「え？」

結衣は顔を上げて、ロイドの捕まえた昆虫に視線を移した。

モゾモゾと動いている六本の足は、確かに金属製だ。丸くて赤い背中、テントウムシだろうか。地下にいる虫には見えない。

結衣は納得してロイドから離れると、大きく安堵の息をついた。

「びっくりした。遺跡には謎の装置だけじゃなくて、ロボット虫もいるの？」

揶揄するように結衣が尋ねると、ロイドは真顔で答えた。

「いや。これは以前オレが殿下に差し上げた物だ」

「え？ 昆虫ロボットって、部屋にある奴以外にもあったの？」

「ああ。いくつか差し上げた。こいつはその内のひとつだ」

「じゃあ、王子様は、やっぱりここに来たのね」

「そのようだな。おまえの仮説は、ほぼ立証されたって事だ」

それを聞いて結衣は、棚上げにしていた最後の謎の答えを思い付いた。

「ねえ。もしかして、王子様がフィオナに教えるって言った秘密って、この遺跡の事じゃないの？」

ロイドは昆虫ロボットの腹を探り、スイッチを切るとポケットに収めた。

「目に見えるもので、見たら驚くものだったな。確かにこの遺跡はその通りだが、東屋の下の入口は、おまえが踏み抜くまで塞がれていた。それに、あそこからフィオナ様を案内するのは、ちょっと酷

だぞ」

「そうよねえ。ドレスを着たお姫様をエスコートする場所じゃないわよね。やっぱり、この奥を調べてみる必要があるわ。もしかしたら別の出入口があるかもしれないし」

「ああ。さっさとローザンに連絡を取って、この奥を調べてみよう」
「うん」

結衣は改めて、ロイドと共に先ほど下りてきた石段を急いで引き返した。

Last Kiss (6)

真夜中のテラスで、結衣は手すりに縋って街の外の遺跡を見つめていた。

眼下に広がるラフルールの街は、人々も寝静まっているせいか、家々の明かりも街灯も疎らで、以前よりも薄暗い。

ロイドの報告を受けた王が、克蘭ベール全土に遺跡が活動期に入っている事を告げた。そのため、現在遺跡の周りは立ち入り禁止になっている。

活動期にラフルールの遺跡は一時間置きに光を発する。そして三日置きに二十時とその翌々日の深夜二時に、同期を迎えて一際派手に光る事が知られ、街の人々はそれを見物するのを楽しみにしていた。

そこで、町中からでも遺跡の光がよく見えるように、現在は街灯が普段の三分の一しか灯っていない。

しばらくの間結衣は、やわらかな夜風に髪を遊ばせながら、ぼんやりとラフルールの遺跡の方角を眺めていた。

日本では真夏が一番蒸し暑い季節だったが、克蘭ベールは随分過ごしやすい。ちょうど梅雨に入る前の一番爽やかな頃の気候に似ていた。

克蘭ベールは一年を通して、ずっとこんな感じだという。寒暖の差がほとんどないらしい。快適なのはいいが、四季がないのは少し退屈かもしれないと結衣は思った。

やがて時が来て、結衣の見つめるラフルールの遺跡が光を放ち、すぐに消えた。何度見ても不思議な光景だ。

次に光るのは一時間先だが、結衣はそのまま手すりに縋って、ぼんやり外を眺め続けた。

「ユイ」

突然背後から名前を呼ばれ、結衣は笑顔で振り返る。仕事を終えたロイドが部屋に戻ってきたのだ。

彼はテラスに出ると、真っ直ぐ結衣の元にやって来る。結衣も歩み寄ると、互いに抱きしめ合った。

ロイドは早速メガネを外すと、宣言通り思う存分キスをする。

これがあの日以来、毎夜の恒例行事となっていた。

エロ学者のくせに、キス以上の行為に及ぶ事はなかった。頑固なロイドは、王子が見つかったらという約束を頑なに守るつもりらしい。そしてそれは、彼が王子の搜索を諦めていないという証だ。

地下の探検からすでに十日が経っていた。依然として王子は見つかっていない。

王宮地下の遺跡には、予想通り別の出入口が存在した。遺跡の奥にあるその出入口は、霊廟にある棺の中に通じていた。

ロイドが王に報告し尋ねたところ、王は遺跡の事も霊廟の抜け道も、先代から聞かされてはいなかったらしい。先代も知っていたかどうか不明だ。

ローザンが足止めし、ロイドの連絡を受けたブラーヌが、翌日から地下遺跡の調査にやってきた。

あと少し連絡が遅れていれば、ブラーヌは旅に出てしまうところだったというので、奥を調べる前にローザンに連絡して正解だったと言える。

ブラーヌは調査にやってきてから、ずっと地下遺跡内にいる。王が客室を用意してくれたが、いつでも好きなように調査がしたいという理由で、寝袋を持ち込んで遺跡内に寝泊まりしている。

言い聞かせておいても時間を忘れて没頭するので、食事と同期の時には、ロイドが連れ出しに行っていた。

調査中のブラーヌは、他の事には上の空なので、結衣も正体を明かさず王子として接している。

結衣はブラーヌと、ほとんど話した事はないが、彼は外見から変わり者の匂いを漂わせていた。

白髪交じりの赤茶色の髪はいつもボサボサで、顔には無精ひげを生やしている。ロイドと同じくらい長身だが、ロイドよりかなり痩せていた。

いつも着古したヨレヨレのシャツと作業着のようなズボンの上に、作業着のような上着を羽織り、年季の入ったトレッキングシューズを履いている。他の服を着ているのを見た事がない。

同期時に研究室に連れてこられ、所在なげにブーツと立ち尽くしている姿は、枯れ木が立っているようだ。

明るい茶色の瞳は、いつもトロンと眠そうで、どこを見ているんだか、ぼんやりしている。ところが遺跡の事を語り始めると、見違えるほど輝き始める。そんなところは、ロイドとよく似ていると結衣は思った。

ブラーヌの調査の結果、地下遺跡の装置は、やはり全遺跡のメイン制御装置である事が判明した。

これでいつでも活動期を引き起こす事ができると思ったら、そんなに都合よくは行かないようだ。

機械には疎いブラーヌが、ロイドと協力して装置を調べた結果、操作パネルには様々な機能が集約されている事がわかった。

全遺跡同時作動スイッチと各遺跡の個別作動停止スイッチに三十年と三十日を数えるカウンタ、そして各遺跡ごとのエネルギー残量を示す計器が備えられていた。

何が稼働エネルギーになっているのかは、もう少し詳しく調べてみなければ分からない。だが、計器の示す残量はあとわずかとなっている。

ロイドが計測したところ、同期後に急激に残量が減る事が分かった。彼の見解では、遺跡は三十年かけて何らかのエネルギーを蓄積し、活動期にそれを放出している。今回、三年早まったせいで、三十日間丸々活動できるか怪しいらしい。

三十年という期間は、百パーセントのエネルギーを溜めるには余裕を持たせているはずだが、二十七年で百パーセントかどうかは微

妙だという。

機械とはそういうものらしい。必要な性能より、限界値は多めに作られているのだ。

制限速度が百キロと法律で定められていても、百キロ位下のスピードしか出ない車はないのと同じ事のようにだ。

残量と同期時に使用されるエネルギー量を元にロイドが計算した結果、活動期は一日短くなる可能性があるという。

ということは、同期が起こる回数は残り三回。最後の一回は結衣が日本に帰るために使われるので、異世界を検索できるのは、あと二回だ。

人捜しマシンは全世界の検索にかかる時間が、一秒を切るまでに処理の高速化が成功していた。同期の十秒間は、ほとんど異世界の検索に使われている。

終了サインは出るようになったが、王子を見つける事はできていない。

ロイドは検索条件を変更しながら、検索を繰り返していた。

内心は焦って苛ついているに違いない。けれどロイドは、普段と変わらない様子で、ブラーナの世話を焼いたり、結衣のケーキを食べながらローザンと談笑したりしている。

地下遺跡の発見はロイドの負担を増やしただけで、王子の捜索には何のメリットもない。結衣は余計な事をしてしまったようで、ロイドに申し訳なく思っていた。

毎夜キスを堪能した後も、ロイドは結衣を抱きしめたまま放さない。そして少しの間、他愛のない話をした後、それぞれの部屋に戻る。

刻一刻と終わりの日が近付くにつれて結衣は、部屋に戻りひとりになった時の寂しさが、次第に大きくなってきた。

ここ二、三日は必ず涙が溢れ出す。

少しでも長くロイドと一緒にいたい。もっとロイドと話がしたい。もっとロイドと触れ合いたい。そして何より、ロイドと別れたくな

い。

でもそれを口に出せば、またロイドを追い詰めてしまう。彼が平然としているように見えるのは、きっと歯止めのせいだろう。

本当のところ結衣は、ロイドが求めるなら応じる覚悟はとっくに出来ていた。

このまま日本に帰って、二度とロイドに会えなくなったとしても、彼以上に誰かを好きになれるとは思えなかったからだ。

その内、しびれを切らした親や親戚の薦めで見合いでもして、特に嫌いじゃなければ妥協して結婚し、それなりに幸せな家庭でも築くのだろう。妙にリアルにそんな事を考えていた。

だとしたら、せめて「初めて」は、自分が心底好きになった人に捧げたい。

「ロイド……」

ソファに座って、静かに泣きじゃくる結衣のひざに、小鳥が舞い降りてピツと返事をした。

結衣は泣き止み、小鳥を見つめた。

「あなたとも、もうすぐお別れね」

『ユイチャン、カワイイ』

慰めてくれているような気がして、結衣は小鳥を手の平に乗せて頭を撫でた。

小鳥は、日本にはあり得ないクランベールの科学技術で作られている。連れて帰るわけにはいかない。

結衣は小鳥のくちばしにキスをして電源を切ると、隅の机の上に置いた。そして、部屋の灯りを消し、寝室に向かった。

翌朝、結衣は三時のケーキの材料を厨房で確保した後、研究室に入った。

今日は二十時に同期が起きるので、ローザンはそれに合わせて昼

前頃にならないとやって来ない。研究室にはロイドがひとりでいた。挨拶を交わした後、結衣は給湯コーナーに向かう。

時間的に余裕もないので、結衣はロイドの邪魔をしないように、休憩時間以外はなるべく話しかけないようにしていた。

だが、少し前から気になって仕方のない事が、頭の中で日増しに膨らみ、どうしても訊いてみたくなった。

お茶の時間には少し早いが、そのためにお茶を淹れる事にした。

お茶を運んで声をかけると、ロイドが壁の時計を眺めながらやって来た。

「今日は少し早いな」

「うん。ちょっと気になる事があって……」

二人は机を挟んで、向かい合わせの席に着いた。

「なんだ？」

ロイドがいつもの激甘茶をすすりながら尋ねる。結衣は身を乗り出して問いかけた。

「あの人捜しマシンって、毎回、王宮内も検索してるの？」

結衣の仮説で立証されたのは、遺跡に関する事だけだ。他の事は推測の域を出ていない。特に王子の行方については、一番当てにならない。

これだけ何度も、異世界まで捜しているのに、見つからないのはおかしい。

以前ロイドは一笑に付したが、王子は王宮内にいるような気がしてならない。

あの時ロイドは、王宮内は捜索隊が地下の霊廟に至るまで隈無く捜索し、王宮外はロイドのマシンが捜していると言った。

ロイドのマシンは王宮外しか捜索できないのではないか？ もしもその時、王子が地下遺跡にいたのなら、捜索の網から漏れているのだ。

だがロイドの答えは、結衣の期待を大きく裏切る。

「あの時は確かに検索範囲に限定があったから、王宮外しか捜索し

ていなかったが、今は限定解除されている。全域検索対象だ」

「じゃあ、どうして私のいた場所の座標が記録に残っているの？」

「おまえの座標は、王宮内でも王宮外でもないからだ。転送したのはオレのマシンじゃないし」

「そっか……」

結衣はガックリ肩を落として、大きくため息をついた。

「じゃあ、もしかして毎回、私がヒットしてるの？」

「いや。検索はしているが、王宮内の検索結果は無視するようにプログラムしてある」

「どうして？ それじゃ検索していないのと同じじゃない」

ロイドは渋い表情をする。

「転送機能オンにしたら、ヒットするたびに転送確認が入って、検索が中断されるんだ。毎回おまえがヒットして中断したら、十秒以内に終わらない。そのためだ。だが確かに盲点ではあるな。転送なしで検索だけ、してみる価値はある」

「今から？」

結衣が嬉々として尋ねると、ロイドは首を振った。

「今は無理だ。それを試すには内蔵プログラムの変更と、基盤への焼き付けが必要になる。大した変更じゃないが、もしもバグってデグレードしたら、今夜の異世界検索に支障がある。明日の朝、試してみよう」

「うん……」

結衣は俯いて自分のカップを手を取った。

思い切りガツカリしたのが顔に出ていたようで、ロイドがクスリと笑って身を乗り出すと、結衣の頭を撫でた。

「おまえは、やっぱりおもしろい。かなりニブイ奴だと思っていたが、案外鋭いな」

「それって褒めてるの？ けなしてるの？」

結衣が口をとがらせると、ロイドはクスクス笑いながら立ち上がった。

「もちろん、褒めてる」

そしてカップを持って流しへ向かう途中、結衣の横で立ち止まり、独り言のようにつぶいた。

「明日の朝、殿下が見つかったら、夜が楽しみだな」

「……え……」

ドキリとして結衣が見上げると、ロイドは意味ありげな笑みを浮かべ、横目で結衣を見下ろしていた。そして更に独り言のように言う。

「ああ、今夜見つかるかもしれないな。どっちにしろ楽しみだ」

結衣が絶句して引きつり笑いを浮かべると、ロイドはおもしろそうに笑いながらその場を立ち去った。

結局その夜の異世界検索で、王子は見つからなかった。

いろんな意味でガッカリしたのと同時にホッとしたような、そして残りあと一回となった焦りと、様々な感情が結衣の胸の中を去来した。

だが、まだ王子搜索に関しては落胆していない。今夜、異世界で見つからなかった事が、返って王子が王宮内にいる事を示しているようで、明日の朝が待ち遠しく思えた。

夜に異世界検索のあった日は、ロイドも結衣と共に部屋に引き上げる。

それぞれ自分の部屋を通り抜け、そのままテラスへ直行するのだ。王子の部屋に戻った結衣は、部屋の灯りを点け、いつも通りまっすぐテラスに向かおうとする途中、ふと立ち止まった。

浴室に灯りが点いているのだ。

不審に思い、そっと扉を開く。脱衣所には誰もいない。

その時、浴場続く奥の扉の向こうから、ピチャピチャと水に濡れた足音が、近付いて来るのが聞こえ、結衣はギクリとして硬直し

た。

まさか、客室の幽霊は本物だったのだろうか。そんな事を考えている隙に足音はすぐそこまでやって来た。磨りガラスに、ぼんやりと人影が見える。

幽霊ではなく人だと思った瞬間、結衣は人騒がせな犯人を捕まえてやろうと思い、脱衣所に駆け込むと奥の扉を一気に開いた。

目の前に現れたのは鏡？

驚きに見開かれた黒い瞳。多分自分も同じ表情をしている。だが長い黒髪は水に濡れて、滴を滴らせている。

服を着ていないその身体は、自分より少し筋肉質だ。いくらなんでも、ここまで胸は真っ平らじゃない。

結衣の視線は更に下がる。

そして自分とは明らかに違うものを目にした途端、目の前の鏡像がそこを両手で素早く覆い隠した。

結衣は慌てて視線を上げる。

少しの間見つめ合った後、二人は同時に悲鳴を上げた。

「キャアアア——ッ！」

「うわああ——っ！」

二人分の悲鳴を聞きつけて、ロイドがテラスから駆け込んで来た。「ユイ！ どうした？！」

脱衣所から飛び出した結衣は、リビングにロイドの姿を見つけ大声で呼んだ。

「ロイド！」

ロイドは結衣の姿を認めると、駆け寄って抱きしめた。

「おまえ、また鍵が開いてたぞ。何があった？」

結衣はロイドにしがみついたまま、黙って浴室の中を指差した。

ロイドは不思議そうに結衣を見つめた後、浴室に顔を向けた。ロイドの目が一気に見開かれる。

「殿下……？」

やはりセリオス王子だったのだ。

結衣は恐る恐る浴室の方を向いた。

腰にタオルを巻いた王子が、照れくさそうに笑いながら首をすくめた。

「見つかっちゃったね」

Last Kiss (7)

廊下をせわしげに近付く音が聞こえ、王子の部屋の扉がノックされた。

「殿下、いかがなさいましたか？」

クラーク氏が騒ぎを聞きつけてやって来たようだ。

結衣はロイドから離れ、部屋の扉を開ける。クラーク氏が心配そうな顔で、再び問いかけた。

「どうかなさいましたか？」

すると、セリオス王子が浴室から顔を出した。

「あ、クラーク。ちょうどよかった。髪を乾かすのを手伝ってよ」

「え……殿下……」

クラーク氏は目を丸くして、王子と結衣を交互に見つめた。奥から落ち着きを取り戻したロイドが王子とクラーク氏に声をかけた。

「殿下、まずは服をお召しください。お話はその後でお伺いします。クラークさん、お願いします」

ロイドに言われ、クラーク氏は「かしこまりました」と答え、部屋に入ってきた。

クラーク氏が浴室に入るのを見届けて、結衣はロイドと共にリビングへ向かった。

時間が経つにつれ、混乱した頭が落ち着いてくると、王子が見つかった安堵感よりも、王子の軽い調子が不愉快で、結衣はなんだか苛ついてきた。

ロイドと並んでソファに座り、苛々しながら問いかける。

「いったい、どういう事？」

「おまえの読みが当たってたって事だろう。詳しい事は、これから伺うでしょう」

二人は共に黙り込んだ。

王子の様子を思い出すと、結衣の眉間には自然にしわが刻まれる。これだけ長い間、行方をくらまして、皆が心配していた事くらい想像がつくはずだ。あの様子では、誰かに拘束されていたというより、自分で隠れていたとしか思えない。

なのに、ちっとも反省の色が見えない。そう考えると、苛々を通り越して、腹が立ってきた。

そこへ浴室の扉が開き、身なりを整えた王子とクラーク氏が姿を現した。ロイドが席を立つのを見て、結衣も席を立つ。

服を着て髪を束ねた王子は、遙かに堂々としている事を除けば、まるで鏡を見ているように自分と瓜二つだ。

「待たせたね。何から話そうか」

クラーク氏を従えて、リビングに入ってきた王子は、相変わらず軽い調子でロイドに向かい、笑顔を見せた。

その様子に結衣は、とうとう我慢できなくなり、つかつかと歩み寄ると、王子の頬を思い切り叩いた。

「なに笑ってんのよ!」

「ユイ!」

ロイドが慌てて、後ろから結衣を抱きかかえて、後退させた。

王子は頬を押さえ、目を見開いたまま、黙って結衣を見つめている。結衣はロイドの制止も気にせず言葉を続けた。

「みんながどれだけ心配したか、わかってんの? あなたの事、そんなに溺愛している王様を心配させて、少しは反省しなさいよ!」

この、バカ王子!」

「やめろ、ユイ!」

尚も王子に詰め寄ろうとする結衣を、ロイドは視界を遮るように前に回って押し止めた。そして、顔だけ振り向いて王子に頭を下げる。

「申し訳ありません、殿下。こいつは異世界の人間で、この世界の流儀をわきまえておりません。代わりに私がどのようなお咎めもお受けいたしますので、こいつのご無礼はどうかお許しください」

「何言ってるのよ！ どう考えたって、悪いのはこの子じゃない。あなただって……」

「いいから、おまえは黙ってろ！」

怒鳴りながらロイドは、結衣の両肩を掴んで強く揺すった。その迫力に気圧されて、結衣は押し黙る。

少しの間、部屋が静まりかえった。

ロイドは振り返り、改めて王子に頭を下げた。

「本当に申し訳ありません、殿下」

すると王子はロイドを見つめて、クスクス笑い始めた。結衣は黙って王子を睨みつけた。

王子はロイドの肩を軽く叩くと、笑顔のまま言う。

「いいよ、ロイド。顔を上げて。ロイドを罰したりはしないよ。もちろん、ユイもね。だって、ユイの言う通り、悪いのは僕だもの。心配かけて、ごめんね」

「寛大なご処置、痛み入ります」

ロイドはそう言うのと、顔を上げた。王子はロイドの顔を見ると、益々おもしろそうにクスクス笑う。

「それにしても、話には聞いていたけど、ロイドって相当ユイの事が気に入ってるんだね。こんなに取り乱したの、初めて見たよ」

言われてみれば、確かに取り乱していた。だが、話に聞いたって、誰から？

結衣が眉をひそめて考え込んでいると、ロイドが振り返り、無言のまま睨んだ。言わんとする事は分かっている。結衣は王子を見つめて口を開いた。

「セリオス殿下、叩いた事は謝るわ。あと、暴言を吐いた事も。だけど、私は間違った事を言ったとは思ってないから」

「おまえは！」

振り返って結衣に詰め寄るロイドの腕を王子が掴んだ。

「いいって」

そして王子は、笑って結衣に告げた。

「ユイ、安心していいよ。父上には心配かけてないから。父上は全部知ってる。ね、クラーク」

「は……はあ……」

突然、話を振られて、クラーク氏はしどろもどろに返事をする。――ということは、王子と王とクラーク氏はグルだったという事だろうか。

最初に王子の失踪を告げたのはクラーク氏だと聞いている。さすがにロイドも厳しい表情でクラーク氏を問い詰めた。

「クラークさんも最初から知ってたんですか？」

クラーク氏は気まずそうにロイドを見つめて答えた。

「いえ、私が知ったのは、ユイ様が東屋でケガをされた後です。ヒューパック様が殿下を狙った犯行ではないかと言うので、陛下にご報告申し上げたところ、あまり事を荒立てないようにと、真相を伺った次第です」

「立ち話もなんだから、みんな座って話そうよ」

王子が促して、全員でソファに移動する。王子が上座の一人掛けのソファに座り、その横にクラーク氏は立ったまま控えた。結衣とロイドは先ほどと同じように二人並んで座る。

皆が注目すると、王子は順を追って、真相を語り始めた。

結衣が克蘭ベールにやって来た一週間前、王子は東屋の石段を踏み抜き、偶然、地下遺跡を発見した。その後も何度か探検に出かけ、フィオナに見せてあげる約束をしたという。

誰かに見つかるかと探検できなくなると思い、東屋の石段を復元しておいて、もっぱら霊廟から出入りしていたらしい。

そして失踪した当日、午後から王に呼ばれていた事を忘れ、少し遺跡に長居をしすぎた。思い出して王の元に行ったところ、騒ぎになっている事を知ったという。

ロイドが自作マシンで捜索を行う事を聞いて、王子はイタズラ心が湧いてきた。

「多分すぐに見つかるだろうと思ったけど、ロイドのマシンとかく

れんぼしてみたくなったんだ。だから父上をお願いして、僕が王宮内にいる事は黙っててもらったんだよ」

王もまさか、ここまで事が深刻化するとは思ってもみなかったのだろう。溺愛する息子のお願いに頬を緩める王の姿が目に見えよう。うだ。

王子は王の承諾を得て、再び地下に潜り、うっかり謎の装置の全遺跡同時作動スイッチを押してしまったのだ。

時を同じくして、ロイドの人捜しマシンが作動した。そして結衣が現れた。

遺跡の装置は、ちょうどロイドの研究室の真下に位置するらしい。結衣の出現により、事態は王子の思わぬ方向に動き始めた。

「どうして、すぐに出て来なかったのよ」

結衣が非難するように尋ねると、ロイドがすかさず額を叩いた。

「タメ口きくな」

結衣は額を押さえ、ムツとした表情でロイドを睨む。王子はおもしろそうにクスクス笑った。

「かまわないよ。ユイは他人のような気がしないし、ロイドと同じ僕の友達だよ。ロイドだってかまわないのに、律儀だよね」

そして王子は、意味ありげな視線をチラリとロイドに向ける。

「僕は、すぐに出て行こうと思ったんだけどね。父上がユイを気に入っちゃって、どうしてもロイドのお嫁さんにしたかったみたいで、もう少し二人が仲良くなるまで見守りたいって言うから……」

ロイドは居心地悪そうに、王子と結衣から視線を逸らして、天井を見上げた。

今思えば、王は溺愛する王子の行方より、ロイドと結衣の結婚の方ばかり気にしていたような気がする。所在を知っていたなら、王子の行方など気にならなくて当然だ。

「今まで、どこにいたの？　ずっと遺跡にいたわけじゃないんですよ？」

結衣が再び問いかけると、王子は平然と言う。

「遺跡にいた事もあるけど、普通に王宮内にいたよ。二日目は父上の部屋にいたけど、三日目からはユイがロイドの研究室にずっとこもってたから、僕は普通に王宮内のいろんなところにいたよ。ユイとロイドの動きはクラークが知らせてくれてたしね」

「夜は王様の部屋にいたの？」

「うん。最初の日だけ客室に泊まったんだけど、お風呂にタオルがなくなっけ。捜して歩き回ったら、幽霊がいるって騒ぎになっちゃって、二日目からは鍵をかけられて入れなくなっただよ」

結衣は思わずため息をつく。

「やっぱり、あなただったのね。厨房の料理を持って行ったのもあなたでしょ」

結衣が指摘すると、王子はふてくされたような表情で腕を組み、抗議する。

「だって、僕の食事はユイが食べちゃうんだもの。父上がこっそり分けてくれてたけど、全然足りないよ」

王宮内を探検したときに知ったが、王子はクラーク氏に内緒で、時々厨房で間食していたらしい。確かに食べ盛りの少年には、他人の食事の一部では足りないのだろう。

王子はイタズラっぽく笑うと結衣を見つめた。

「ユイが頻繁に厨房に出入りするから、僕が行っても怪しまれなくて助かったよ。ロイドがうらやましかったな。毎日おいしそうなお菓子を食べられて」

そして王子は思い出したように手を打った。

「あ、あれ、おいしかったよ。この部屋に置いてあった紙袋に入ってたお菓子」

何の事か分らず、結衣は一瞬キョトンとした。――が、すぐに思い出した。

二日目の朝、厨房で貰ったカップケーキの事だ。夕方、食べようと思っただけでなくなって、てっきりクラーク氏かロイドに処分されたと思い込んでいた。

「あれ、あなたが食べたの？」

「うん。ユイが外に出た隙に、おもちゃを取りに来て、偶然見つけたんだ」

結衣はガツクリと肩を落とす。

「あれは私じゃなくて、パルメが作ったの。もう。後で食べようと思っ、楽しみにしてたのに……」

「そうだったんだ。でも彼女のお菓子も、おいしいよね」

そう言った後、王子はロイドを見つめてクスクス笑い始めた。

「僕ね、何度も見つかったって思ったんだけど、ロイドったら、いつもは冷静で頭が切れるのに、ユイが絡むと、おもしろいほど判断力が鈍るんだよ。ユイが東屋の石段を壊したとき、後でロイドが調べに来たって言うから、てっきり遺跡が見つかって、僕が隠れていた事がばれるだろうと思ったのに、なんだか陰謀説になっちゃったし。ユイが攫われそうになった後は、僕が異世界に飛ばされた事になって、びっくりしちゃった」

楽しそうに語る王子の声を聞きながら、ロイドはきまりが悪そうに黙って目を伏せている。

王子が異世界に飛ばされたかもしれないと分かったとき、ロイドがどれだけ心を痛めていたか、結衣は知っている。あの時のロイドの様子を思えば、笑い事ではない。

「笑わないでよ。ロイドは本当にあなたの事を心配して、悩んでたんだから」

「言うな、ユイ」

王子を非難する結衣を、ロイドは静かに制する。王子は微笑んでロイドを見つめた。

「ごめんね、ロイド。ロイドが心配してるだろうとは思ってたけど、父上とクラークの話を聞いてると、ロイドのマシンがどこまで進化するのか、ちょっと興味があつたんだ」

「いえ、お気遣い無用です」

そう言ってロイドは軽く頭を下げた。王子は小さく頷いて結衣に

視線を移す。

「でも、ユイは目ざといよね。遺跡に気付いたのもユイでしょ？
あの時は、今度こそ見つかったと思ったもの」

「あの時？」

結衣が首を傾げると、王子は身を乗り出して指差した。

「ほら、二人で遺跡に来たとき、帰り際に誰かいるって気付いたじゃない」

「あれ、あなただったの？」

結衣は呆れて目を丸くする。王子はにっこり笑って頷いた。

「うん。咄嗟にロボットを放つてごまかしたら、あっさり引き下がってくれて助かったよ」

そして王子はからかうように、ロイドの顔を覗き込んだ。

「もしかして、誰かいると思ったけど、深追いしてユイが危険な目に遭ったら困るから引き下がったの？」

「いえ、そういうわけでは……」

先ほどから、ずっとからかわれてばかりで、ロイドが借りてきた猫のように小さくなっているのが、なんだかかわいそうになってきた。

本当なら王子は、明日の朝ロイドのマシンで見つかったはずなのだ。ロイドも自分の手で見つけたかっただろう。

今まで、うまく隠れていたのに、どうしてここにいたのだろう。

それが少し腹立たしくて結衣が尋ねると、王子は照れくさそうに笑いながら答えた。

「うっかり間違っちゃったんだ。最近、遺跡には行けないし、ロイドが遺跡と研究室を行き来してて、あんまりうるつけないし。退屈だから読みかけの本を取りに来たんだ。それで、どうせユイは真夜中まで帰って来ないと思って、お風呂も済ませようと思ったから見つかった。クラークにさっき聞いたけど、真夜中は明日だったんだね」

あまりにも、うっかり過ぎる結末に、結衣は一気に脱力した。

大きくため息をつく結衣をよそに、王子はさっさと話を切り上げた。

「じゃあ、僕は今日から部屋に戻るから、ユイはロイドのところに泊まってね」

「ええ?!　なんでよ!　王様のところにいればいいじゃない」

結衣が驚いて反論すると、王子は平然と言り返す。

「だって、見つかるまでって約束だったんだもん。第一、父上はイビキがうるさくて眠れないんだよ」

「じゃあ、なんで私はロイドのところなの?　客室でもいいじゃない」

「ユイは僕なんだよ。僕が客室に泊まるのは変じゃない。かといって、僕の部屋に僕と一緒に泊まったら、後々ばれたとき、僕の側室に決定しちゃうよ」

「どうして側室になるの?」

「正室はフィオナだから」

「そうじゃなくて。どうして泊まっただけで側室なのよ」

結衣がため息と共に問いかけると、王子は意地悪な笑みを浮かべた。

「泊まったただけだなんて、誰も信じてくれないよ。数年後にユイが子供を連れて来て『あの時の子です』って言ったら困るからね」

「そんなの遺伝子を調べればわかるじゃない」

腕を組んで勝ち誇ったように胸を反らす結衣を、王子は鼻で笑った。

「何言ってるの。遺伝子なんて、いくらでも書き換えられるんだよ。特にユイには僕の遺伝子情報を自由にできるロイドがついてるし。重要なのは、僕と一夜を共にしたかどうかという事実だよ」

「……え……」

一瞬絶句した後、結衣は気を取り直してロイドに問いかけた。

「本当に、いくらでも書き換えられるの?」

「そういう理由で書き換えるのは違法だけだな」

科学も進みすぎると、科学捜査より既成事実の方が重要視されるらしい。

「じゃあ、納得したらロイドのどこに行ってね。僕もユイを側室にしてロイドに恨まれたくないんだよ」

王子は席を立つと、全員を出口へ促した。そして、クラーク氏に王への報告を頼むと、笑顔で部屋の扉を閉めた。

廊下に出た途端、クラーク氏がロイドに頭を下げた。

「ヒューパック様、長い間偽っていて申し訳ありません」

「気にしないでください。クラークさんも立場がおありでしょうし」
ロイドがそう言うのと、クラーク氏はもう一度頭を下げ、王に報告するため、その場を去った。

クラーク氏を見送った後、ロイドは結衣をチラリと見た。

「来い」

と短く声をかけ、自分の部屋に向かう。

突然目の前に湧いてきた現実には、結衣は緊張して足がすくんだ。

王子が見つかった。——ということとは……。

ついさっきまで、明日の夜だと思い込んでいたのだ。覚悟はしていたが、いざとなると、やはり緊張する。

自室の扉を開けようとして、結衣が動いていない事に気が付いたロイドは、少し笑って静かに言った。

「身構えるな。オレが見つけたわけじゃないんだ。何もしない」

「……うん」

結衣が歩き始めると、ロイドがポツリと付け加えた。

「多分……」

「多分？」

結衣はピタリと歩を止める。

探るようにつめる結衣に、ロイドは言い訳をする。

「キスはノルマだからな。この限りではない」

子供のような言い分がおかしくて、結衣はクスリと笑うと、ロイドに駆け寄った。

そして、二人一緒にロイドの部屋に入った。

Last Kiss (8)

部屋に入り扉を閉めた途端、ロイドは縋るようにして結衣を抱きしめた。

『多分』とは言ったが、何もしないと言った舌の根も乾かないうちに、いきなり方針を翻すとは思ってもみなかった。

結衣の全身は硬直し、鼓動は早鐘を打ち始め、無意識に声が上ずった。

「な、何？」

するとロイドは、ため息を吐き出すように、つぶやいた。

「肝が冷えたぞ、おまえ」

「あ？」

一気に全身から力が抜けた。あまりにも意識しすぎていた自分が滑稽に思えて、急速に熱が冷めていく。

結衣は少し笑って問いかけた。

「王子様を叩いた事？」

「本当なら、タダじゃ済まないところだぞ。殿下の懐の広さに感謝しろ」

そう言ってロイドは身体を離すと、結衣の額を軽く叩いた。

「そうね。ラフィット殿下だったら極刑だったかも。それでもあなたは、かばってくれた？」

結衣がからかうように顔を覗き込むと、ロイドは顔をしかめて再び額を叩いた。

「訊くな」

二人でリビングに向かおうとした時、入口の扉がノックされた。

ロイドが応対に出ると、クラーク氏がそこにいた。結衣が王子の部屋で使っていた生活用品と着替えと小鳥を届けてくれたらしい。

ロイドはそれを受け取り結衣に渡すと、二人で改めてリビングに

向かった。

たどり着いたリビングは、相変わらず足の踏み場もないほど、機械部品や工具が散乱している。

ロイドは入口で少し考えた後、結衣を振り返った。

「先に風呂に入ってこい。その間に片付けとく」

そして早速、床に散らばったものを拾い集め始めた。結衣は言われた通り、ロイドに教わった風呂に向かった。

風呂から戻してみると、リビングが見違えるほど広くなっていた。作りかけの機械と、その部品や工具の入った箱が、部屋の隅にまとめて置かれ、ロイドが床にモップをかけている最中だった。

結衣は部屋を見渡して、感心したようにつぶやいた。

「この部屋、こんなに広かったのね。あ、手伝おうか？」

結衣が尋ねると、ロイドは床掃除を終えて、モップを片付けながら答えた。

「もう終わった。座ってろ」

リビングを出て行くロイドを見送りながら、結衣は言われた通りソファに腰掛ける。

少しして冷えたお茶の入ったグラスを持って、ロイドが戻ってきた。差し出されたグラスを受け取り、結衣がお茶を飲み始めると、ロイドが大きくため息をついた。

「どうしたの？」

結衣が首を傾げると、ロイドは中空をぼんやり見つめたまま、独り言のようにつぶやいた。

「何やってたんだろうな、オレは。ひと月近くも。殿下の事も、遺跡の事も、全部おまえの言った通りだった」

やはり、呆気なさ過ぎる結末が、ロイドを落胆させたらしい。結衣は少し微笑んでロイドの腕に手を添えた。

「でも、マシンの改造は無駄じゃなかったと思うわ。これからも、きっと役立つと思うし。あれは、あなたにしか出来ない事だもの」

ロイドは結衣を見つめて少し笑顔を見せた。

「ああ。確かに数少ない収穫のひとつだ」

結衣の髪をサラリとひと撫でして、ロイドは気が抜けたように嘆息した。

「だが、急にヒマになって困ったな。本当は今夜中に内蔵プログラムの変更だけでも、しておこうと思ってたんだが、それも必要なくなったし。残処理があるにはあるが、明日の午前中には片付くな。おまえは、どうする？」

「え？ 何が？」

突然、話を振られて、結衣は面食らった。結衣はいつも研究室に
いるだけで、何も手伝ったり、仕事をしたりしているわけではない。
ロイドは穏やかな表情で、静かに問いかける。

「元々は三日後の朝の予定だったが、明日の真夜中、正確には明後
日だが、ニッポンに帰る事も出来るぞ」

そんな事、答えは決まっている。

結衣はロイドを真っ直ぐ見つめて、キッパリ答えた。

「予定通りでいい。最後まで、あなたと一緒にいたい」

「そうか」

ロイドがホッとしたように微笑んだ。彼が自分と同じ気持ちなの
だと思うと嬉しかった。

しかし、異世界検索の必要がなくなった遺跡の同期を、ただ放置
するのはもったいない気もした。夜に同期を迎えるのは明日が最後
だ。そこで、結衣はロイドに提案してみた。

「ねえ。みんなで遺跡が派手に光るところを見物しない？ 夜は明
日が最後だし。王子様やローザンやブラーヌさんや、みんなで」

名案だと思ったのに、なぜかロイドは渋い顔をする。

「みんなで？」

不服そうに問い返すと、ロイドは甘えるように両手で結衣を抱き
寄せた。

「二人でいいだろう？ 殿下はともかく、ローザンは仕事でもない
のに真夜中に呼び出したら気の毒だ」

「それ、今思い付いた口実でしょう？」

結衣がクスリと笑うと、ロイドは目を細くして反論する。

「おまえ最近、余計な一言が多いな。口実じゃなくて正論だ」

「じゃあ、ブラーヌさんは？」

「あいつは活動期が終わるまで、引き上げてもらう。遺跡の調査を急ぐ必要もなくなったし、何よりあいつの世話で煩わされたくない」「活動期じゃなくても、ごはんの世話はしなきゃならないじゃない」結衣が反論返しを続けていると、ロイドが苛々したように結衣を抱きしめた。

「ニブイ奴だな。あと二日しかないんだ。せつかくヒマになったのに、余計な事で時間を無駄にしたくない」

「うん……」

結衣はロイドの胸に顔を伏せて、強く抱きしめ返した。

少しでも長く一緒にいたい。もっと話がしたい。もっと触れ合いたい。ロイドも同じ気持ちだとわかり、胸の奥が暖かくなった。

「もう、一緒に逃げなくていいのよね」

「ああ」

「じゃあ、もう一言、余計な事言ってもいい？」

「何だ？」

結衣は顔を上げると、ロイドを見つめ微笑んだ。

「あなたが好き」

ロイドも微笑み返すと、静かに言う。

「おまえ、今度そういう事言う時は覚悟しろと言っただろう」

結衣はひるむことなく、宣言する。

「覚悟なら、できてる」

ロイドは表情を変えることなく、問いかけた。

「いいのか？」

「うん」

結衣が頷くと、ロイドは一層目を細め、軽く額を叩いた。

「無理するな。さつき足がすくんでただろう。急がなくていい。お

まえの迷いが完全に消えるまで待ってやる」

「だから、もう迷ってないってば！」

結衣が食い下がると、ロイドは腕をほどいて席を立った。

「煽るな。もう充分限界なんだ」

「だったら、どうして？ あなたの方が迷ってるんじゃないの？」

私が帰らないって言ったなら困るから」

「そうじゃない。オレはおまえを抱く事に関して、迷いは一切ない。だから、やばいんだ」

「え？」

意味がわからず、結衣は訝しげにロイドを見上げた。ロイドは結衣を見下ろして、大真面目に答える。

「言っただろう。オレは歯止めのきかない男だ。おまえが途中で怖くなって嫌がっても、止められそうにない。だから、確固たる決意を持って臨んでもらいたい」

「……え……」

まるで重要任務に赴く特殊部隊にでもなったような気がして、結衣が絶句していると、ロイドはクルリと背を向けた。

「少し待ってろ」

そう言い残して、ロイドはリビングを出て行った。

一人になった途端、せっかく高まっていた気持ちに水を差されて、結衣はムカムカと腹が立ってきた。これって、女に恥をかかせるってヤツじゃないだろうか。

苛々しながら待っていると、ロイドがグラスを持って戻って来た。それを結衣に突きつけ、命令する。

「こいつを飲め」

差し出されたグラスには、先日飲んだ赤い果実酒が入っていた。

「私に酒は飲ませないんじゃないの？」

「おまえ、酒を飲んだら眠くなるんだろう？ こいつを飲んで、さっさと寝ろ」

結衣は眉間にしわを寄せ、プイツと顔を背けた。

「いない」

ロイドは小さく舌打ちすると、果実酒を一気に飲み干した。怒ったように無言のまま、音を立ててグラスをテーブルに置き、素早くメガネを外してその横に置いた。

そして、結衣の横に片ひざを付くと、両手で頬を包み、強引に顔を上向かせて口づけた。

こじ開けられた唇の隙間から、液体が注ぎ込まれる。それが先ほどの果実酒だと分かり、結衣はロイドの腕を外そうと抵抗した。

ところが、引っ張っても叩いても、ロイドの腕はビクともしない。吐き出そうにも口を塞がれていて、それも叶わない。

口中を満たした果実酒は、真っ直ぐに伸びた喉の奥へ、次々に流れ込んでいった。

やがて、結衣が果実酒を飲み干すと、ロイドは唇を解放した。ひと息に飲まされた強い酒のせいで、結衣の頭はクラクラし始めた。

ぼんやりとロイドを見つめる半開きの口の端から、果実酒が一滴溢れ、あごを伝って喉に一筋の赤い線を描いた。

「ったく、手間を取らせるな」

面倒くさそうに言うロイドに、結衣は力なく反論する。

「ひどい……無理矢理飲ませるなんて……」

「おまえが素直に自分で飲まないからだ」

そしてロイドは、思い出したようにクスリと笑った。

「ああ、そういうば、口移しの方がいいって言ってたっけな」

「言っていないわよ」

反論しながらロイドを叩こうとすると、座ったソファがグンと沈んだような気がした。ソファから転げ落ちそうな気がして、結衣は慌てて背もたれに背を預けた。

じっとしているはずなのに、身体がグラグラ揺れているような気がする。

「もおゝバカあゝ目が回るうゝ」

恨み言を言う結衣を、ロイドはおもしろそうに身を屈めて覗き込

む。そして、先ほど口から溢れた酒の跡に気付いたらしい。

「なんだ、こぼしたのか。しょうがないな」

ロイドはソファの背もたれに両手について、その間に結衣を閉じ込めた。焦点の合わないうつろな目で結衣が見上げると、ロイドは顔を近づけ、首筋に残る赤い跡を、唇と舌先でスツと拭った。

一気に酔いが吹っ飛ぶような、背筋が粟立つ感覚に、結衣は思わず声を上げた。

「ひゃあう！」

ロイドは慌てて顔を上げると、非難するような目で結衣を見る。

「なんだ、その色気のない声は」

「だって。首、ダメなのよ。美容院でこの辺を触られるのがイヤだから、髪を伸ばしてるようなもんだし。あなたのアレも本当は苦手なの」

「アレ？」

「癖なの？ ほら、よく耳元でコソコソしゃべるじゃない。背中がゾクゾクするのよ」

「ふーん」

ロイドは小刻みに頷きながら、ゆっくりと結衣の横に腰を下ろした。そして意地悪な笑みを浮かべると、指先でいきなり結衣の首筋をツツと撫でた。

「この辺か？」

「やめてったら！」

結衣は両手で首をガードし、上半身をロイドの射程距離から遠ざけた。するとロイドは、無防備になった脇腹をつまんだ。

「こっちはどうだ？」

「きゃあ！」

身をよじって背中を向けると、今度は背中の中を指先が走った。

「こことか？」

「いやあ！」

悲鳴を上げて転げ回る結衣の身体を、ロイドはおもしろそうに指先であちこち、つつき回す。

やがて、暴れて酔いの回った結衣が、動けなくなるほどヘトヘトになると、ロイドはつつくのを止めた。

「はぁ……意地悪……もう、許して……動けない……」

ソファに横たわり荒い息を吐きながら、結衣が懇願すると、ロイドはクスクス笑った。

「そそられるセリフだな。だが、ポイントは押さえたから、今日のところは勘弁してやろう」

ロイドは立ち上がり、リビングの隣にある寝室の扉を開いて戻って来た。そして、ぐったりとした結衣を抱き上げて運び、ベッドに横たえた。

「おやすみ」

挨拶と共に額にキスをして、ロイドは寝室を出て行った。

扉が閉まり部屋が暗くなった途端、急激に睡魔に襲われ、あっという間に結衣の意識は遠退いた。

Last Kiss (9)

胸が圧迫されるような息苦しさを覚えて、結衣は目を覚ました。辺りは明るくなりかけている。

目を開くと、目の前の布団の上に、裸の腕が横たわっていた。息苦しさの原因はこれのようだ。

ギクリとして一氣に目が覚め、結衣は恐る恐る腕の主へと視線を移す。

自分の隣に、裸のロイドがうつ伏せで眠っていた。

状況が飲み込めずに、結衣の心に動揺が広がっていく。

ロイドに運ばれて、ベッドに寝かされたまでは覚えている。その後すぐに眠ってしまったと思っていたが、実は泥酔して記憶が飛んでいるだけなのだろうか。

ロイドは裸だが、自分はきっちりパジャマを着込んでいる。ボタンのひとつも外れてはいない。

部屋の様子からして、とても几帳面とは言い難いロイドが、一度脱がせたものを、ここまできっちり着せたりするだろうか。それとも自分で着たのだろうか。

とにかくさっぱり記憶にない。

一度しかない初めての経験を、何ひとつ覚えていないというのは、一生の不覚ではないだろうか。

結衣はそっと布団をめくって中を覗いた。どうやら裸なのは上半身だけのようだ。なんとなくホッとしたが、不安は拭い去れない。

結衣がゴソゴソ動き回っている気配を感じたのか、ロイドが目を開いた。

目が合ったので、とりあえず挨拶してみる。

「お、おはよう」

まだねぼけているのか、少し間があった後、ロイドは答えた。

「おはよう。起きてたのか。何時だ？」

ロイドはひじを立てて上半身を浮かせ、枕元の時計を取ると、至近距離で凝視した。

布団が滑り落ち、露わになった裸の上半身を目の当たりにして、以前本人が言っていた『いい身体をしている』というのが本当だと分かった。

だが、いくら記憶をひっくり返しても、今初めて見たとしか思えない。

「寝るにも、起きるにも、中途半端な時間だな」

ブツクサ言いながらロイドは時計を元の位置に戻す。そして、横向きに転がって固まったまま、目だけをキョロキョロと動かしている結衣を不審に思ったのか、声をかけた。

「どうした？」

結衣は黙ってロイドを見つめる。あまりにも平然としている事に違和感を覚えるが、結衣にとっては一大イベントでも、ロイドにとっては大したことはないからかもしれない。

何も覚えてない以上、彼に聞いてみるのが手っ取り早い。

結衣は意を決して口を開いた。

「どうして一緒に寝ているの？」

するとロイドは不愉快そうに言う。

「オレのベッドにオレが寝て何が悪い」

「そうじゃなくて、私、ゆうべ……」

「ゆうべ？」

結衣が言い淀んでいると、ロイドはニヤリと笑い、顔を近づけて囁いた。

「最高だったぞ」

「さ、最高……？　って……最低じゃない……私、何も覚えてない……」

目を見開いてロイドを見つめたまま、結衣は泣きそうな顔でつぶやいた。

少しの間、その様子をおもしろそうに見つめていたロイドは、突然吹き出した。そして、仰向けに転がって、大声で笑う。

「何がおかしいのよ!」

結衣がムツとして横から小突くと、ロイドはこちらに向いて転がり、尚も笑いを堪えながら答えた。

「安心しろ。何もしていない」

「へ?」

結衣は思わず、間拔けな声をもらす。ロイドは再びクスクス笑い始めた。

「気付かずに眠っていたか? いくらおまえが鈍くても、そんなわけないだろう。しかも、ニブイのは感情だけで、感度は良さそうだしな」

昨日くすぐられた時の事を言っているようだが、なんだか小馬鹿にされたような気がして、結衣は益々ムツとして叫んだ。

「からかったのね? もう! なんで裸なのよ、まぎらわしいったら!」

「おまえの体温が高いのが悪い。暑かったんだ」

「だったら離れて寝ればいいじゃない。だいたい何もしないって言ったら、普通、一緒に寝たりしないでしょ?」

今度はロイドがムツとした表情で、当然とばかりに言い返した。

「そんな事誰が決めた。オレは何もしなくても女を抱いて寝るのが好きなんだ。せっかくオレのベッドで女が寝てるんだから、抱いて寝たっていいだろう」

あまりにもキッパリと言い切られて、結衣は返す言葉を見失う。

「……エロ学者」

やっとの思いで言い返すと、すかさず額を叩かれた。

「エロじゃない。嗜好の問題だ」

ロイドは身体を起こして座ると、大きく伸びをした。

「やれやれ。おまえの勘違いのせいで、完全に目が覚めた。少し早いが起きるか」

誰のせいで勘違いしたと思っている、とは言っても無駄な気がするので、やめておいた。

軽いため息をついて自分も起きようと、結衣が身体を起こしかけた時、突然ロイドが、

「あ、そうだ」

と言って振り返った。

キョトンとして動きを止めた結衣に、

「昨日のノルマが、まだだった」

と言いながら、覆い被さるようにして、のしかかってくる。

結衣は慌てて、ロイドの両肩に手について押し止めた。

「ちよっとーっ！ 何なのよ、唐突に！ キスなら、無理矢理酒を飲ませた時にしたでしょ？」

「あれはキスじゃない。口移しだ」

「そんなの、屁理屈ーっ！」

結衣が尚も抵抗を続けていると、ロイドが不思議そうに尋ねた。

「なんで嫌がるんだ」

「この状況が、なんか落ち着かないのよ。ベッドの上に寝てるし、あなた裸だし」

「気にするな。些細な事だ」

「気にするーっ！」

結衣の抵抗を無視して、ロイドは両手首を掴みベッドに押しつけると、強引に口づけた。

やがて結衣が抵抗を諦めて身体の力を抜くと、ロイドは手首を掴んだ手を離れた。手首を離れたロイドの両手は、そのままゆっくりと結衣の腕の上をたどり、肩に到達して止まった。

腕の上をすべるロイドの手の平の感触に、背筋がざわついて結衣は身を硬くする。

徐々に激しくなっていく口づけと共に、ロイドの手が再び動き始め、結衣はピクリと身体を震わせた。

その途端、ロイドがガバツと身体を起こした。結衣が驚いて目を

開くと、思い詰めたような表情でロイドが見下ろしている。

「何？」

何事が起きたのか分からず問いかけると、ロイドは大きく息をついた。

「やばかった。そのまま、突っ走りそうになった」

「……え……」

朝っぱらから強引にキスをした挙げ句、なし崩し的に突っ走ってもらっては、ゆうべの宣言は何だったのかと言いたくなる。やはりベッドの上でのキスは危険だった。

ロイドは結衣から離れ、ベッドの縁に座った。結衣も今度こそ身体を起こす。

「おまえ、どうする？ 研究室にいる必要もないが、来るか？」

「うん」

王子が戻ったからには、今まで以上に勝手に王宮内をうろつけない。かといって、ここにいってもヒマだ。

「そうか。じゃあ、もう少ししたら、今日明日のおまえの扱いについて、クラークさんと相談してみよう」

ロイドはベッドから下りると、頭をかきながら寝室を出て行った。

ロイドとクラーク氏の協議の結果、結衣の存在はこれまで通り、関係者以外には極秘扱いとなった。

王子の代わりにエライ人に会ったり、会食に出席したりはしなくてもよくなっただけで、今までと変わらない。

事情を知らない人に、うっかり声をかけられたりしてはいけないので、変声機を飲み、身なりも王子と同じに整える。

ただ、寝泊まりはロイドの部屋に移り、食事は王子が食べてしまうので、クラーク氏がロイドの部屋まで運んでくれる事になった。ロイドがこっそり引き上げさせたブルーヌの分が流用されるらしい。

同じ場所で王子と二人同時にいるところを目撃されてはまずいで、連絡を取り合って、移動する時は居場所の確認を常に行う事とした。

作業開始時間に研究室にやってきたローザンは、ロイドと結衣から事の真相を告げられ、作業を打ち切り、通常業務に戻るため、医務室に引き上げていった。

彼は翌々日八時に、結衣が日本へ帰還する時、もう一度手伝いにやってくる。

王子の捜索隊も昨日中に解散したらしい。

結衣の周りの日常が、結衣のいなかった時へと、ゆっくり移行していく。

ロイドは午前中、残処理にバタバタ忙しく、その間結衣はいつものように、窓辺の椅子で絵本を見たり、小鳥を撫でたりしていた。

残作業が終わると、ロイドは報告書を持って王の元へ報告に行った。その後結衣も呼ばれて、王と謁見する事になった。

王は事件の顛末について、申し訳なさそうに詫びた後、またしてもロイドとの結婚について尋ねた。結衣は現在相談中という事にして言い逃れ、研究室に戻った。

明後日には日本に帰って、いつまた克蘭ベールに来る事が出来るのか分からないのだ。ロイドとの結婚など夢でしかない。そもそもロイドが結婚を考えているのかも分からない。

ロイドは王に何も言われてないのだろうか。気になったので尋ねてみた。

「何度か言われたぞ。それどころじゃないとか、相談中ですって言い逃れた」

口裏を合わせたわけではないのに、全く同じ事を言っていた事が分かり、二人は顔を見合わせて吹き出した。これでは王も、出任せだとは思わなかっただろう。

王はロイドが結婚する時、盛大な結婚式を催してくれると言っているらしい。それが煩わしくて、ロイドはこれまで、何度か薦めら

れた縁談を、のりくらりと躲してきたらしい。

別に結衣との結婚が嫌なわけではないようなので、ホッとした。

「いつか、しよう」

「何を？」

あまりにサラリと告げられて、結衣は思わず問い返す。

ロイドは結衣の頬に手を添えて、少し笑った。

「結婚だ」

結衣も淡く微笑んで、小さく頷いた。

「うん」

”いつか”なんて日は永遠に来ないと、何かで聞いた事がある。

明後日には日本に帰る自分にとって、当てのないプロポーズでも、ロイドの気持ちが嬉しかった。

「陛下には事後報告だな。盛大な式は肩が凝りそうだ」

「きつと残念がるわよ」

「盛大なのは、殿下の時があるから、大丈夫だろう」

「それもそうね」

二人は再び、顔を見合わせて笑った。

Last Kiss (10)

午後になり、結衣がいつものように厨房でケーキを仕込んで、研究室に戻ると、セリオス王子がフィオナを伴い訪れていた。

結衣は扉を閉めるなり、つかつかと王子に歩み寄る。

「ちょっと、セリオス！ 移動する時は連絡する約束でしょ？」

「おまえ！ 何、呼び捨てにしてるんだ！」

すかさずロイドがやって来て、結衣の腕を引いた。結衣は平然と釈明する。

「名前でいいって本人に言われたのよ。自分自身に殿下って呼ばれてるようで気持ち悪いって」

「たとえ、そうでも……！」

ロイドが反論しようとする、王子が笑いながら遮った。

「いいんだよ、ロイド。ユイにはいっぱい借りがあるしね。でも僕の声で女言葉は止めて欲しいな」

「あなたのフリをしてる時は、ちゃんとやってたわよ。誰にもばれてないんだから、区別つかなくなるわよ。いいの？」

「……わかったよ」

フィオナが王子の横でクスクス笑った。

現役復帰した王子は、早速秘密を教えるために、フィオナを呼んだらしい。クラーク氏と三人で地下遺跡を見学した後、ロイドのマシンを見に研究室にやって来たという。

結衣が戻った時、部外者が入ってきたら困るので、研究室の入口には「危険！ 立ち入り禁止」の貼り紙をしてあったらしいが、文字の読めない結衣は眼中になかった。

「何が危険なの？ って疑問に思わない？」

結衣が問いかけると、王子はイタズラっぽく笑った。

「ロイドは時々、妙なものを作って驚かせるから、みんな納得する

と思うよ」

結衣も思いきり納得した。気を取り直してフィオナに尋ねる。

「フィオナ、時間ある？」

「ええ」

「よかった。もうすぐケーキが出来るから、食べていって」

「はい」

フィオナと会うのは誘拐未遂事件の日以来だ。帰るまでに、もう一度会いたいと思っていたので、ちょうどよかった。

結衣が再び厨房にケーキの様子を見に行こうとした時、扉がノックされ、ローザンの声が聞こえた。

「ロイドさん。今、入ってもいいですか？」

貼り紙の効果があったらしい。

「おまえひとりなら、いいぞ」

ロイドが答えると、扉がそつと開かれ、ローザンが恐る恐る顔を覗かせた。そして、結衣と王子に目を留め、納得したようにホッと息をついた。

「殿下がこちらにいらしたんですか」

ローザンは王子と結衣を見比べ、結衣に向かってにつこり笑う。

「いやあ、こうしてお二人同時に見比べても、やはりよく似てますよね。でも、若干ユイさんの方が女性っぽいですけどね」

白々しいセリフと若干という言葉に引っかかりを覚えて、結衣はつい意地悪を試みたくなった。

「ボク、セリオスだよ」

「え？」

途端にローザンは困惑した表情で、むこうにいる王子に視線を移した。

王子は結衣に合わせて、腕を組みながら、ふくれっ面をしてみせる。

「申し訳ありません。殿下」

ローザンが慌てて結衣に頭を下げると、むこうで王子が吹き出し

た。隣でフィオナもクスクス笑う。

ローザンは益々困惑したように、周りをキョロキョロ見回した。見かねたロイドが、横から結衣の肩を叩いた。

「あんまり、からかうな」

しばらく呆けていたローザンが、やっと状況を理解してわめいた。「ひどいじゃないですか、ユイさん！ お茶とお菓子をご馳走してくれるって言うから来たのに、本当はぼくをからかうのが目的だったんですか？」

「ごめんごめん。お茶とお菓子の方が本当よ。取りに行ってくるから、少し待ってて」

結衣は苦笑してローザンをなだめると、研究室を出て厨房へ向かった。

出来上がったケーキをワゴンに乗せて研究室に戻ると、ロイドとローザンが机と椅子をセッティングしておいてくれた。

今日のケーキはアップルパイにした。まずは人数分のお茶を淹れ、続いていつものように丸ごと一個のアップルパイをロイドの前に置くと、フィオナが目丸くして尋ねた。

「ヒューパック様、それ、全部お一人で召し上がるんですか？」

「はい」

と大真面目に答えるロイドを見つめ、フィオナは驚いて息を飲む。

見慣れない者が驚くのは無理もない。見慣れていても胸焼けがしそうなのだ。

「あまり見ない方がいいわよ。気持ち悪くなるから」

結衣はフィオナに忠告を与え、全員にパイを配り終わると席に着いた。

今までは王子搜索の合間の息抜きだったお茶の時間が、今日のはんびり、ゆったりとした気分で過ごせて、なんだか至福の時のように思えた。

しばらくの間、パイを食べながらお茶を飲んでおしゃべりをした後、結衣とロイドを残して、皆は研究室を後にした。

フィオナは明後日、結衣の日本帰還をわざわざ見送りに来てくれると約束した。

あつという間に一日が過ぎ去った。

真夜中のテラスで、結衣はロイドと並んで手すりに縋り、克蘭ベールの夜景を眺めた。

見下ろすラフルールの街中には、真夜中にも拘わらず、ちらほらと人の姿が見える。よく見ると、中央の広場には、かなりの人が集まっていた。夜に同期を迎えるのは今日が最後だと、街の人たちも知っているのだろう。

ロイドが腕時計を見て、静かに告げた。

「始まるぞ」

直後、遺跡が派手に光の柱を立ち上らせた。同時にラフルールの街から、歓声と拍手がわき起こる。

結衣はチラリとロイドに視線を向けた。

以前、一緒に見た時は忌々しいと言っていたが、今は違うようだ。穏やかな表情で、目を細めている。

結衣はホッとして、遺跡に視線を戻した。

改めて、幻想的な光の柱に目を奪われる。思えばこの光は、自分とロイドを繋いでくれた奇跡の光なのだ。

やがて光が収束すると、ラフルールの街から「あー」というため息のような声が響いた。広場に集まる人々も、三々五々と家路につく。

結衣とロイドはどちらからともなく、顔を見合わせて笑みを交わした。

「次に見られるのは、三十年後だな」

「その時も、あなたと一緒に見られたらいいな」

「ああ」

ロイドは結衣の肩を、そっと抱き寄せた。

扉がノックされる音で、結衣は目を覚ました。すでに日は高く昇っているようだ。

隣にはまたしても、裸のロイドが眠っている。結衣は横からロイドを揺すった。

「ロイド、誰か来たわよ。起きて」

ロイドは目も開けず、面倒くさそうに結衣の手を叩いて命令する。
「クラークさんだろ。おまえが出ろ」

「んもお！」

結衣はベッドから飛び出すと、走って入口へ向かった。

扉を開けると、ロイドが言った通り、クラーク氏が立っていた。

「おはようございます。朝食をお持ちしました。まだ、お休みでしたか？」

パジャマ姿の結衣を見て、クラーク氏が尋ねた。結衣は苦笑して答える。

「いえ、起きました」

「お邪魔して申し訳ありません。今日はお休みだと伺いましたので、ヒューパック様の分もお持ちしました」

そう言ってクラーク氏は、二人分の食事が乗ったワゴンを部屋の中に入れると、頭を下げて帰って行った。

結衣はワゴンを転がしてリビングに運ぶと、寝室の扉を勢いよく開いた。

「朝食が来たわよ！」

「怒鳴らなくても、聞こえる」

てっきり、まだ寝ていると思ったら、ロイドはベッドの縁に座り、眠そうな顔でぼんやりしていた。

「あなた、今日休みなの？」

「ああ。一ヶ月休んでないから、陛下から休めって言われた」
結衣は納得してため息をついた。

「それで、ゆうべ夜更かししてたのね」
ゆうべ午前二時に遺跡の同期を見物した後、ロイドは結衣を寝室に追いやって、自分は書斎にこもった。

ヒマになった途端、機械いじりをしたくなったのか、結衣が寝る前に覗いた時は、パソコンに向かって図面を描いたりしていた。

ロイドが、いつベッドに潜り込んだのか、結衣は知らない。

「もう少し寝てる？」

結衣が尋ねると、ロイドは枕元のメガネを取って、気怠げに立ち上がった。

「いや、起きる」

目をこすりながらロイドは、のろのろと結衣のいる入口に向かって歩いて来る。

「だって眠そうだし」

「血糖値が下がってるからだ。食えば目も覚める。——というわけで、少し補給させろ」

入口にたどり着いた途端、ロイドはいきなり結衣を抱きしめてキスをした。

ほんの数秒後に、結衣はロイドを突き飛ばした。

「だったら、ごはんを食べなさいよ！」

ロイドはメガネをかけながら、不思議そうに首を傾げる。

「なんか昨日から、やけに嫌がるな」

結衣はクルリと背を向けて、リビングに向かった。

「脈絡がなくて、唐突だからよ」

ソファに座るとローテーブルは低すぎるので、二人は床に座って朝食を摂った。食事をしながら今日の予定について話す。

「休みの日って、いつもは何してるの？」

「大概は何か作ってるな。朝から始めて、気が付いたら夜になる」

結衣は思わず苦笑する。仕事の日とあまり変わりがないのではないだろうか。

「じゃあ、今日も何か作るの？」

「それじゃ、おまえが退屈だろう。何がしたい？」

王宮内で出来る事など、限られている。結衣は少し笑って答えた。
「特に何も。あなたと一緒にいられるならば、それでいい。何もしない、ぼんやり座ってるだけでも」

「それもいいかもな」

そう言ってロイドは微笑んだ。

最後の一日は、ゆったりと過ぎていく。

ソファに座って他愛もない話をしたり、地下の遺跡をもう一度見に行ったり、以前ロイドに教えたオセロゲームで遊んだりした。そして時々キスを交わした。

やがて夕日が沈む頃になると、結衣は途端に寂しさを感じた。

かつて、途方に暮れたロイドがつぶやいた言葉を、自分も思わずにはいられない。

『どうして一日は、二十四時間しかないんだろう』

Last Kiss (11)

夜になり、夕食と風呂を終えた後、ロイドが酒ビンとグラスを持つてやって来た。ソファにどっかり座ると宣言する。

「今夜は飲むぞ。慰労会だ」

「え？ 何の？」

「おまえが見事に殿下の代役を務めきった事のだ」

見事と言われるほど大層な事は何もしていないが、ロイドは寂しさに沈みがちな結衣を元気づけようとしているのだろう。結衣は笑ってグラスを取った。

「うん。ありがとう」

「お疲れ」

グラスの縁を合わせて乾杯すると、結衣は舐めるようにして、ほんの少し酒を飲む。最後の夜に酔っぱらって寝てしまうわけにはいかない。

ロイドが注いでくれた琥珀色の酒は、どうやらブランデーのようだ。ほんのり干しぶどうの香りがする。

結衣とは対照的に、ロイドはピッチが速い。グラス半分とはいえ、すでに一杯目を飲み干して、二杯目をグラスに注いだ。

以前一緒に飲んだ時にも、顔色も変わらず酔ってるようには見えなかったので、元々酒に強いのもかもしれない。

ロイドはおもむろに立ち上がると、テラスから灰皿を持ち込んだ。そして部屋の隅にある机の引き出しからタバコを取り出すと、口にくわえて火をつけた。

じっと見つめる結衣の視線に気付いて、今さらながら問いかける。

「煙、イヤか？」

「ううん。この香りは好きだから、いい」

「そうか」

ロイドはタバコをくわえたまま、灰皿とタバコを持って、結衣の隣に戻ってきた。

「部屋の中で吸ってもいいの？」

「別に禁止はされていない。外の方が気持ちいいから、外で吸ってただけだ。思い出したようにしか吸わないしな」

なぜ思い出したように吸いたくなるのか、未だに謎だ。結衣はそれについて少し考えてみた。そして、ふと思いついた。

もしかしてロイドは、心が酷く乱れた時にタバコを吸うのではないだろうか。

気分転換とか、気持ちを落ち着かせる効果があると、タバコを吸う人は言っていた。タバコを吸わない結衣は、煙の匂いに苛々して、よけいに気分が落ち着かなくなるのだが。

最初に見たのは、結衣が東屋の穴に落ちそうになった日だ。ロイドは結衣に相当嫌われていると、勘違いしていた。次に見たのは、最初の異世界検索が中止になった夜。

そして多分、今は――。

本当は自分も平気ではないのに、結衣を元気づけようとしているロイドが、たまらなく愛しい。

結衣はロイドの肩に頭をつけて、もたれかかった。

「なんだ、もう眠くなったのか？」

ロイドが不服そうに問いかける。結衣は目を閉じて、少し笑みを浮かべた。

「違う。あなたに、くっついていたい」

からかうような調子で、ロイドが再び問いかける。

「欲情したのか？」

「そうかもね」

「……切り返しが、うまくいったな。なんか調子が狂う」

不満げなロイドの声がおかしくて、結衣はクスリと笑った。

しばらくの間そのまま、時々話をしながら酒を酌み交わした。

ロイドはタバコを吸いながら、次々と酒を飲み、結衣がわずか二

センチほどの酒をチビチビと舐めている間に、一瓶丸ごと空にした。タバコをもみ消すと「もう一本持ってくる」と言って、ロイドは席を立った。

見た目は平気そうだが、かなり酔っているのではないかと、心配して見ていると、リビングの出口に向かうロイドの足取りは、全く普通と変わらない。それでも心配なので、一応忠告してみた。

「あんまり飲み過ぎない方がいいんじゃない？」

ロイドがピタリと歩を止めた。立ち尽くしたまま、少し俯いて、肩が震えているように見える。

結衣は慌てて立ち上がると、ロイドに歩み寄った。

「やっぱり酔ってたのね。大丈夫？　気持ち悪いの？」

結衣が背中を撫でようと手を伸ばした時、ロイドがポツリとつぶやいた。

「酔ってない。素面しらふでなんかいられるか。なのちっとも酔えない」俯いたロイドの口から、堰せきを切ったように言葉がほとばしる。

「おまえが泣くのはイヤなんだ。だから、おまえを不安にさせないように、毅然ぎんぜんとしていようと思えば思うほど、心は平静でいられない。たとえ一分一秒でさえも、おまえがオレの手の届かない所へ行ってしまうなど、考えただけでも耐えられない。自分がこんなにも聞き分けのない子供だとは思わなかった」

ロイドは振り返ると、思い切り結衣を抱きしめた。

「本当はおまえをニッポンに帰したくなんかない。ずっと側にいて欲しい。どうしようもなく、おまえが好きだ。愛してる」

結衣の頬を涙が伝う。反して口元には笑みが浮かんだ。

「こめん、泣いちゃった。あんまり嬉しくて。でも、それって最初に言う言葉じゃない？　あなた、いきなりキスなんだもの」

「そんな事誰が決めた。おまえの唇には、つつい誘われるんだ」

「魔性の唇だものね。言わなくても分かったけど、どうして今まで言わなかったの？」

「おまえを悩ませたくなかった。だが、結婚しようと言っても揺る

がなかったし、おまえの決意が固い事は分かった」

「だって、せっかくあなたが私のためにマシンを改造してくれたし、帰った方がいい事も分かってるもの」

「そうか」

ロイドは少し間を置いて、しがみつくように結衣を抱きしめた。

「オレがもっと出来の悪い科学者ならよかったんだ。おまえをニッポンに帰す方法も、マシンの改造方法も分からなければ、おまえを帰さずに済んだのに」

結衣はなだめるように、ロイドの背中をポンポン叩いた。

「弱気なあなたなんて、らしくないわ」

「今だけだ。明日には忘れろ」

結衣はロイドを強く抱きしめ返した。

「忘れない。忘れたくない。消えない思い出を私に刻んで。決してあなたを忘れないように」

顔を上げると、ロイドが真顔で見下ろしていた。結衣が微笑んで見つめると、ロイドは無言のまま結衣を抱き上げ、寝室に向かった。寝室に入り、結衣をベッドに横たえると、ロイドは一旦結衣の元を離れた。結衣は横向きに転がり、彼の姿を目で追う。

終始無言のまま、ロイドは寝室の扉を閉め、再び結衣の元に戻ると、メガネを外して枕元に置き、ベッドの縁に腰掛けた。

黙って見下ろすロイドを見上げながら、結衣の心は妙に落ち着いていた。

ロイドは結衣の頬に片手を添えて、少し微笑んだ。その手が頬を滑り、首筋をたどると、結衣は思わず叫びそうになる声を飲み込み、身を硬くする。

ロイドの手は首筋を通過して肩を掴むと、結衣の身体をゆっくりとベッドに押しつけた。

結衣を見つめたまま、ロイドはゆっくり身体を倒し、覆い被さるようにして、優しく口づけた。一度唇を離すと、今度は激しく深く口づける。

執拗なまでに激しく長い口づけに、結衣が息も絶え絶えになった頃、ロイドの身体が離れた。

結衣が小刻みに息をつきながら目を開くと、ベッドに両手をついたロイドが、優しい表情で見下ろしていた。

「やっぱり今もつたいない。続きは今度だ。今日はもう寝ろ」

そう言い残し、メガネをかけてベッドを離れ、部屋を出て行くロイドを、結衣はぼんやりと見送った。

扉が閉じられる音を聞いて、結衣の中に沸々と怒りがこみ上げてきた。この期に及んで、また躲されたのだ。

（エロ学者のくせに、何？ この寸止め！）

結衣はベッドから跳ね起きると、叩くようにして寝室の扉を開け叫んだ。

「眠れるわけじゃないじゃない！ どうして?!」

ソファに座り、新たに開けた酒をグラスに注ごうとしていたロイドは、驚いたようにこちらを向いた。

最後の夜なのに……そう思うと涙が溢れ出した。

「ロイドがいい……あなたでなきゃイヤなの……」

ロイドは酒ビンを置いて微笑むと、結衣に向かって手を差し伸べた。そして静かに命令する。

「来い」

結衣は駆け寄り、ロイドにしがみつく。結衣の髪を撫でながら、ロイドは優しく諭すように言う。

「泣くな。オレもおまえがいい。もう、おまえでなきゃイヤだ。だが、それは今度だ」

「今度っていつ？ 私、明日日本に帰るのよ」

「いつとは明言できない」

「……イヤ……!」

結衣が涙声で益々しがみつくと、ロイドは少し間を置いて、小さくため息をついた。

「……ったく。突然会いに行って、驚かせてやろうと思ってたのに」

「え？」

驚いて見上げると、ロイドは自嘲気味に笑った。

「いや、詭弁だな。本当はさっきまで、行くべきか迷ってた。おまえはニッポンに帰ると決めているし、遺跡の装置を徹底的に調べて、時空移動装置を完成させるつもりだ。だが、調査に手間取れば何年かかるかわからない。当てのないオレを待って、人生を犠牲にしろとは言えない。だからおまえに想いを告げるつもりはなかった。酔った勢いでおまえを抱いて、それを思い出に終わりにしようと思った。だが酔えないんだ。焦れば焦るほどおまえを手放したくなくなる。それで、つい暴露してしまった。自制できなかったって事は、実は酔ってるのかもしれないな。もう、ごまかしはきかない。必ず時空移動装置を完成させる。だから待ってろ」

「うん。だけど、どうして今度なの？」

不思議そうに尋ねる結衣に、ロイドはイタズラっぽく笑う。

「馬は目の前に人参をぶら下げられると、よく走るんだ。食っちゃったら満足して走らなくなる。言っただろう？ 一分一秒でも、おまえを手放すのは耐えられない。オレは気の長い方じゃないんだ。そんなには待たせない。必ず近いうちに、おまえを迎えに行く」

高らかに宣言して、ロイドは結衣を抱きしめた。

今日で終わりじゃない。ロイドならきっと、すぐに迎えに来てくれる。そう思うと再び涙が溢れ、結衣はロイドの胸に頬を寄せた。

「うん。待ってる。あなたが出来の悪い科学者じゃなくてよかったねえ、もう一度聞かせて」

結衣のおねだりに、ロイドは耳元に顔を寄せる。

「愛してる」

そして、こめかみにキスをした。

「その言葉、ずっと聞きたかった」

耳元で囁かれるロイドの声に、背中がゾクリとしたが、それは不思議と心地よかった。

一足先に王に挨拶を済ませ、ロイドの研究室に行くと、すでに皆が集まっていた。

ロイドは人捜しマシンの設定中で、ローザンはメインコンピュータの時計を合わせている。王子とフィオナは休憩コーナーの椅子に座って談笑し、クラーク氏がその側に控えていた。

人捜しマシンのガラスの筒に朝日が眩しく反射し、結衣は思わず目を細める。

部屋に入ってきた結衣に気付いて、王子が立ち上がって手を振った。結衣が側に行くと、フィオナも席を立った。

「おかえり。父上にまた、結婚の事言われなかった？」

おもしろそうに尋ねる王子に、結衣はうんざりしたように、ため息をついた。

「言われたわよ。次に来た時は具体的に式の日取りを決めようって。なんか急がせるのよ。なんでなの？」

どうやらロイドが結衣を迎えに行く事は、すでに周知の事実らしい。

王子はクスクス笑いながら教えてくれた。

「ロイドの部屋に三泊したからだよ。月足らずの子供が生まれるかもしれないから、お腹が目立つ前に式を挙げた方がいいって言うんだよ」

結衣は目を見開いて、絶句した。どんどん顔が熱くなってくる。

「絶対、あり得ないから！」

結衣が力一杯否定すると、王子は意味ありげな目で結衣を見つめる。

「ふーん。そう？」

「そうよ！」

いくら勘繰られても、あり得ないものはあり得ない。キスでは子供が出来ない事くらい、結衣も知っている。

結衣は気を取り直して、フィオナに声をかけた。

「フィオナ。こんなエロ男たちは抜きにして、また女同士でおしゃべりしましょう」

「はい。またお会いできる日を楽しみにしていますわ」

フィオナは可憐な笑顔を見せた。結衣は続いてクラーク氏に右手を差し出す。

「クラークさん。色々お世話になりました」

クラーク氏は軽く頭を下げて、結衣の手を握り返した。

「いえ、こちらこそ無理なお願いを聞いていただいてありがとうございます」

むこうからロイドが大声で呼んだ。

「ユイ、そろそろ準備しろ」

「うん」

人捜しマシンの側まで行くと、ローザンが立ち上がり、笑顔で右手を差し出した。

「ユイさん。お疲れ様でした」

「ローザンも、関係ない事手伝わされて、お疲れ様。それに色々ありがとう」

結衣は手を握り返し、ポケットから以前もらった薬の袋を出して見せた。

「これ、ありがとう。ゆうべ服用しようかと思っちゃった」

「え？ いじめられたんですか？」

ローザンは困惑した表情で、結衣を見つめる。心なしか頬を赤らめているようだ。

「ちょっと、何か勘違いしてるでしょう」

結衣が目を細くして軽く睨むと、ローザンは頭をかいて照れくさそうに笑った。

「いやあ、ユイさんも最近、鋭くなってきましたね」

「もう！ この男共ときたら！」

結衣が呆れてため息をつくとき、ロイドが横からローザンの肩を叩

いた。

「ほら、おまえはさっさと配置に付け」

「はい」

ローザンは返事をして、メインコンピュータの前に座った。

「ユイ。おまえはこっちだ」

ロイドに促され、結衣はロイドに続き、ガラスの筒の中に入った。およそ一ヶ月前、この中で初めてロイドに会った。横柄で強引でセクハラな、第一印象最悪の奴を、まさかこんなに好きになるとは思ってもみなかった。

ロイドは中央まで来ると、そこに結衣を立たせた。

「転送直前に酷く眩しくなるが、あまり派手に動くなよ」

「うん」

結衣は電源を切ったままの小鳥を、ロイドに差し出した。

「この子をお願い」

「ああ。預かつとく」

受け取った小鳥をポケットに収めると、ロイドは結衣を抱きしめた。

「ちよっ……!」

結衣が慌てて筒の外に目を向けると、王子がフィオナを促して、二人でクルリと背を向けた。クラーク氏は静かに目を伏せている。

ローザンはコンピュータ画面を凝視していた。

「必ず迎えに行く。待ってろ」

「うん」

結衣は微笑んで頷いた。

「ロイドさん。同期開始一分前です」

ローザンのカウントダウンが始まった。

ロイドはもう一度、結衣を強く抱きしめ、頬に素早く口づけけると、早足でガラスの筒を出て行った。そして、手際よく筒の出入口を閉じる。

「三十秒前です」

ロイドがコントロールパネルの前に立ち操作を始めると、王子とフィオナがこちらを向いた。

「二十秒前です」

頭の上でライトが灯った。ロイドは尚も操作を続ける。

「十秒前です」

ロイドの動きが止まった途端、人捜しマシンがヴンと低くうなった。足元に小刻みな振動が伝わる。

「五秒前……四……三……二……一……開始」

マシンが一際高くなる、足元の振動も大きくなった。結衣の周りを徐々に光が包み始める。

筒の外に目を向けると、ローザンが笑顔で軽く手を振った。フィオナが愛らしく微笑んで会釈する。王子は大きく手を振っている。クラーク氏は静かに頭を下げた。

そして筒のすぐ側で、ロイドが淡く微笑みながら、熱い眼差しを送っていた。結衣はそれを見つめ返す。

もっとずっと見ていたいのに、周りの光が強さを増して、ロイドの姿を白く覆い隠した。

あまりの眩しさに、結衣は目を開けていられなくなり、両手で顔を覆う。

いつの間にか、涙が溢れていた事に気付いた。

終章

周りから音と光が消えている事に気が付いて、結衣は顔を覆っていた手を外した。

ゆっくりと辺りを見回し、見慣れた光景にホッと息をつく。日本の自分の部屋に無事帰ってきたようだ。

足元には一ヶ月前に寝転んでいたお昼寝マットが敷かれている。その上に土足で乗っている事に気付いて、思わずわめいた。

「あーっ！ 靴脱いで来ればよかった！」

慌てて靴を脱ぎながら、クランベールよりもひんやりした空気に、ひとつくしゃみをして、窓際の天井付近を見上げ、ガックリと項垂れた。

「やっぱ、エアコンつけっぱなし……」

だが、ふと違和感を覚えた。一ヶ月も行方不明になっていたのに、部屋の様子が変わっていない。誰かが捜しに来たなら、エアコンがついているのも妙だ。扇風機は止まっている。

外は日が傾き始めていた。いったい、今はいつなんだろう。

結衣は床に転がしておいた携帯電話を拾って開いた。バッテリーが切れていない。

そして、待ち受け画面に表示された日付を見て驚いた。結衣がクランベールに転送された日だったのだ。時間が三時間経過しているだけだ。

狐につままれたような気分になって、結衣が呆然と座り込んでみると、背後で耳慣れた声が聞こえた。

「ふーん。ここがニッポンか」

振り返ると、先ほど結衣が現れた場所に、ロイドが立っていた。

「ロイド？」

結衣が立ち上がると、ロイドは嬉しそうに笑いながら歩み寄って来た。

「待たせたな。迎えに来たぞ」

結衣は慌てて、ロイドを押し止める。

「キヤーツ！ 靴のまま歩き回らないで！ 靴脱いで！」

「なぜだ」

ロイドは立ち止まり、不思議そうに首を傾げる。

「一般的な日本家屋は、九十九パーセント土足禁止なのよ」

「面倒だな」

ブツブツ言いながら、靴を脱ぐロイドに結衣は言い返す。

「私にしてみれば、家の中で靴を履いてる外国人の方が不思議だよ」

靴を脱いで、結衣の広げた新聞紙の上に置くと、ロイドは部屋の中を見回してぼやいた。

「なんで、この狭い部屋に何もかも詰め込んでるんだ。少し他の部屋に移せばいいのに」

「私の部屋は、ここしかないのよ。王宮と一緒にしないでちょうだい」

結衣が腕を組んで苛々したように言うと、ロイドはそれを無視して、いきなり結衣を抱きしめた。

「会いたかった」

相変わらず、唐突で脈絡がない。結衣は諦めたように、軽くため息をついた。

突然ロイドが身体を離し、結衣の両肩を掴んで、睨みつけた。

「おい。どこのどいつだ」

「は？」

何を怒っているのか分からず問い返す。するとロイドは声を荒げた。

「おまえの首筋に、こんな跡をつけた奴だ」

「ええ?!」

結衣は慌ててロイドを振りほどき、洋服ダンスの横にある姿見を覗き込んだ。

確かに左の首筋に、赤紫の跡がある。それで王子もローザンも、エロい想像をしたのだと悟った。

「あーっ！ もう、こんな目立つところに！」

「だから、誰なんだ！」

結衣の後ろに立ったロイドが、鏡の中の結衣を睨む。結衣も鏡の中のロイドを見て尋ねた。

「知ってどうするの？」

「決まってるだろう。一発殴ってやらないと気が済まない。そして、そいつの前で、おまえはオレのものだと見せつけてやる」

「そう。じゃあ、教えてあげる。そこにいるわよ」

結衣は鏡の中のロイドを指差した。しかしロイドは、動じることなく言い返す。

「ふざけるな。オレのわけないだろう。あれから三ヶ月経ってるんだ」

結衣は振り返って叫んだ。

「私はさっき帰ってきたのよ！ でなきゃ、三ヶ月も王子様の服を着てるわけないでしょ？」

ロイドは黙って結衣の姿を見つめた後、表情を緩めた。

「そうか。オレか。時間がずれてたみたいだな。検討事項に上げておこう」

そう言ってロイドは、メガネを外しながら結衣を抱き寄せた。

「ちよっと！ いきなり何？」

結衣が抵抗すると、ロイドは鏡の中の自分を見つめてニヤリと笑った。

「もちろん。見せつけてやるんだ」

そして結衣に口づけた。

少ししてロイドが唇を解放すると、結衣は大きいため息をついた。
「なんか、こんなに早く会えるんだったら、ううべ泣いて損した気分」

「気にするな。今夜改めて泣かせてやる。オレの寝室で」

ロイドは耳元に顔を近づけ、囁いた。

「この間の続きだ」

結衣は背筋がゾクリとして、思わず平手を振り下ろした。

「この、エロ学者！」

パンと派手な音がした。てっきり避けると思ったのに、またしてもヒットしてしまった。

「あ、ごめん」

痛そうに顔を歪めたロイドの頬に、結衣はうろたえながら手を添えた。ロイドはムツとした表情で、その手首を掴む。

「本気で泣かせてやりたくなった。来い！ 帰ったら寝室直行だ」

結衣の手を引いて、ロイドは現れた場所に戻り、ポケットからリモコンのようなものを取り出した。

「あ、ちよつと待って！」

結衣はロイドに手を掴まれたまま、床に転がったりリモコンを拾い、エアコンの電源を切った。

「逃げないから、ちよつと離して」

ロイドが手を離すと、部屋の隅に避けられていたテーブルの上で置き手紙を書き、携帯電話を重し代わりに置いた。

「なんだ？」

「帰ってくる時、また時間がずれてたら、みんなが心配するから」

結衣は二人分の靴を持って、元の場所に戻り、ロイドの腕に掴まった。

「行くぞ」

ロイドがリモコンのスイッチを押すと、二人の身体は光に包まれ、すぐに忽然と部屋から消えた。

誰もいなくなった結衣の部屋に、レースのカーテンの隙間から西日が差し込む。

オレンジ色の夕日が、テーブルの上に置かれた結衣の手紙に、ス
ポットライトを当てた。

” クランベールに行ってきます ”

（完）

終章（後書き）

最後まで読んで頂いて、ありがとうございました。

お気に召しましたら、番外編集なども読んで頂けると嬉しく思います。

タイトルは、最後の1文からつけました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3803o/>

クランベールに行ってきます

2011年8月12日03時10分発行